県道直方行橋線道路改良事業関係埋蔵文化財調査報告１

延永ヤヨミ園遺跡
－Ⅴ－１・２・３区－

－福岡県行橋市所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書　第 238 集

２０１３

九州歴史資料館

1　延永ヤヨミ園遺跡遠景①(西から)

2　延永ヤヨミ園遺跡遠景②(東から)

１　Ⅴ－１ｂ区２号掘立柱建物跡

２　Ⅴ－１ｂ区２号土坑遺物出土状況

序

福岡県では、平成21年度から県土整備部の執行委任を受けて、県道直方行橋線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書では、平成21・22年度にかけて行った福岡県行橋市延永・吉国に所在する延永ヤヨミ園遺跡の発掘調査の記録で、県道直方行橋線道路改良事業に伴う調査報告書の第１冊目となります。

本遺跡は、京都平野に突き出す低丘陵上から斜面及び谷部に立地し、近隣には県指定史跡ビワノクマ古墳などが位置しています。

今回の調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭、古墳時代後期を中心とした大規模な集落跡と古代の遺構・遺物を確認しました。中でも古代の大型掘立柱建物跡３棟と大型土坑２基は、官衙的な性格を有しており、注目されます。また、周辺の調査成果と合わせて考えれば、本遺跡には古代の重要施設が展開している可能性が高まり、この地域の歴史を知る上で貴重な資料であるといえるでしょう。

本書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成に至る間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成25年３月29日

九州歴史資料館
館長　西谷　正

例　言

1．本書は、県道直方行橋線道路改良事業に伴って発掘調査を実施した、福岡県行橋市大字延永・吉国に所在する延永ヤヨミ園遺跡Ⅴ-1・2・3区の記録で、県道直方行橋線道路改良事業関連埋蔵文化財調査報告書の第1集にあたる。

2．発掘調査および整理報告は土木部道路建設課行橋土木事務所（現　県土整備部道路建設課京築県土整備事務所）の執行委任を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課および九州歴史資料館が実施した。

3．本書に掲載した遺構写真の撮影は宮地聡一郎・小澤佳憲・岡田論が、遺物写真の撮影は当館の北岡伸一が行った。空中写真については熊本航空株式会社に撮影を委託した。

4．本書に掲載した遺構図の作成は宮地・小澤・岡田が行い、発掘作業員が補助した。

5．出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池史哲の指導の下に実施した。

6．出土遺物及び図面・写真等記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7．本書に使用した分布図は国土交通省国土地理院発行の1／25,000地形図「行橋」を改変したものである。

8．本書で使用した方位は、世界測地系による座標北である。また、使用した座標系は平面直角座標系第Ⅱ系の座標である。

9．本書のⅠは小澤が、Ⅱ・Ⅳ・Ⅴは宮地が、Ⅲ-9は坂本真一が、坂本執筆分以外のⅢ及びおよびⅥは岡田が執筆した。編集は大庭孝夫の協力を得て、岡田が行った。

目　次

巻頭図版１　１　延永ヤヨミ園遺跡遠景①（西から）
　　２　延永ヤヨミ園遺跡遠景②（東から）
巻頭図版２　１　Ⅴ-１b区２号掘立柱建物跡
　　２　Ⅴ-１b区２号土坑遺物出土状況
序 …… i
例言 …… ii
目次 …… iii
図版目次 …… iv
挿図目次 …… vi
表目次 …… viii

Ⅰ　はじめに …… 1
　１　調査に至る経緯 …… 1
　２　調査の経過 …… 1
　３　調査・整理の組織 …… 4
Ⅱ　位置と環境 …… 6
　１　地理的環境 …… 6
　２　歴史的環境 …… 6
Ⅲ　Ⅴ-１区の遺構と遺物 …… 10
　１　調査の概要 …… 10
　２　竪穴住居跡（１a区） …… 10
　３　その他の遺構（１a区） …… 10
　４　竪穴住居跡（１b区） …… 13
　５　掘立柱建物跡（１b区） …… 46
　６　土坑（１b区） …… 54
　７　溝（１b区） …… 62
　８　性格不明遺構（１b区） …… 64
　９　その他の遺構出土、遺構外出土土器（１b区） …… 64
　10　その他の遺物（１b区） …… 66
　11　小結 …… 72
Ⅳ　Ⅴ-２区の遺構と遺物 …… 73
　１　調査の概要 …… 73
　２　竪穴住居跡 …… 73
　３　柵列・掘立柱建物跡 …… 88
　４　道路状遺構 …… 89
　５　溝 …… 91

6　その他出土遺物 …… 101
7　小結 …… 102
V　V-3区の遺構と遺物 …… 104
1　調査の概要 …… 104
2　竪穴住居跡 …… 104
3　掘立柱建物跡 …… 118
4　溝 …… 118
5　その他出土遺物 …… 124
6　小結 …… 124
VI　おわりに …… 126

図版目次

図版1　1　V-1a・1b区全景（右が北）　2　V-1a区1号竪穴住居跡（南から）
図版2　1　V-1b区1・2・3号竪穴住居跡（南から）
2　V-1b区1号竪穴住居跡カマド　3　V-1b区4号竪穴住居跡（南から）
図版3　1　V-1b区4号竪穴住居跡カマド
2　V-1b区5・11号竪穴住居跡（東から）
3　V-1b区6号竪穴住居跡（南西から）
図版4　1　V-1b区6号竪穴住居跡カマド　2　V-1b区7・28号竪穴住居跡（東から）
3　V-1b区8・9・10号竪穴住居跡（南から）
図版5　1　V-1b区12号竪穴住居跡（南西から）
2　V-1b区13号竪穴住居跡（東から）　3　V-1b区14号竪穴住居跡（西から）
図版6　1　V-1b区15号竪穴住居跡カマド（東から）
2　V-1b区16号竪穴住居跡（西から）　3　V-1b区17号竪穴住居跡（北から）
図版7　1　V-1b区20・21・22・26・27号竪穴住居跡（南から）
2　V-1b区20号竪穴住居跡カマド
3　V-1b区23・24・25号竪穴住居跡（南東から）
図版8　1　V-1b区23号竪穴住居跡カマド
2　V-1b区1号掘立柱建物跡完掘（南西から）
3　V-1b区1号掘立柱建物跡柱穴断面
図版9　1　V-1b区2号掘立柱建物跡完掘（東から）
2　V-1b区2号掘立柱建物跡柱穴断面
3　V-1b区18・19号竪穴住居跡、3号掘立柱建物跡完掘（南東から）
図版10　1　V-1b区3号掘立柱建物跡柱穴断面
2　V-1b区1号土坑断面　3　V-1b区1号土坑遺物出土状況
図版11　1　V-1b区1号土坑完掘　2　V-1b区2号土坑断面
3　V-1b区2号土坑完掘
図版12　V-1b区1・4・7・14（1）号竪穴住居跡出土土器

図版13　V-1b区14号竪穴住居跡（2）、1・2（1）号土坑出土土器
図版14　V-1b区2（2）号土坑、ピット・遺構外出土土器
図版15　V-1区出土瓦
図版16　V-1区出土土製品・石製品・鉄製品・鉄滓・鞴羽口
図版17　1　V-2区全景（南から）　2　V-2区全景（北から）
図版18　1　V-2区1号竪穴住居跡（南東から）
2　V-2区2号竪穴住居跡土器出土状況（南東から）
3　V-2区2号竪穴住居跡（南東から）
図版19　1　V-2区3号竪穴住居跡（北東から）　2　V-2区4号竪穴住居跡（北から）
3　V-2区5・6号竪穴住居跡（西から）
図版20　1　V-2区7～9号竪穴住居跡（南から）
2　V-2区7号竪穴住居跡カマド（南東から）
3　V-2区7号竪穴住居跡カマド掘方（南東から）
図版21　1　V-2区8号竪穴住居跡カマド（南から）
2　V-2区8号竪穴住居跡カマド掘方土層（南東から）
3　V-2区8号竪穴住居跡カマド掘方（南から）
図版22　1　V-2区10号竪穴住居跡（北から）　2　V-2区11号竪穴住居跡（東から）
3　V-2区1・2号掘立柱建物跡（南東から）
図版23　1　V-2区2号掘立柱建物跡（北から）　2　V-2区柵列跡（南西から）
3　V-2区1号溝（南東から）
図版24　1　V-2区1号溝コーナー部分（南東から）
2　V-2区1号溝北辺土器出土状況（南西から）
3　V-2区1号溝北辺土器出土状況（東から）
図版25　1　V-2区1号溝西辺土層（南から）　2　V-2区2号溝土層（東から）
3　V-2区2号溝土層（東から）
図版26　1　V-2区3号溝土層（北から）　2　V-2区3号溝（南東から）
3　V-2区道路状遺構（南東から）
図版27　V-2区2・4・5・8号竪穴住居跡出土土器
図版28　V-2区11号竪穴住居跡、1号溝出土土器
図版29　V-2区1号溝出土土器
図版30　V-2区1号溝出土土器、V-2区出土石器
図版31　1　V-3区全景（南東から）　2　V-3区全景（北東から）
図版32　1　V-3区南側（北東から）　2　V-3区南側（北東から）
図版33　1　V-3区1号竪穴住居跡（南から）
2　V-3区1号竪穴住居跡カマド掘方（南から）
3　V-3区2・3号竪穴住居跡（西から）
図版34　1　V-3区4号竪穴住居跡（北から）　2　V-3区5号竪穴住居跡（南西から）
3　V-3区6号竪穴住居跡土器出土状況（南西から）

図版35　1　V-3区6・7号竪穴住居跡（南西から）
　　2　V-3区8号竪穴住居跡（南から）　　3　V-3区9号竪穴住居跡（東から）
図版36　1　V-3区1号掘立柱建物跡（北から）
　　2　V-3区1号掘立柱建物跡P3土層（東から）
　　3　V-3区1号掘立柱建物跡P3（東から）
図版37　1　V-3区1号掘立柱建物跡P14（北から）
　　2　V-3区1号掘立柱建物跡P15土層（南東から）
　　3　V-3区2号掘立柱建物跡（北西から）
図版38　1　V-3区2号掘立柱建物跡P19（東から）
　　2　V-3区2号掘立柱建物跡P23土層（北西から）
　　3　V-3区1号溝（南西から）
図版39　1　V-3区1号溝コーナー部分（南東から）
　　2　V-3区1号溝土層（南から）　　3　V-3区1・4号溝土層（南西から）
図版40　1　V-3区2号溝土層（南東から）　　2　V-3区3号溝土層（南西から）
　　3　V-3区6号溝土層（北西から）
図版41　V-3区6号竪穴住居跡出土土器
図版42　V-3区1号溝出土土器、V-3区出土石・土製品

挿図目次

第1図　延永ヤヨミ園遺跡の位置 …… 1
第2図　延永ヤヨミ園遺跡調査区割（1／1,200） …… 3
第3図　周辺遺跡分布図（1／25,000） …… 7
第4図　延永ヤヨミ園遺跡V-1a・b区遺構配置図（1／300） …… 11
第5図　V-1a区1号竪穴住居跡実測図（1／60） …… 12
第6図　V-1a区出土土器実測図（1／3） …… 12
第7図　V-1b区1・2号竪穴住居跡実測図（1／60、1／30） …… 14
第8図　V-1b区1・2・3号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3） …… 15
第9図　V-1b区3・5・11号竪穴住居跡実測図（1／60） …… 17
第10図　V-1b区4号竪穴住居跡実測図（1／60、1／30） …… 18
第11図　V-1b区4・5・8～10号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3） …… 19
第12図　V-1b区8・9・10・12号竪穴住居跡実測図（1／60） …… 21
第13図　V-1b区6・28号竪穴住居跡実測図（1／60、1／30） …… 23
第14図　V-1b区7号竪穴住居跡実測図（1／60） …… 25
第15図　V-1b区6号竪穴住居跡出土土器実測図、7号竪穴住居跡出土土器実測図①（1／3）
…… 26
第16図　V-1b区7号竪穴住居跡出土土器実測図②、28号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）
…… 27
第17図　V-1b区13・14号竪穴住居跡実測図（1／60） …… 29

第18図　V-1b区12･13号竪穴住居跡出土土器実測図、14号竪穴住居跡出土土器実測図①(1／3)････　31
第19図　V-1b区14号竪穴住居跡出土土器実測図②（1／3）　･･･････････････････････　32
第20図　V-1b区14号竪穴住居跡出土土器実測図③（1／3）　･･･････････････････････　33
第21図　V-1b区15号竪穴住居跡実測図（1／60、1／30）･･･････････････････････　35
第22図　V-1b区15号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）･･･････････････････････　36
第23図　V-1b区16・17号竪穴住居跡実測図（1／60）･････････････････････････　37
第24図　V-1b区18・19号竪穴住居跡実測図（1／60）･････････････････････････　39
第25図　V-1b区20・21号竪穴住居跡実測図（1／60、1／30）･･･････････････････　41
第26図　V-1b区22～27号竪穴住居跡実測図（1／60、1／30）･･･････････････････　43
第27図　V-1b区16・18～23、25～27号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）　･･･････　45
第28図　V-1b区1号掘立柱跡実測図（1／80）　･････････････････････････････　47
第29図　V-1b区2号掘立柱跡実測図（1／80）　･････････････････････････････　49
第30図　V-1b区3号掘立柱跡実測図（1／80）　･････････････････････････････　51
第31図　V-1b区1～3号掘立柱建物跡出土土器実測図（1／3）　････････････････　52
第32図　V-1b区1号土坑実測図（1／60、1／30）･･･････････････････････････　53
第33図　V-1b区1号土坑出土土器実測図（1／3）　･････････････････････････　55
第34図　V-1b区2号土坑実測図（1／60、1／30）･･･････････････････････････　57
第35図　V-1b区2号土坑出土土器実測図①（1／3）･････････････････････････　58
第36図　V-1b区2号土坑出土土器実測図②、3号性格不明遺構、1号溝及び1号溝周辺出土
土器実測図（1／3）　･･　59
第37図　V-1b区3号土坑、3号性格不明遺構、1～3号溝実測図（1／40、1／100）　････　61
第38図　V-1b区その他の遺構出土土器実測図①（1／3）　････････････････････　63
第39図　V-1b区その他の遺構出土土器実測図②、遺構外出土土器実測図（1／3）　･･･････　65
第40図　V-1区出土瓦実測図①（1／3）･･･････････････････････････････････　67
第41図　V-1区出土瓦実測図②・土製品実測図（1／3）･･･････････････････････　69
第42図　V-1区石製品実測図（1／3）････････････････････････････････････　70
第43図　V-1区鉄器・鍛冶関連遺物実測図（1／2、1／3）････････････････････　71
第44図　V-2区遺構配置図（1／300）　･･････････････････････････････････　74
第45図　V-2区1・2号竪穴住居跡実測図（1／60）･････････････････････････　75
第46図　V-2区1・2号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）　･･････････････････　76
第47図　V-2区2号竪穴住居跡出土土器実測図①（1／3）　･･･････････････････　77
第48図　V-2区2号竪穴住居跡出土土器実測図②（1／3）　･･･････････････････　78
第49図　V-2区2号竪穴住居跡出土土器実測図③、3号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）
･･･　79
第50図　V-2区3・4号竪穴住居跡実測図（1／60）･････････････････････････　82
第51図　V-2区5・6号竪穴住居跡実測図（1／60）･････････････････････････　83
第52図　V-2区4～7号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）　･･････････････････　85
第53図　V-2区7～9号竪穴住居跡実測図（1／60）･････････････････････････　86

第54図　V-2区7・8号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）　87
第55図　V-2区10・11号竪穴住居跡実測図（1／60）　88
第56図　V-2区8・11号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）　89
第57図　V-2区1・2号掘立柱建物跡実測図（1／60）　90
第58図　V-2区道路状遺構実測図（1／60、土層断面図は1／30）　92
第59図　V-2区柵列跡実測図（1／60）、1～3号溝土層断面図（1／40）　93
第60図　V-2区1号溝北辺出土土器実測図①（1／3）　95
第61図　V-2区1号溝北辺出土土器実測図②（1／3）　96
第62図　V-2区1号溝北辺出土土器実測図③（1／3）　97
第63図　V-2区1号溝北辺出土土器実測図④（1／3）　98
第64図　V-2区1号溝西辺出土土器実測図（1／3）　99
第65図　V-2区1号溝出土土器実測図（1／3）　100
第66図　V-2区ピット・遺構面出土土器実測図（1／3）　102
第67図　V-2区出土石製品実測図（1／3）　103
第68図　V-3区遺構配置図（1／300）　105
第69図　V-3区1号竪穴住居跡実測図（1／60、カマドは1／30）　106
第70図　V-3区1～3号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）　107
第71図　V-3区2～5号竪穴住居跡実測図（1／60）　108
第72図　V-3区5号竪穴住居跡出土土器実測図①（1／3）　110
第73図　V-3区5号竪穴住居跡出土土器実測図②（1／3）　111
第74図　V-3区6～8号竪穴住居跡実測図（1／60）　112
第75図　V-3区6号竪穴住居跡出土土器実測図①（1～5は1／3、6～8は1／4）　113
第76図　V-3区6号竪穴住居跡出土土器実測図②（9～12・14は1／4、13・15・16は1／3）　114
第77図　V-3区6号竪穴住居跡出土土器実測図③（17・18は1／4、他は1／3）　115
第78図　V-3区7・9号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）　116
第79図　V-3区9号竪穴住居跡実測図（1／60）　117
第80図　V-3区1号掘立柱建物跡実測図（1／80）　119
第81図　V-3区2号掘立柱建物跡実測図（1／80）　120
第82図　V-3区1～6号溝土層断面図（1／40）　122
第83図　V-3区1・2号溝、ピット、遺構面出土土器実測図（1／3）　123
第84図　V-3区出土石・土製品実測図（1・2は1／3、3・4は1／2）　125

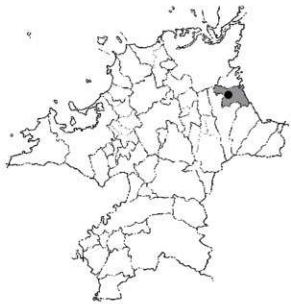
表目次

第1表　V-1b区掘立柱建物柱穴断面観察表　50
第2表　V-1区出土土製品・石製品・鉄器・鍛冶関連遺物観察表　71
第3表　V-2区出土石製品観察表　103
第4表　V-3区出土石製品・土製品観察表　125

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

福岡県道28号直方行橋線は、福岡県直方市から北九州市小倉南区を経て行橋市を結ぶ道路である。行橋市から北九州市へと至る道はカルスト台地である平尾台を通過しており、特に北九州市側から平尾台へ至る唯一のルートとしてよく整備されているが、北九州市側から平尾台へと上るルートとしては行橋市椿市より先が１車線となっており通行量も少ない。これに対し、椿市から中津熊へと至る約４kmの区間は２車線道路としてよく整備されており、吉国・延永の付近では福岡県指定史跡ピワノクマ古墳の横を通る旧道の北側にあたる丘陵裾部に、丘陵部を迂回するバイパスも建設されている。



第１図　延永ヤヨミ園遺跡の位置

このバイパスの東側端部が旧道と合流する先には、ピワノクマ古墳の乗る独立丘陵から東に突き出した段丘がひろがっている。この段丘上を、九州東側を南北に貫く高規格道路として整備が進められている東九州自動車道が縦断して建設されることになり、またこれにあわせて隣接地に一般国道201号バイパスも建設されることになった。これまで、延永から中津熊まで延びて一般国道201号に接続していた県道直方行橋線も、一般国道201号バイパスに接続するよう路線を変更することとなり、当該段丘上を北から南に向かって延びることとなった。

建設計画は、福岡県教育庁総務部文化財保護課が平成20年度末に行った行橋土木事務所に対する次年度事業計画の照会のなかで知らされ、県文化財保護課では行橋市教育委員会と建設予定地における埋蔵文化財の包蔵状況について協議を行った。その結果、当該段丘上は広く全面に濃密に埋蔵文化財が包蔵されていること、工事予定地の東南側隣接地では平成20年度に東九州自動車道の建設に先立つ発掘調査が行われ、弥生時代から古代にかけての遺構が多く発見されたことなどから、工事予定地についても試掘調査をするまでもなく非常に濃密に埋蔵文化財が包蔵されているであろうとの結論に至った。

これを受けて県文化財保護課は行橋市教育委員会と発掘調査に関する協議を行い、県文化財保護課が実施することで合意に至った。調査は文化財保護課調査第一係により平成21年度から始められ、途中で組織改編により担当部局が九州歴史資料館文化財調査室へと移動しつつ、平成24年度まで行われた。本書では、このうち平成21年度と22年度の一部の調査成果について報告する。

2　調査の経過

平成21年度の調査

以上のような経緯により、まず平成21年度に文化財保護課調査第一係が担当部局となって、土木部道路建設課（行橋土木事務所）からの執行委任により段丘の北端部の調査を行うこととなった。

延永ヤヨミ園遺跡の調査は東九州自動車道建設・一般国道201号バイパス建設工事に伴って平成19年度から継続的に行われてきており、東九州自動車道関連の調査区をⅠ・Ⅱ区、一般国道201号バイパスの調査区をⅢ・Ⅳ区と呼称していた。そこで、これに続く県道直方行橋線の調査区については全体をⅤ区と呼び、その中で平成21年度の調査区をⅤ-1区とすることとした。Ⅴ-1区は県道本線部分と旧道との接続部分からなり、接続部分は本線より西に張り出すように計画されていた。従って、調査区を二分し、張り出し部分を1a区、本線部分を1b区とした。両者は旧地形では一体のものであるが、調査前状況は両者の間に宅地に進入するための私道として切り通し状に斜路が作られていて部分的に大きく削平されており、遺構が残されていないと判断し、この部分を調査対象外としたために、調査区が二分されたものである。

Ⅴ-1区の調査は、平成21年6月26日より開始した。重機を用いての表土剥ぎに着手するとともに、作業員による現場周辺の環境整備を同時並行で進めた。調査対象地は表土が極めて薄く、3cmほどで橙茶褐色粘質土の均質な地山を検出し、暗褐色粘質土からなる遺構が数多く分布している状況が確認された。そこで、Ⅰa区の表土剥ぎがおおよそ終了した7月3日より、人力による遺構検出、続いて遺構の掘削に入っていった。

7月9日より調査員を1名増員したが、当初からの担当者はこれと入れ替わりに7月13日より行橋市内の別の県道拡幅にかかる発掘調査に入り、終了後はさらに飯塚市の県営住宅建て替えにかかる調査を担当することになったため、以降調査担当者1名の体制で発掘調査を継続した。現場は遺構密度が極めて高い上に住宅解体時のゴミ穴掘削によりあちこちが大きく乱されていたため遺構の連続性の把握に手間取り、さらに後半は土が乾いて極めて硬く締まってきたため遺構の掘り下げに大変な労力が必要となり、当初予定していた調査期間を大幅に越えることとなったが、11月6日にはおおよその遺構の調査を終えてラジコンヘリコプターにより空中写真撮影を行い、翌日、現地説明会を行った。

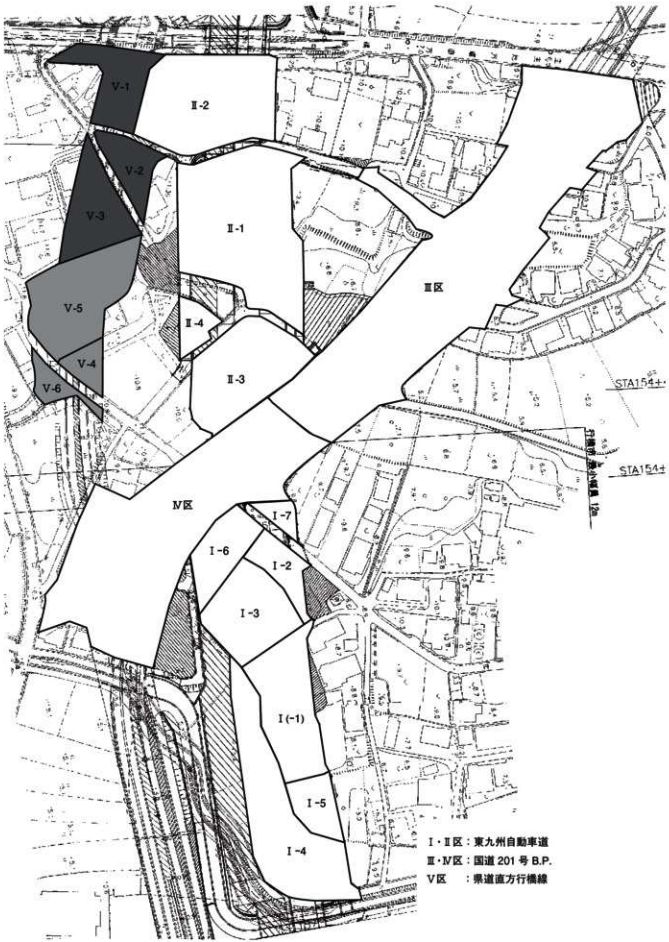
その後未掘部分の調査、記録の作成などを経て12月7日に人力による掘削を全て終了して重機による埋め戻しを行い、12月11日には全ての現場作業を終了してこの年の発掘調査を終了した。

平成22年度の調査

平成22年度当初の組織改革により、事業担当部局が県土整備部道路建設課、行橋土木事務所が（豊前土木事務所と再編して）京築県土整備事務所に変更された。調査は平成21年度にひきつづき文化財保護課調査第一係が担当部局となり、平成22年7月13日に京築県土整備事務所と協定を結び、執行委任により調査を行うこととなった。調査は平成21年度のⅤ-1区に南接する地区からはじめ、現道を境に調査区をⅤ-2区、Ⅴ-3区、Ⅴ-4区と呼称した。

Ⅴ-2区の調査は平成22年8月11日から重機による掘削を開始し、8月17日より機材の搬入、人力による掘削は8月19日より開始した。Ⅴ-1区と同様に住宅解体時のゴミ穴が多く掘削されており、またこの年の夏は猛烈な暑さであったため調査の進捗には手間取ったが、10月18日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、10月26日に記録類の作成を終了。10月27・28日に重機による埋め戻しを行った。

Ⅴ-3区の調査は北端部分の面積が狭小であったため重機が使用できず、先行して人力による掘削を開始したが、大部分は10月29日から重機による掘削を開始し、11月8日より人力による遺構検出



第２図　延永ヤヨミ園遺跡調査区割（１／1,200）

を開始した。V-2区と異なり住宅解体時のゴミ穴は少なかったものの、全体的に大きく削られており、他の調査区に比べて遺構密度が薄く、残存状況は良くなかった。12月24日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、その後の調査は主力をV-4区に移したが、一部遺構が調査区外に延びる箇所については調査区の拡張を行い、V-3区の調査は平成23年1月19日に終了した。

V-4区の調査は用地買収の進捗状況の関係もあり、V-3区から南側に離れた箇所に調査区を設定した。調査は平成22年12月21日から重機による掘削を開始し、平成23年1月6日より人力による作業に着手した。他の調査区よりも面積は狭いものの遺構密度が著しく高く、また雨によって調査区が水没することもしばしばあったことから調査の進捗には手間取ったが、3月4日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、3月11日に記録類の作成を終了した。重機による埋め戻しは3月15日より行い、3月17日に平成22年度の発掘調査を終了した。

3　調査・整理の組織

発掘調査（平成21・22年度）及び整理・報告書作成（平成24年度）の関係者は下記の通りである。平成23年度以降は組織改革により、埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館に移管されており、平成24年度の整理・報告書作成と本書の発行は九州歴史資料館が行った。

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
福岡県教育委員会				
総　括				
教育長	森山　良一	杉光　誠	杉光　誠	杉光　誠
教育次長	亀岡　靖	荒巻　俊彦	荒巻　俊彦	荒巻　俊彦
総務部長	荒巻　俊彦	今田　義雄	今田　義雄	西牟田龍治
文化財保護課長	平川　昌弘	平川　昌弘	伊崎　俊秋	伊崎　俊秋
副課長	池邉　元明	伊崎　俊秋		
参事兼課長技術補佐	小池　史哲	小池　史哲		
	伊崎　俊秋			
課長補佐	前原　俊史	日高　公徳	甲木　浩	桂木　俊樹
参事補佐	日高　公憲			
参事補佐兼管理係長			桂木　俊樹	
参事補佐兼調査第二係長	飛野　博文	飛野　博文		
管理係長	富永　育夫	富永　育夫		石橋　伸二
調査第一係長	吉村　靖徳	吉村　靖徳		
企画係長			吉村　靖徳	吉田　東明
庶　務				
事務主査	藤木　豊	藤木　豊	伊藤　幸子	伊藤　幸子
同				綾香　博充
主任主事	近藤　一崇	近藤　一崇	内山　礼衣	加藤　教子
同	野田　雅	内山　礼衣		

主事	仲野　洋輔	仲野　洋輔	仲野　洋輔	
調査・報告・整理				
参事補佐	新原　正典	新原　正典		
技術主査			宮地聡一郎	宮地聡一郎
主任技師	小澤　佳憲	宮地聡一郎		
同		小澤　佳憲		
同		岡田　論		
技師	岡田　論			

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
九州歴史資料館				
総　括				
館長			西谷　正	西谷　正
副館長			南里　正美	篠田　隆行
総務室長			圓城寺紀子	圓城寺紀子
文化財調査室長			飛野　博文	飛野　博文
文化財調査室長補佐				吉村　靖徳
文化財調査班長			小川　泰樹	小川　泰樹
庶　務				
企画主査			塩塚　孝憲	長野　良博
事務主査				青木　三保
主任主事			熊谷　泰容	近藤　一崇
同			近藤　一崇	
主事			谷川　賢治	谷川　賢治
調査・報告・整理				
参事補佐			小池　史哲	小池　史哲
技術主査				小澤　佳憲
主任技師			小澤　佳憲	岡田　論
同			岡田　論	

なお、発掘調査にあたっては、地元行橋市とその周辺より多くの方々が作業員として参加され、太陽照りつける酷暑の中、あるいは寒風吹きすさび雪のちらつく中、熱心に作業にあたられた。また、発掘調査中には、行橋市教育委員会教育課・京築教育事務所・行橋土木事務所・京築県土整備事務所にさまざまにご協力いただいた他、地元の方々のご理解・ご協力をいただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

延永ヤヨミ園遺跡が立地する京都平野北部は、東流する小波瀬川と長峡川に挟まれるようにいくつもの段丘が発達している。これらの段丘上は平坦面を持つものも多く、多くの遺跡が展開する格好の舞台を提供している。また古墳時代の海岸線は現在よりもかなり内陸に入っていたことが想定されており、行橋市中津熊など「津」の付く地名があること、また文献に見える「草野津」の推定地として行橋市草野付近が考えられることから、延永ヤヨミ園遺跡の東側の至近距離に当時の海岸線があったことが想定される。

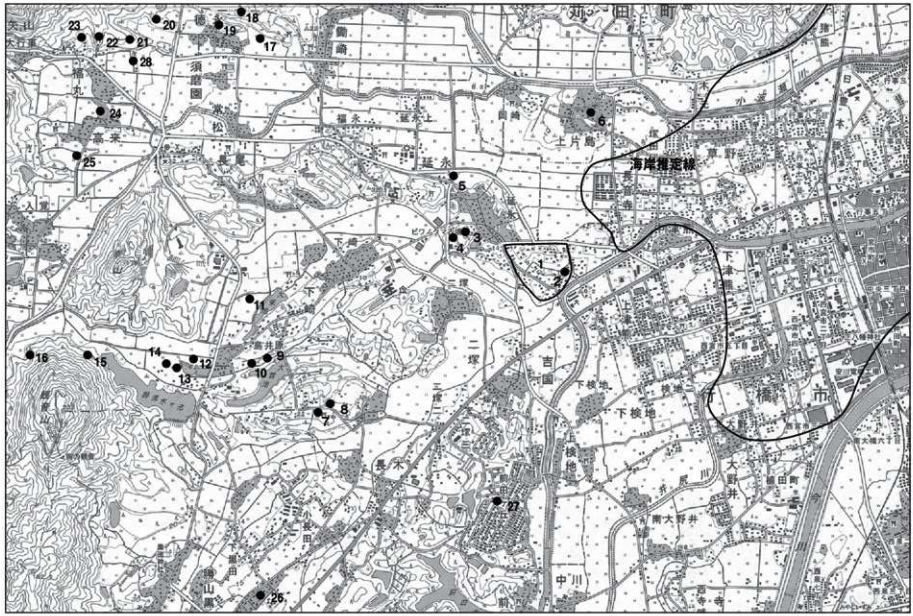
延永ヤヨミ園遺跡は小波瀬川右岸の東西方向に延びる段丘の先端、低位段丘面に立地し、標高は約10m、小波瀬川流域の低湿地部との比高差は約６mである。付近は幅200m程、長さ900m程の緩やかな平坦部が広がり、現在の集落は北西部のより標高の高い箇所に占地し、遺跡の部分は南東部の、元々主に畑として利用されていた箇所にあたる。付近の段丘上に立地する遺跡と比べると広い平坦面を有し、また当時の海岸線、及び港（津）を臨む突出部に立地するという点からも、その重要性を推し量ることができる。明治22年に編成された延永村の中でも、遺跡の存在する現在の集落はその中心的な存在であったことも、当該地の立地条件の良さを物語っていよう。

2　歴史的環境

縄文時代の遺跡は下崎瀬戸溝遺跡(1)で埋設土器が確認されているがごくわずかに留まり、付近で人々の活動の痕跡が明確になるのは弥生時代になってからである。特に中期以降では、長木宮ノ下遺跡や下崎ヒガンデ遺跡、下崎瀬戸溝遺跡、下崎丸山遺跡、入覚大原遺跡(2)、高来小月堂遺跡(3)、徳永泉古墳周辺(4)等で弥生時代中期から後期の集落及び墓域が段丘上に多数確認されている。中でも入覚大原遺跡は幅５mの大溝が確認され、また墓域と集落域が明確に分かれる様相が見られるなど、当時の集落構造を考える上で重要な発掘調査成果が得られている。またやや離れるが、長峡川左岸の稗田丘陵上の前田山遺跡(5)では、弥生時代前期から継続して集落や墓地が営まれ、特に後期終末の石棺墓からは中国製の内行花文鏡が副葬されており注目される。

古墳時代にも下崎ヒガンデ遺跡や入覚大原遺跡、高来小月堂遺跡、徳永法師ヶ坪遺跡(6)等で後期の集落跡が確認されているが、この地域で集落遺跡は少数に留まる。延永ヤヨミ園遺跡と小波瀬川の低湿地部を挟んで対岸に位置する上片島遺跡では、近年の九州歴史資料館による調査で古墳時代前期を主体とした集落跡が確認されており、その立地の点からも関係性がうかがえる。

一方古墳に目を転じれば、６世紀前半の八雷古墳(7)は全長74m、当該期としては豊前地方最大の前方後円墳と言え、大阪府羽曳野市の白髪山古墳と墳丘形態が類似する等、畿内とのつながりがうかがえる首長墓として注目され、墳丘からは円筒埴輪や武人・家形等の形象埴輪が採集されている。続く６世紀中頃には全長82mの庄屋塚古墳(8)が築かれ、複室構造の横穴式石室が特徴的である。これらの古墳は位置的にみやこ町の黒田地区遺跡群の集落跡との関係で捉えるべきであろう。この地域の６世紀後半の群集墳としては天サヤ池西古墳群(9)や長木大首池北古墳群で複室構造の横穴式石室が確認されているが、注目されるのは小波瀬川上流域北岸の平尾台より東へ派生する舌状丘陵上に巨石墳や前方後円墳が集中する点である。６世紀後半から７世紀初頭にかけては徳永丸



第３図　周辺遺跡分布図（１／25,000）

山古墳、二つの横穴式石室を持つ徳永夫婦塚古墳[10]、徳永泉古墳[11]が築かれ、平尾台寄りには6世紀後半から7世紀代にかけて福丸古墳群[12]、引石古墳、願光寺裏山古墳[13]と終末期の巨石墳が集中する。後の京都郡衙推定地付近でもあり、椿市廃寺とも至近距離にあるこの地域の重要性を物語っていよう。

延永ヤヨミ園遺跡の位置する段丘面では、独立丘陵上にはビワノクマ古墳[14]が築かれる。かつては径25m程の円墳と考えられていたが、近年の調査で全長50m以上の前方後円墳の可能性が指摘されている。大刀、鉄鏃、銅鏡等が副葬されており、時期は諸説あるが4世紀末から5世紀前半の築造と考えられる。また墳丘の下には弥生時代後期終末頃の箱式石棺墓等が確認されており、延永ヤヨミ園遺跡との関係を考える上で興味深い。また延永ヤヨミ園遺跡の位置する段丘西側斜面にはビワノクマ遺跡で横穴墓[15]が確認されている。6世紀末の築造と考えられ、鉄鏃がまとまって副葬される点が特筆される。

また詳細は不明ながら、延永ヤヨミ園遺跡内にある吉国木実堂古墳は、その位置から延永ヤヨミ園遺跡と密接な関係がうかがえる上、海岸線を臨む段丘先端部に立地する点でもその重要性を暗示させる。

この地域における初期寺院としては椿市廃寺[16]が知られる。7世紀末頃ないし8世紀初頭頃の建立と考えられ、朝鮮半島系の軒丸瓦や軒平瓦の存在は、豊前地方の初期寺院によく見られる特徴であるが、注目されるのは平城宮の軒丸瓦と同笵瓦を持つ点であり、藤原広嗣の乱に際し、兵五百を率いて官軍に帰順した京都郡大領の楮田勢麻呂との関わりも指摘されている。

延永ヤヨミ園遺跡が位置する段丘の北側裾部の延永水取遺跡[17]では、東西に延びる幅4m程の2条の溝状遺構が確認されている。行橋市草野に比定される草野津と椿市廃寺とを結ぶ運河の可能性も指摘されている。草野津については「国津」の性格が考えられており、大宰府への官人の赴任、また帰任の際に豊前路が利用された場合には、ここを利用したことが想定され、重要な津として機能したことが考えられる。

なおこの地域は京都郡にあたるが、京都郡衙の候補地がいくつか指摘されている。その中でも行橋市須磨園には小字に「コウゲ」や「長ヶ坪」、「蔵淵」が見え、注目されている。付近は6世紀後半以降に有力古墳が集中する地域であり、先の椿市廃寺の存在と合わせて、京都郡の中心地域として評価できよう。その他にも高来井正丸遺跡[18]からは石帯が出土し、また苅田町になるが、谷遺跡[19]では唐三彩陶枕片が出土しており、この地の重要性を物語っている。

なお、隣接する仲津郡内でも官衙遺跡がいくつか存在するが、その中の一つ崎野遺跡[20]では掘立柱建物跡が確認されており、郡衙との関係性が指摘されている。

註

（1）行橋市史編纂委員会2006『行橋市史』資料編　原始・古代
（2）註1に同じ
（3）行橋市教育委員会2011『高来小月堂遺跡・高来井正丸遺跡・高来殿屋敷遺跡』
　行橋市文化財調査報告書第38集
（4）行橋市教育委員会2002『徳永泉古墳・徳永法師ヶ坪遺跡』行橋市文化財調査報告書第30集
（5）行橋市教育委員会1987『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集
（6）註4に同じ
（7）行橋市教育委員会1984『八雷古墳』行橋市文化財調査報告書第14集
（8）福岡大学人文学部考古学研究室2004『福岡県京都郡における二古墳の調査ほか』
　福岡大学考古学研究室研究調査報告第3冊
（9）註1に同じ
（10）註1に同じ
（11）註4に同じ
（12）行橋市教育委員会1997『福丸古墳群』行橋市文化財調査報告書第25集
（13）註1に同じ
（14）註1に同じ
（15）福岡県教育委員会2001『農林漁業用揮発油税財源身替農免農道関係埋蔵文化財調査報告書』
　福岡県文化財調査報告書第159集
（16）行橋市教育委員会1980『椿市廃寺』行橋市文化財調査報告書第8集
　行橋市教育委員会1996『椿市廃寺Ⅱ』行橋市文化財調査報告書第24集
（17）註15に同じ
（18）註3に同じ
（19）苅田町教育委員会1990『谷遺跡調査報告書』苅田町文化財調査報告書第11集
（20）行橋市教育委員会2001『崎野遺跡』行橋市文化財調査報告書第28集

Ⅲ　V-1区の遺構と遺物

1　調査の概要

V-1区の対象面積は1a区約280㎡、1b区約920㎡、合計約1200㎡である。標高約10.5mで、北側は県道により急崖になっており、延永ヤヨミ園遺跡が立地する台地の北端である。

遺構は弥生時代終末から古墳時代後期にかけての竪穴住居跡が1a区・1b区合わせて29棟、古代の大型掘立柱建物3棟、大型土坑2基、溝3条の他、ピットが多数検出された。全体的に遺構密度が極めて高く、重複度合いも著しい。

2　竪穴住居跡（1a区）

1号竪穴住居跡（図版1、第5図）

1a区西寄りに位置し、主軸はN-45°-Wである。北西半部が調査区外に延び、かつ、北東部は1号溝によって破壊されている。規模は南東辺574cm、南西辺327cm以上、北東辺78cm以上、北西辺は不明であるが、平面形は方形であろう。残存する深さは約5cmである。住居内遺構は、壁溝が南東辺南半部と南西辺で確認され、主柱穴は2基が検出された。主柱穴の位置が竪穴住居跡の南東側に寄っているため、4本柱構造であると考えられる。従って、対になる柱穴は調査区外に位置する。柱穴の直径は約30cm、深さ約15cmである。図化できる遺物がない。

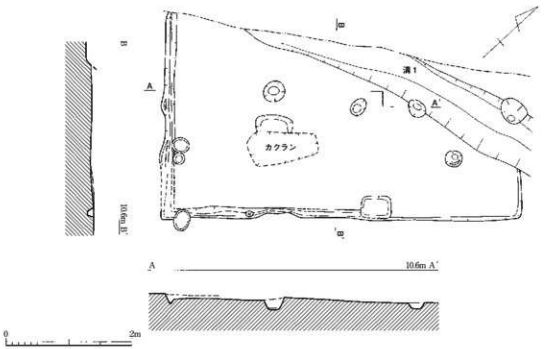
3　その他の遺構（1a区）

溝1条、小規模なピットが散在する。溝の時期を示す遺物の出土はなく、ピット群は建物を復元できるような位置関係を調査区内では見出せない。

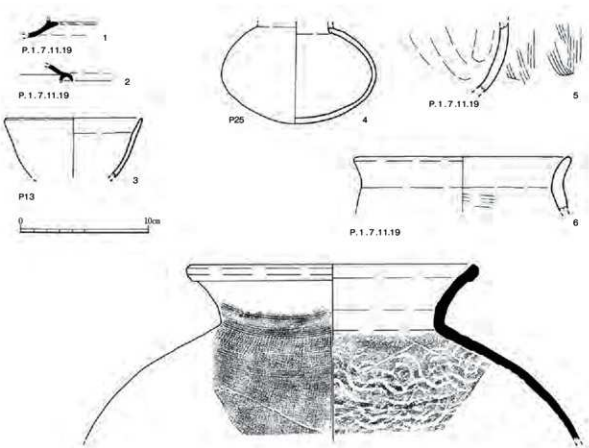
出土遺物（第6図）

1・2・5・6はP1・7・11・19から出土した。1は須恵器杯の口縁部、2は須恵器杯蓋の口縁部である。3はP13から出土した。出土位置は異なるが、4と胎土が近似する。4はP25から出土した。小型の壺胴部であり、扁球形を呈し、底部は丸底である。調整は内外面ナデである。胎土は良だが、白色の砂粒を多く含む。また、内外面ともに赤色顔料が確認され、九州歴史資料館内の蛍光X線分析装置で分析した結果、内外面ともに鉄分の顕著な反応が得られた。従って、外面にはベンガラが塗られ、壺自体はベンガラを貯蔵する容器であったと考えられる。5は土師器甕か。胴部のみの破片である。調整は外面が粗いハケメ、内面がナデである。胎土は精良であり、色調は赤褐色である。6は土師器甕の口縁部である。調整は表面が磨滅しており不明である。胎土はやや良、砂粒は少なく、色調は淡赤褐色である。7は遺構外出土の須恵器甕で、口縁部から肩部の破片である。口縁はほぼ全周し、口径23cmである。胎土は良、若干砂粒や雲母が含まれる。調整は口縁部が内外面回転ナデ、肩部外面がタタキ後回転ナデ、内面は当具痕の上から回転ナデであるが、当具痕を消しきれていない。総じて古墳時代後期の遺物が中心であるが、1号竪穴住居跡の時期については不明である。

第４図　延永ヤヨミ園遺跡Ｖ－１a・b区遺構配置図（1／300）



第５図　Ⅴ－１a区１号竪穴住居跡実測図（１／60）



第６図　Ⅴ－１a区出土土器実測図（１／３）

4　竪穴住居跡（1b区）

1号竪穴住居跡（図版2、第7図）

1b区北東部に位置し、主軸はN-10°-Wである。北半部は1・3号竪穴住居跡と重複し、南辺は2号溝によって破壊され、東南部は調査区外に延びる。重複関係から3号竪穴住居跡に後続する。規模は北辺420cm、西辺334cm以上、東辺100cm以上、南辺は不明であるが、平面形は方形であろう。残存する深さは約10cmである。主柱は検出されたピットの位置関係から2本柱であると想定されるが、住居跡の東側が調査区外に延びるため、西側主柱穴が確認されたのみである。また、北壁中央でカマドが検出され、燃焼部中央には石製の支柱が立った状態で出土した。

出土遺物（図版12、第9図）

1～4は土師器杯である。1～3は口縁部がわずかに外反する。胎土は精良、砂粒をほとんど含まず、色調は赤褐色である。調整は内面がナデ、外面はミガキである。また、2（No. 2）は外面に赤色顔料が確認された。4は口縁部が内湾する。胎土はやや精良、1～3より砂粒がやや多く、色調は褐色である。調整は表面が剥離しており不明である。5は須恵器の器台脚部か。両側面に透かしがあり、わずかだが下方に端部が残る。また、外面には波状文が施される。6はP56から出土した口縁部の小片である。土師器甕か。7（No. 3）は土師器甕口縁部である。口縁部は外反し、胴部はやや長くなる。外面は被熱により一部赤褐色である。8（No. 1）は土師器壺の底部か。厚みがあり、丸底である。調整は外面がナデ、内面は表面が剥離しており不明である。9は土師器甑あるいは鉢か。口縁部はやや外反する。被熱により口縁部付近が一部赤化する。調整は外面がナデ、内面は縦方向のケズリである。

カマドの存在や出土土器から古墳時代後期頃の竪穴住居跡と考えられる。

2号竪穴住居跡（図版2、第7図）

1b区北東部に位置し、主軸はN-10°-Wである。東側3分の2は1・3号竪穴住居跡に破壊され、西側3分の1が残存するが、南辺はわずかな段差として認識できる程度である。重複関係から3号竪穴住居跡より先行する。規模は北辺320cm以上、西辺450cm、南辺380cm以上で、平面形は方形であろう。残存する深さは約6cmである。住居内遺構は住居中央東西軸上に主柱穴となりうるピット2基がある。各々近接あるいは重複するピットがあり、建替えの可能性も考えられる。

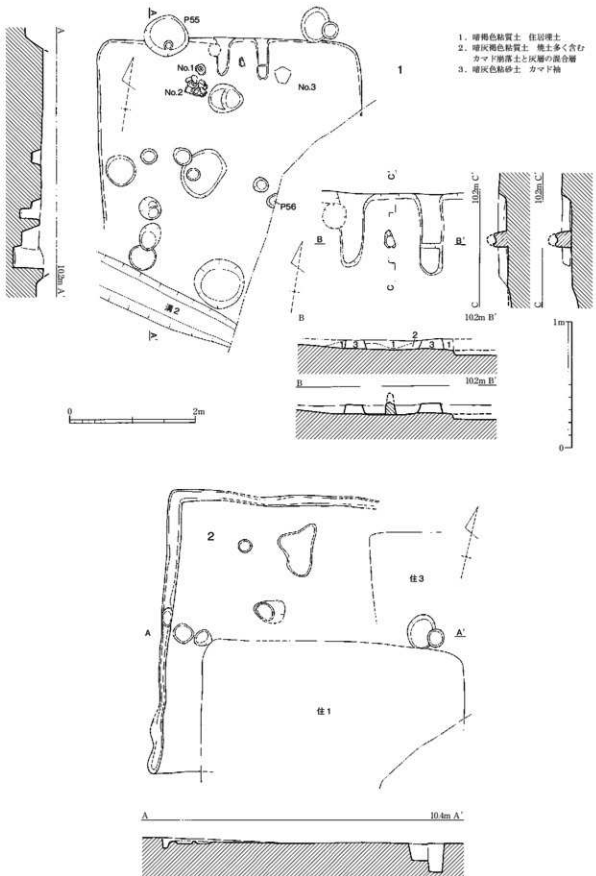
出土遺物（第9図）

10は土師器甕である。口縁部は強く外反し、調整は内外面ナデである。11は土師器壺か。口縁部はやや外反する。調整は表面が磨滅しており不明である。12は土師器壺か。底部は厚く、丸底である。調整は内外面ナデである。14は土師器杯である。胎土は精良、砂粒をほとんど含まず、色調は内外面赤褐色である。14は土師器甕か。口縁部は内湾気味であり、端部は外反する。

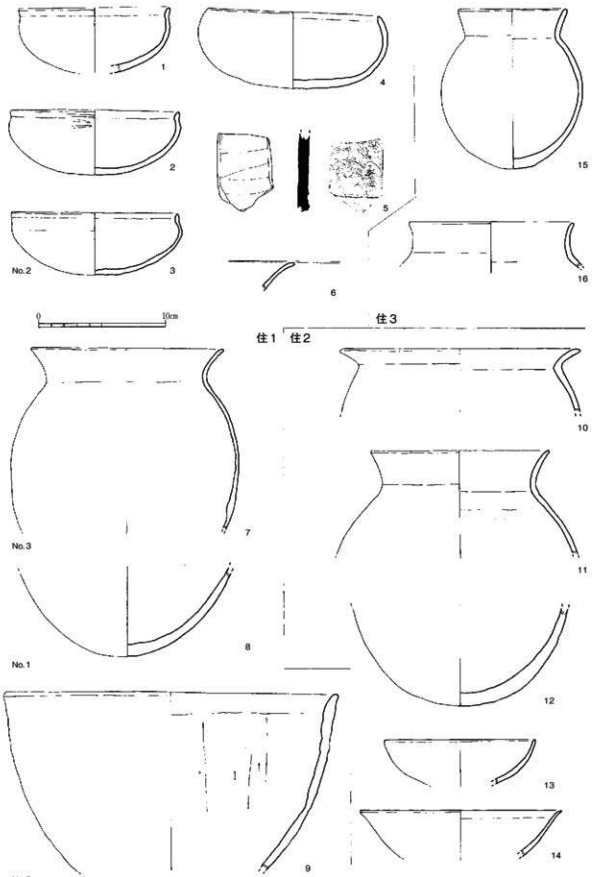
出土土器は1号竪穴住居跡出土のものと近似し、古墳時代後期頃の竪穴住居跡と考えられる。

3号竪穴住居跡（図版2、第8図）

1b区北東部に位置し、主軸はN-10°-Wである。西側は1・2号竪穴住居跡と重複し、南辺は調査区外に延びる。重複関係から2号竪穴住居跡に後続し、1号竪穴住居跡より先行する。規模は北辺340cm、東辺186cm以上、西辺126cm以上で、平面形は方形であろう。残存する深さは10cmで



第７図　Ⅴ・１b区１・２号竪穴住居跡実測図（１／60、１／30）



第８図　Ⅴ－１b区１・２・３号竪穴住居跡出土土器実測図（１／３）

ある。住居内遺構はピット数基検出されたが、主柱穴は判然としない。なお、北西隅付近のピットからは、底面と側面に扁平な石が張り付いた状態で検出された。底面のものは礎盤、壁面のものは柱の支持材であろう。検出層位が不明瞭であり、住居に伴うかどうかは不明である。

出土遺物（第９図）

15・16は壺である。16は小型の壺である。口縁部は直線的に外傾し、底部は丸底状である。調整は表面が磨滅しており不明である。17は口縁部小片である。表面の磨滅が著しい。

出土土器と遺構重複関係から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

５・11号竪穴住居跡（図版３、第８図）

１b区北寄り中央に位置し、主軸はN-12°-Wである。北東隅は２号溝に破壊されている。５・７・11号竪穴住居跡には重複関係があり、７号竪穴住居跡が最も古く、11号、５号の順に後続する。５号竪穴住居跡の規模は南辺400cm、東辺300cm以上、西辺134cm以上、北辺は不明であるが、平面形はやや南北に長い長方形であろうか。11号竪穴住居跡の規模は西辺470cm、北辺260cm以上、南辺60cm以上、東辺は残存していないが、平面形は方形であろう。残存する深さは５・11号ともに約10cmで、残存状況は極めて悪い。住居内遺構は、ピットが両住居跡東南付近で集中したが、５号竪穴住居跡の南東・南西隅に主柱穴となりうるピットが検出されたが、対応する位置でピットが確認できない。確定的ではないが四本柱構造であろうか。11号竪穴住居跡の主柱穴は候補となるものすら見出し難い。

出土遺物（第12図）

14・15は５号竪穴住居跡から出土した。14は土師器高杯の杯部である。成形方法は充填法である。15は須恵器杯蓋である。天井部と体部の境に稜があり、口縁端部は若干くぼむ。

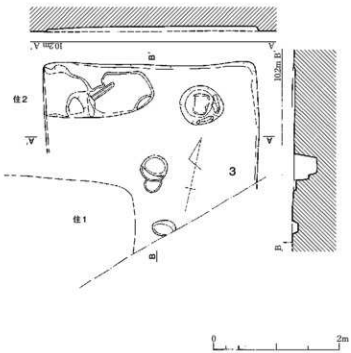
出土遺物は５・11号竪穴住居跡のものが混在している可能性があるが、両者とも古墳時代後期頃の竪穴住居跡であろうか。

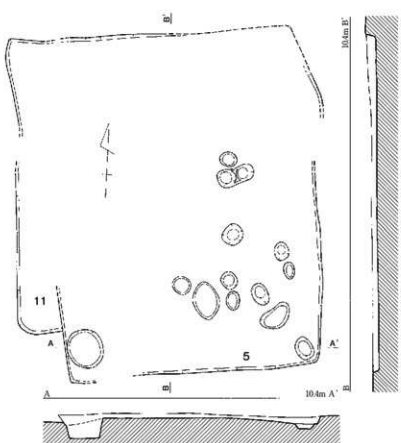
４号竪穴住居跡（図版２・３、第10図）

１b区北寄りの１号竪穴住居跡の南側に位置し、主軸はN-５°-Wである。東側は若干調査区外に延びる。規模は西辺616cm、北辺590cm以上、南辺384cm以上、東辺は不明であるが、平面形は平行四辺形に近い方形であろう。残存する深さは約18cmである。主柱穴となりうる３基のピットを抽出したが、東南隅のピットが調査区外にあり、また、北東の柱穴が西側柱穴に対して直角の位置ではないため、確定的ではない。主柱穴の直径は60cm、深さは52cmである。北西隅の柱穴では柱痕跡が確認され、柱径は約20cmと考えられる。住居内遺構は壁溝があり、北壁中央付近でカマドが検出された。

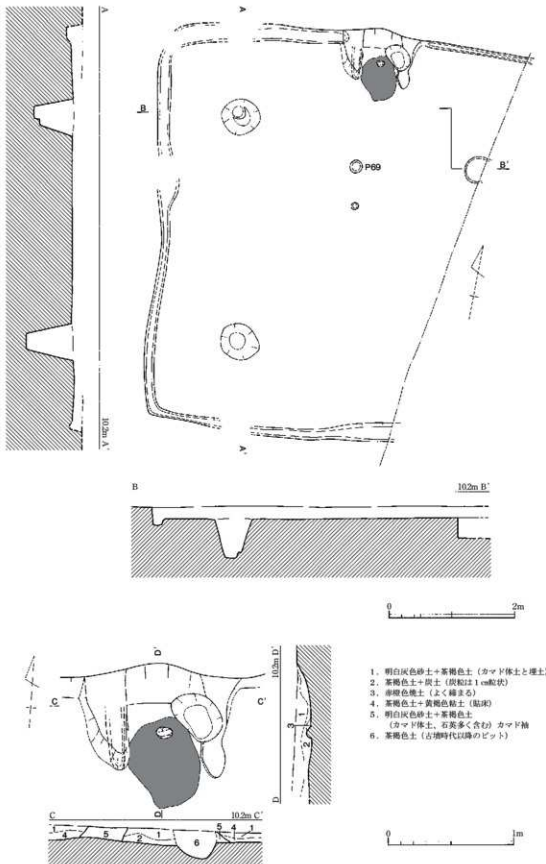
出土遺物（図版12、第12図）

１～８は竪穴住居跡埋土から、９はカマドから、11～13はP69から出土した。１～５は須恵器杯蓋である。調整は天井部が回転ヘラケズリ、２・４は天状部内面に当具痕が残る。１・２・５は天井部と体部の境に沈線がまわり、３・４は天状部と体部の境が不明瞭である。１・４は口縁端部に明瞭な沈線がまわり、３・５は不明瞭ながら沈線がまわる。２の口縁端部は丸い。１は断面がセピア色で他は灰色である。６は須恵器杯身である。調整は底部が回転ヘラケズリである。受部と体部

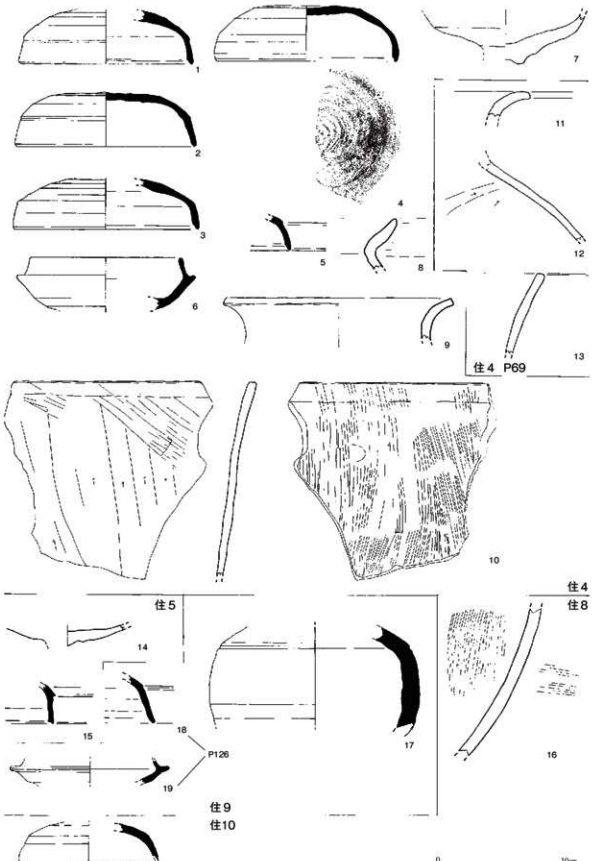




第９図　Ⅴ・１b区３・５・11号竪穴住居跡実測図（１／60）



第10図　Ⅴ－1b区4号竪穴住居跡実測図（1／60、1／30））



第11図　Ⅴ－1b区4・5・8～10号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

の境は沈線がまわり、口縁端部と受部端部は丸い。色調は断面がセピア色である。7は土師器高杯である。杯部の破片のみであり、屈曲部が若干残る程度である。調整は磨滅しており不明である。成形方法は接合法であり、杯底部中央にくぼみがある。8～12は土師器甕である。8は頸部が湾曲し、口縁部はやや上方に外傾する。端部は丸い。9・11は口縁部が外反し、端部が平坦である。胎土や器形が近似しており、同一個体の可能性がある。12は甕肩部の破片であり、頸部が若干残る。調整は外面が磨滅しており不明、内面がケズリである。被熱により頸部外面から胴部にかけて一部赤化している。13は土師器鉢もしくは甑であろうか。口縁端部は平坦で、胴部から外傾する。調整は外面がハケメ、内面が磨滅しており不明である。

カマドの存在や出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

8・9・10号竪穴住居跡（図版4、第11図）

1b区北西端に位置し、位置的に重複する。9・10号竪穴住居跡の主軸はN-30°-W、8号竪穴住居跡の主軸はほぼ南北方向である。残存状況は極めて悪く、8号竪穴住居跡は南東辺と北東・南西辺の一部において、9号竪穴住居跡は南東辺のみ、10号竪穴住居跡は南辺の一部において、辛うじて壁溝が検出されたのみである。8号竪穴住居跡の規模は南東辺286cm、北東辺66cm以上、南西辺86cm以上を測る。南東辺から1辺286cmの方形竪穴住居であると推定される。9号竪穴住居跡の規模は南東辺が180cm以上を測る。10号竪穴住居跡の規模は南辺100cm以上を測る。8号竪穴住居跡の壁溝は南隅と東隅付近で確認されたが、南東辺中央は溝が達していない。この他不定形のピットが南東辺に沿って検出されたが、性格は不明である。また、9・10号竪穴住居における壁溝以外の住居内遺構については性格づけできるものはない。

出土遺物（第12図）

16は8号竪穴住居跡から出土した土師器甕である。調整は外面が磨滅しており不明、内面がハケメである。17は9号竪穴住居跡から出土した。須恵器壺か。肩部から胴部の破片である。器壁が約1cmと厚く、肩部と胴部の境に沈線がまわる。調整は内外面回転ナデである。また、粘土の付け足しによるのか、外面が一部盛り上がる。18・19はP126から出土した。18は須恵器杯蓋である。天井部と体部の境に沈線がまわる。口縁端部は若干外に開き、端部は丸い。断面の色調はセピア色である。19は須恵器杯身である。口縁部は内傾し、端部は欠損しているが外反するであろう。20は10号竪穴住居跡から出土した須恵器杯蓋である。天井部と体部の境に沈線がまわる。

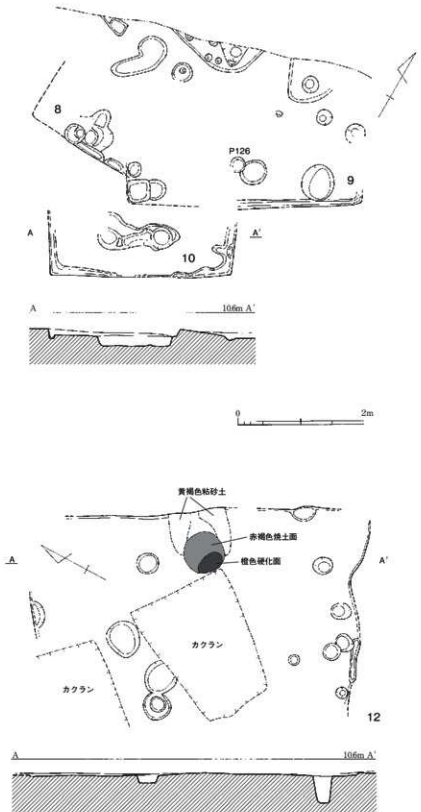
出土土器から8～10号竪穴住居跡の時期は古墳時代後期と考えられる。

12号竪穴住居跡（図版5、第11図）

1b区中央西端に位置し、主軸はN-60°-Eである。残存状況は極めて悪く、カマドの痕跡と壁溝を一部確認したのみである。規模は東辺390cm以上、南辺244cm以上である。カマドが東辺の中央に位置すると仮定すれば、1辺560cmの方形竪穴住居跡であると推定される。住居内の遺構は南辺の一部で壁溝が確認された他ピットが数基確認されたが、主柱穴などは不明である。

出土遺物（第18図）

1はカマドから出土した土師器高杯杯部である。第9図1～3に類似する杯に中空の柱状脚部を接合したような器形である。調整は内外面ミガキである。胎土は良、砂粒や赤褐色粒を若干含み、



第12図　Ⅴ－1b区8・9・10・12号竪穴住居跡実測図（1／60）

色調は赤褐色である。２は土師器高杯の脚部である。中空柱状の脚部であり、成形方法は接合法か。３は鉢である。底部は中央が浅くくぼむ平底状である。底部から口縁部まではやや丸みを帯びながら直線的に伸びる。口縁端部は丸い。調整は外面がナデ、内面はハケメである。４は土師器甕である。口縁端部は内側につまみ上がる。調整は表面が磨滅しており不明である。

カマドの存在や出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

６号竪穴住居跡（図版３・４、第13図）

１b区北寄り中央で、５号竪穴住居跡の南に位置し、主軸はN-57°-Eである。１号掘立柱建物の柱穴により西隅・南西辺の一部・北西辺の一部が破壊され、７号竪穴住居跡と完全に重複し、７号竪穴住居跡に後続する。規模は北東辺470cm、南東辺320cm、南西辺400cm以上、北西辺206cm以上で、平面形は北西から南東方向の辺が長く、北東から南西方向の辺が短い長方形である。残存する深さは10cmである。住居内遺構は、主柱穴となりうるピットが中央長軸に沿って検出されており、２本柱構造であると考えられる。また、北東壁の北寄りでカマドが検出された。

出土遺物（第15図）

１～11・13は埋土から出土し、12・14は出土状況図に載っている遺物である。１・２は須恵器杯蓋である。天井部と体部の境が不明瞭である。焼成は不良、調整は磨滅しており不明である。３は須恵器高杯か。杯部の屈曲部に沈線がまわる。破片端部が若干屈曲しており、脚部との接合部であろう。４・５は土師器高杯である。４は小片であり、全体の器形は不明だが、端部は平坦である。調整は磨滅しており不明である。５は高杯の杯部で、杯底部に接合痕の擬口縁が確認できる。調整は磨滅しており不明である。６は口縁部の小片である。二重口縁壺であろうか。７～11は土師器甕である。いずれも表面の磨滅が著しい。７（No. １）は端部が内側につまみ上がる。８・９は口縁端部が平坦である。10・11は表面の剥離のため形状不明である。12（No. １）は土師器壺か。調整は口縁部外面がヨコナデ、内面は表面が剥離しており不明である。口縁端部はやや平坦である。13は土師器甕の底部か。調整は外面がハケメ、内面が底部で指頭圧痕が残り、やや上方はケズリである。14は弥生土器蓋か。調整は内外面丁寧なナデである。

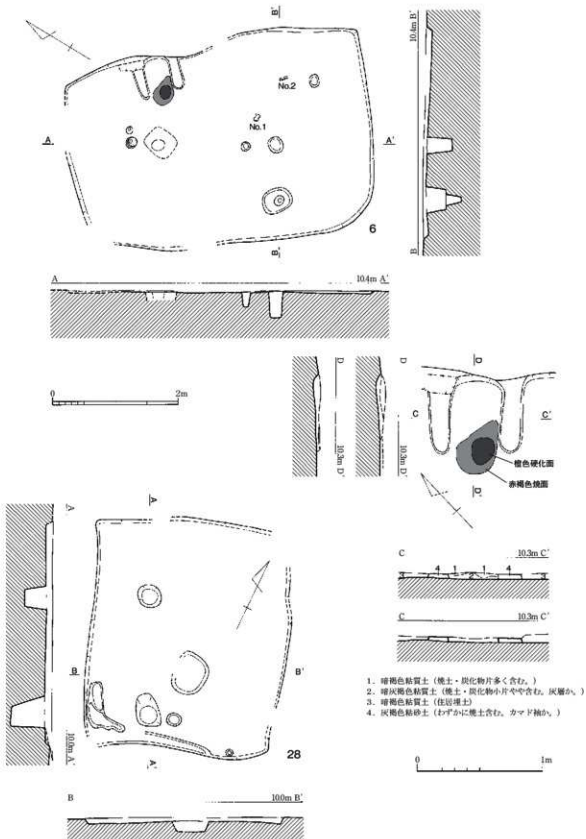
14は弥生後期以前の土器であり、弥生終末から古墳時代初頭の土器から須恵器まで出土し、また、７号竪穴住居跡と完全に重複しているため、遺物が混在している可能性が高い。しかし、６号竪穴住居跡はカマドがあり、須恵器も出土したため、古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

28号竪穴住居跡（図版４、第13図）

７竪穴住居跡と完全に重複する。検出順序から７号竪穴住居に後続し、６号竪穴住居跡より先行する。主軸はN-20°-Eである。四隅が他の遺構に破壊されているが、北辺276cm以上、東辺250cm以上、南辺324cm以上、西辺266cm以上を測る。復元すると長軸約370cm、短軸320cmで、平面形は長方形であろう。残存する深さは約10cmである。壁溝が南東隅付近で確認された他、住居内ピットが数基確認された。確定的ではないが住居内南東寄りのピット２基が主柱穴か。

出土遺物（第16図）

10は弥生土器の高杯杯部である。丸味のある深めの杯であるが、口縁部が残存しておらず、端部の形状は不明である。胎土には白色の砂粒や赤褐色の粒が含まれ、色調は赤褐色である。調整は内



第13図　Ⅴ－１b区６・28号竪穴住居跡実測図（１／60、１／30）

外面丁寧なミガキである。成形方法は充填法である。11は器種不明の口縁部片であるが、胎土が10と近似する。

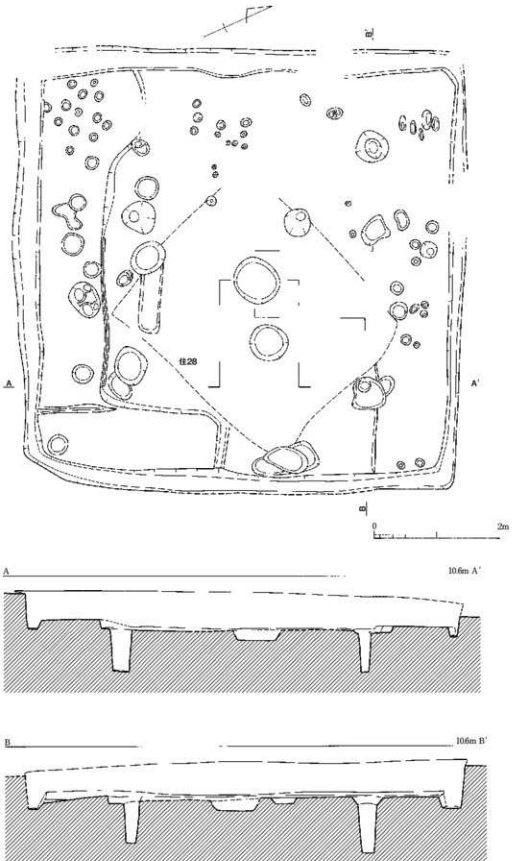
7号竪穴住居跡との重複関係や出土遺物から、弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴住居跡と考えられる。

7号竪穴住居跡（図版4、第14図）

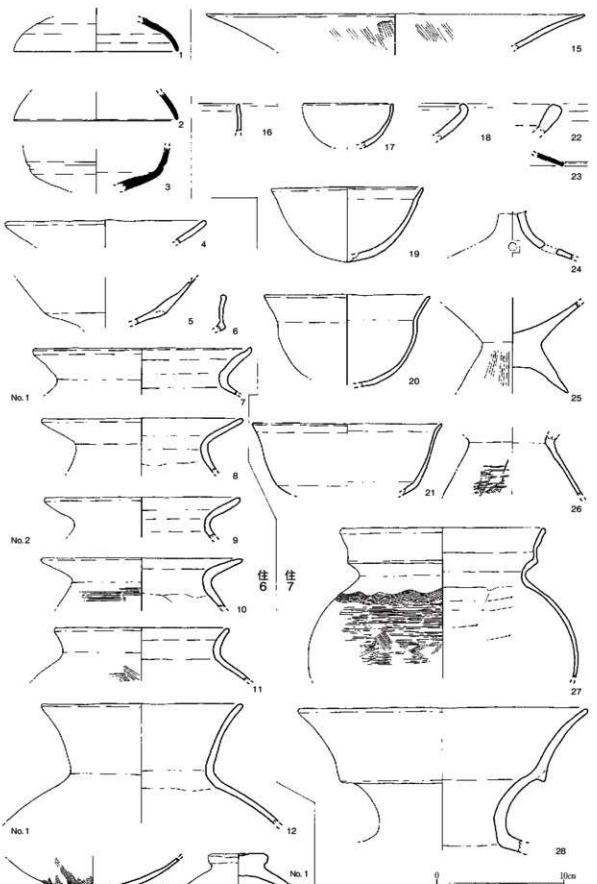
1b区中央に位置し、主軸はN-65°-Wである。5・6・11・13・28号竪穴住居跡、及び1・2号掘立柱建物跡と重複し、これらの遺構より先行する。北西隅と北辺の一部が1号掘立柱建物に破壊されるものの、床面までが深く、他の竪穴住居跡と異なり残存状況は良好である。規模は北東辺694cm、南東辺680cm、南西辺630cm以上、北西辺640cm以上で、平面形は方形である。検出面から床面までの深さは約50cmである。住居内遺構は壁溝、ベッド状施設、主柱穴、中央土坑、床面小溝、小穴群などピットが検出された。壁溝は住居内を全周し、底面幅約20cmで竪穴住居跡検出面との比高差は約67cm、床面あるいはベッド状施設との比高差は約15cmである。ベッド状施設は幅約100cmで、住居北辺に沿った範囲と住居南半部をコの字状に沿った範囲において、地山を掘り残して構築される。住居中央部との比高差は約7cmである。主柱穴は4基でベッド状施設の内側隅部に位置する。中央土坑は直径約74cm、深さ約8cmである。床面小溝は住居南半部のベッド状施設に沿う部分とベッド状施設内で検出された。ベッド状施設の南西辺に沿った部分では幅約5cm、深さ約5cmであり、極めて幅が狭い。小穴群は住居内の外側寄りに分布し、西隅・北西辺中央・北隅・北東辺中央にまとまりが見られる。他のピット群については、各辺中央のものは梯子穴の可能性があるが特定できない。

出土遺物（図版12、第15・16図）

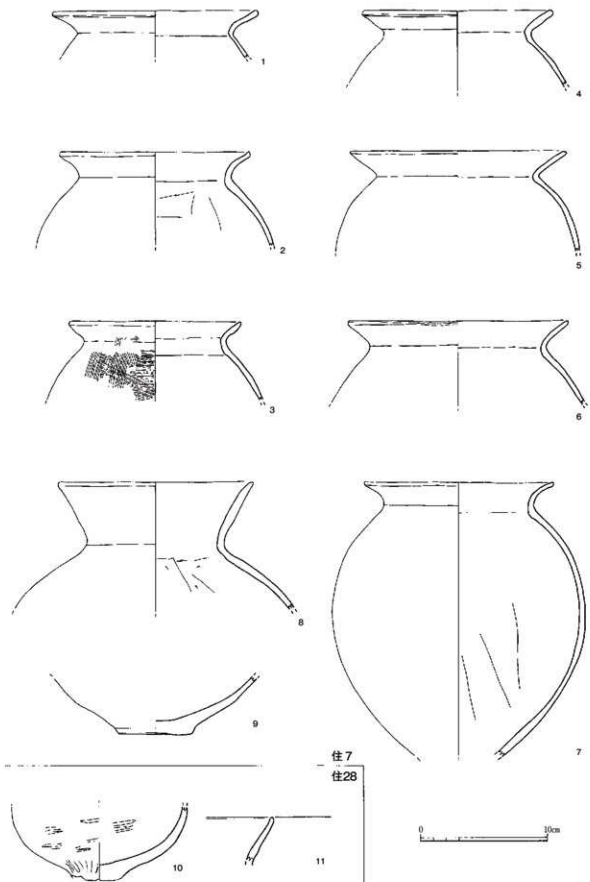
第15図15は口縁部片である。土師器高杯か。傾きは不明だが、直線的に伸びるであろう。調整は内外面縦方向のミガキである。16は須恵器の口縁部片である。器種は高杯か。17は土師器小型の椀あるいは鉢か。胎土は良、赤褐色の粒が含まれる。色調は外面が赤褐色、内面が褐色である。18は高杯の口縁部か。調整は外面がナデ、内面は磨滅しており不明である。口縁端部が強く内傾しており、弥生時代後期の豊前地方在地の形態である。19・20は土師器の小型鉢である。19は底部が丸底であり、口縁部は外反し、端部は丸い。調整は外面が磨滅しており不明、内面は丁寧がナデである。20は底部付近が残存していないが、19と近似した器形であろう。ただし、頸部の屈曲はより強い。調整は剥離しており不明である。21は土師器高杯の杯部である。口縁部丸みを帯びながら伸び、端部は若干外反する。胎土には赤褐色の粒が含まれ、色調は赤褐色である。22は口縁部の小片であり、傾きは不明だが、器種は甕か。調整は外面が煤の付着により不明、内面がヨコナデである。23は土師器の小片である。高杯あるいは器台の脚裾か。端部は平坦で、外面に低い稜がある。胎土は精良で、色調は赤褐色である。24は土師器低脚高杯の脚裾部であり、端部は残存しない。裾部に円形透かし孔が2箇所あり、位置的に合計4孔の透かしが想定される。調整は剥離しており不明である。25は低脚器台である。受部から脚部の破片である。受部は直線的に伸び、端部は磨滅しているが、さほど伸びないであろう。脚部は短く直線的に開くが、裾部は残存していない。脚部の調整は外面が縦方向のミガキ、内面がナデである。26は器台脚部である。断面に接合痕の擬口縁が確認できる。裾部が残存せず、脚部の長さは不明だが、脚部は直線的に開く。胎土は精良で砂粒を



第14図　Ⅴ－１b区７号竪穴住居跡実測図（１／60）



第15図　Ⅴ－1b区6号竪穴住居跡出土土器実測図、7号竪穴住居跡出土土器実測図①（1／3）



第16図　Ⅴ－1b区7号竪穴住居跡出土土器実測図②、28号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

ほとんど含まず、調整は内外面丁寧なナデである。27・28は壺である。27は二重口縁壺の口縁部から胴部までの破片である。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、肩部内面がケズリである。肩部外面には櫛描波状文と櫛描直線文が施される。28は頸部の締まった二重口縁壺である。口縁部の屈曲部に粘土を貼り付け、下向きの稜が付く。調整は内外面ナデである。

第16図1～7は土師器甕である。いずれも器壁が5mm程度であり、極めて薄い。1は頸部が湾曲し、口縁部はやや直線的に伸び、端部は平坦である。調整は磨滅しており不明である。2は口縁部が外反し、端部は平坦であり、ややつまみ上げる。調整は外面が磨滅しており不明、内面がケズリである。3は口縁部が若干厚くなり、端部は丸い。調整は外面が横方向と縦方向のハケメ、内面がナデである。4は頸部が湾曲し、口縁部はやや厚くなり、端部はやや平坦である。調整は磨滅しており不明である。5は頸部がやや強く屈曲し、口縁部は直線的に伸び、端部は丸い。肩部は丸みを帯び、胴部へ続く。調整は磨滅しており不明である。6は頸部が湾曲し、口縁部は直線的に伸び、端部は丸い。調整は磨滅しており不明である。7は口縁部が外反し端部は丸い。肩部から胴部にかけてはなだらかに湾曲する。底部は欠損しているが、胴部最大径は器高の中位よりやや上である。調整は外面が磨滅しており不明、内面には縦方向に棒状工具痕がいくつか確認できる。8は壺の口縁部である。口縁部は直線的に外傾し、端部は先細りながら丸くなり、肩部はなだらかに湾曲する。調整は外面が磨滅しているがナデであろう、内面は頸部付近がケズリである。9は底部である。器壁の厚さから推せば甕であろうか。調整は磨滅しており不明である。

出土土器から古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

13号竪穴住居跡（図版5、第17図）

1b区中央東寄りに位置し、主軸はN-28°-Wである。残存状況は極めて悪く、西辺と北辺の一部で壁溝が確認されたため、竪穴住居跡と認識できた。規模は西辺396cm、北辺230cm以上を測り、1辺約400cmの方形竪穴住居跡であると推定される。主柱穴になりうるピットは3基確認され、対応するもう1基は現代のゴミ穴によって破壊されている。

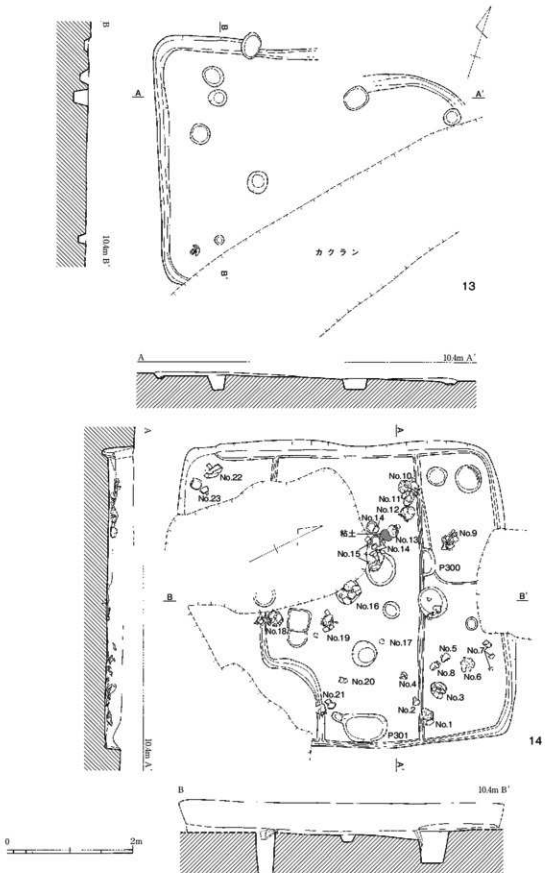
出土遺物（第18図）

5・6は土師器高杯である。5は杯部の破片である。杯底部と口縁部の境は沈線状にくぼむ。口縁は若干丸みを帯びながら伸び、端部は丸い。調整は磨滅しており不明である。6は低脚高杯の脚裾部である。杯部と脚部の接合部に小さな空隙がある。裾部は開きながら伸び、端部は平坦である。調整は磨滅しており不明である。胎土は良、砂粒をほとんど含まない。

出土土器は古墳時代前期の時期であるが、出土量が少なく、竪穴住居跡の時期は不明である。

14号竪穴住居跡（図版5、第17図）

1b区中央南寄りに位置し、主軸はN-64°-Wである。竪穴住居跡北東辺中央部と南側3分の1は現代のゴミ穴によって破壊されているが、元来深かったため、残存状況は悪くない。規模は南西辺440cm、北東辺450cm、南東辺304cm以上、南西辺90cm以上を測り、南西・北東辺から1辺約450cmの方形竪穴住居跡と推定される。検出面から床面までの深さは約37cmである。住居内遺構としては壁溝、主柱穴、ベッド状施設、床面小溝、その他ピットが確認された。壁溝は南西辺を除く各辺で確認され、底面幅は約10cm、北西辺と南東辺は約5cmと狭い。主柱穴は2本柱を想定し



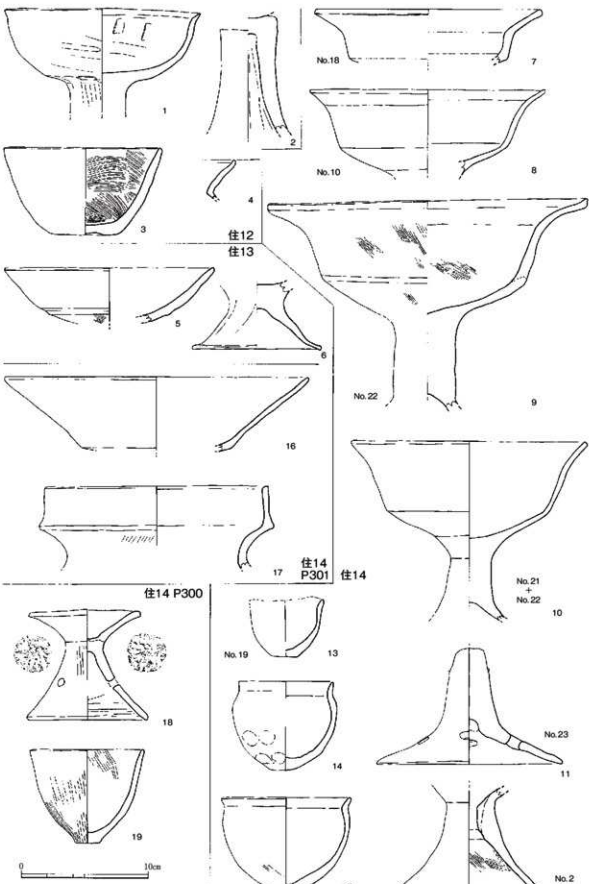
第17図　Ⅴ－１b区13・14号竪穴住居跡実測図（１／60）

ている。柱穴の直径は約46cm、深さ約42～67cmである。ベッド状遺構は住居北隅付近にあり、構築方法は地山削り出し、規模は幅約100cm、長さ約200cm、床面との比高差は5cmである。床面小溝は北東部と南西部の2箇所で検出された。北東部のものは住居北東辺の壁から約100cmの間隔を置いて、壁に並行するように掘削されており、幅約5cm、深さ約5cmである。南西部のものは住居南西部をL字状に区画するように折れ曲がる。規模は北東部のものとほぼ同じである。その他のピットとしては、住居東南辺中央の壁際に長軸約70cm、短軸約40cm、深さ約60cmの不整形土坑があり、梯子穴か貯蔵穴などの可能性がある。

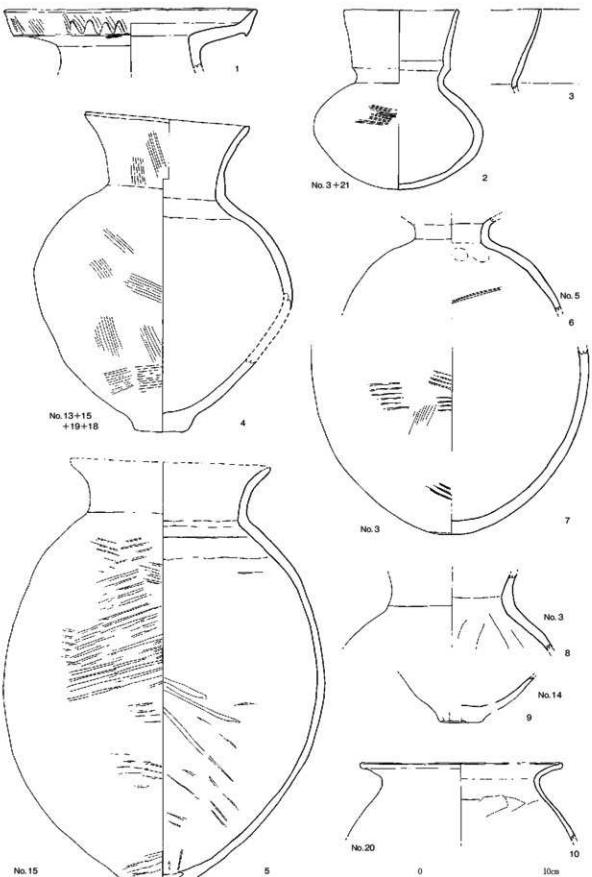
出土遺物（図版12・13、第18・19・20図）

第18図7～13は出土状況図に載っている遺物である。14・15は埋土から、16・17はP301から、18・19はP300から出土した。7～11は高杯である。7（No.8）は杯底部から上方へ明瞭に屈曲し、さらに口縁部が屈曲して外傾し、端部は平坦である。調整は磨滅しており不明である。8（No.10）は杯底部から上外方に湾曲し、口縁部は外反し、端部は丸い。調整は磨滅しており不明である。9（No.22）は杯底部から上外方に湾曲し、口縁部は大きく外反し、端部は平坦だが、上方につまみ上げる。脚部は中実柱状であり、杯底部中央がくぼむ。調整は外面が口縁部でナデ、杯部・脚部は縦方向ハケメである。内面は口縁部がナデ、杯部は横方向のハケメである。10（No.21・22）は杯底部から上外方へ湾曲し、口縁部は短く外反し、端部は丸い。脚部は中実柱状である。調整は磨滅しており不明である。11は（No.23）は脚部と裾部の破片である。脚部は中実柱状であり、裾部は大きく開く。裾部の脚部に近い位置に透かし孔が4箇所ある。調整は剥離しており不明である。12（No.2）は高杯か。杯部は中空だが、充填法の杯部が欠損したものか。裾部は緩やかに広がり、端部は丸い。調整は外面が剥離しており不明、内面がハケメである。外面には一部赤色顔料が残る。13～15は小型の鉢である。13（No.19）は口縁部がわずかに外反し、端部は先細る。底部は平底である。調整は磨滅しており不明である。14は頸部が若干窄まり、口縁部が短く外反する。底部は急に窄まり厚くなる。底部形状は丸底であり、自立しない。調整は磨滅しており不明である。15は頸部から口縁部が短く外傾し、端部は丸い。頸部の屈曲が明瞭であるため、内面には稜ができる。底部は窄まりやや厚みを増す。調整は磨滅しており不明である。16は高杯杯部の口縁である。杯部と口縁部の境には稜ができ、口縁部は直線的に外傾し、端部は丸い。17は二重口縁壺である。口縁部は直立し、外面には接合時の痕跡がナデ消されていない。調整は内外面ヨコナデである。18は器台である。受部は短くやや外反し、端部は平坦である。裾部は接合部から広がり、端部は丸い。裾部に透かし孔が3箇所ある。調整は剥離しており不明である。受部と脚部の接合部の断面には接合時のキザミの痕跡が明瞭に残る。19は小型の甕である。口縁部は緩やかに伸び、端部は丸い。底部は平底である。調整は内外面縦方向のハケメである。

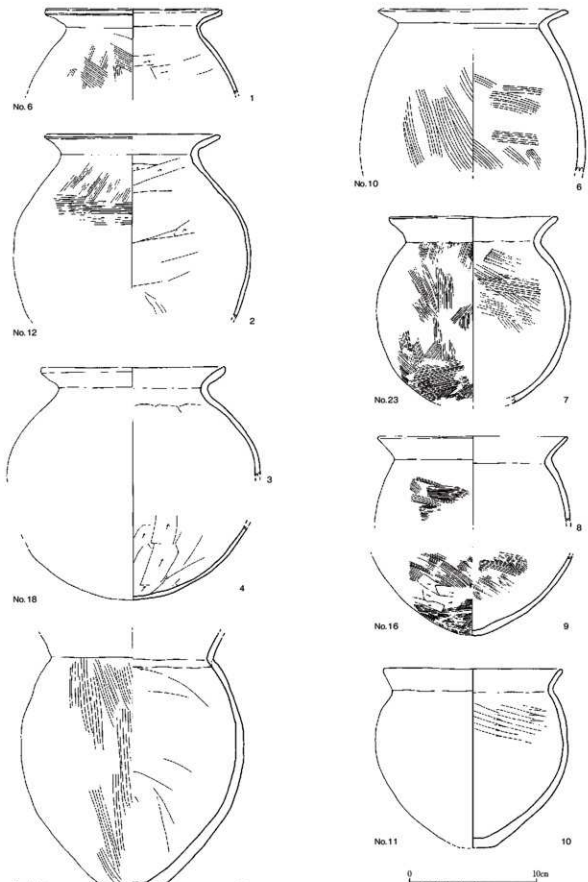
第19図1は埋土から出土した。2～10は出土状況図に載っている遺物である。1は二重口縁壺の口縁部である。口縁部は短く外傾し、端部は丸い。口縁部の屈曲部には下向きにに稜がつく。調整・文様は口縁部外面に櫛描波状文が施文される。瀬戸内地方の影響を受けた土器であろう。2（No.3・21）は二重口縁の小壺である。頸部は湾曲し、口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。胴部は偏球形を呈す。底部は丸底であり、自立しない。調整は胴部外面が横方向のハケメ、他は磨滅しており不明である。3（No.7）は壺の口縁部である。調整は磨滅しており不明である。4（No.13・15・18・19）は壺である。口縁部は外反し、端部は丸い。肩部はやや丸く、胴部は底部



第18図　V-1b区12・13号竪穴住居跡出土土器実測図、14号竪穴住居跡出土土器実測図①（1／3）



第19図　Ⅴ－１b区14号竪穴住居跡出土土器実測図②（１／３）



第20図　Ⅴ－1b区14号竪穴住居跡出土土器実測図③（1／3）

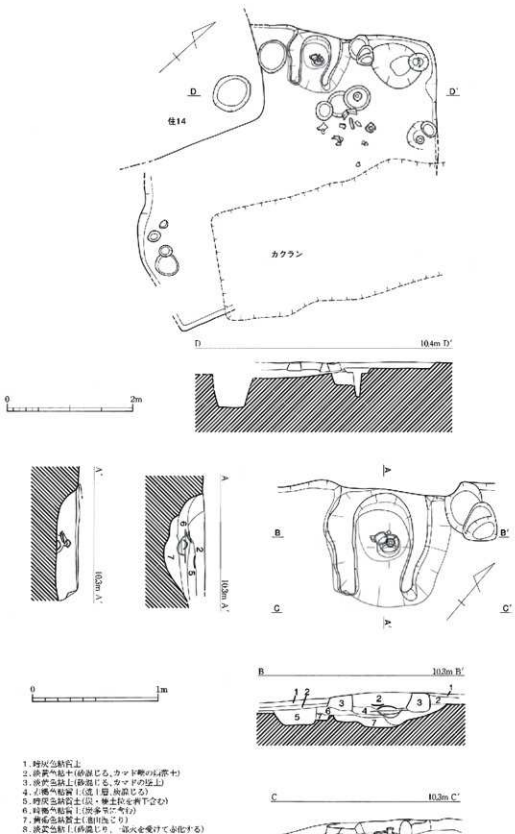
に向かって丸みを帯びながら窄まる。底部は上げ底状の平底である。調整は表面の剥離が著しく、不明瞭であるが、胴部外面にタタキのような痕跡が残る。5（No.15）は壺である。口縁部は外反し、端部は丸い。胴部は長く、張りが小さい。底部は平底であり、絞るようにして成形されている。調整は外面がタタキ、内面がケズリ後ナデか。6（No.5）は壺の頸部である。口縁部は欠損している。調整は磨滅しており不明であるが、横方向の条線が1条ある。7（No.3）は甕の胴部から底部である。底部は丸底状である。調整は外面がタタキ後ハケメ、内面は磨滅しており不明である。6と胎土が近似しており、同一個体と考えられる。8（No.8）は壺の頸部である。調整は外面が磨滅しており不明、内面がナデである。9（No.14）は器壁が薄いため、甕か。平底の破片である。調整は外面ナデ、内面は磨滅しており不明である。10（No.20）は甕の口縁部片である。口縁部は大きく外反し端部は大きく屈曲し、外反する。端部は平坦で上方へつまみ上げる。調整は外面が磨滅しており不明、内面がナデである。

第20図1～10は出土状況図に載っている甕である。1（No.6）は口縁部が強く外反し、端部は平坦で上方につまみ上げる。調整は外面がハケメ・ナデ、内面はケズリである。2（No.12）は口縁部が外反し、端部は丸い。肩部なだらかである。調整・文様は外面が縦方向のハケメ、肩部に櫛描直線文がまわる。内面はケズリである。3（No.18）は口縁部が外反し、端部は平坦である。肩部は丸みを帯びる。調整は磨滅しており不明である。4（No.18）は胴部片であり、3と同一固体である底部付近から丸みを帯びており、胴部の形状は球形に近いと考えられる。調整は外面が磨滅しており不明、内面がケズリである。5（No.8・9）は口縁部はやや外上方に外傾し、胴部はあまり張らず、底部は平底状である。調整は外面が粗いハケメ、内面がケズリである。口縁部は内外面ナデである。6（No.10）は口縁部が強く外傾し、やや丸い。胴は張らず、長く伸びる。調整は表面の剥離のため不明瞭であるが、外面が縦方向のハケメか、内面が横方向のハケメである。7（No.23）は口縁部が短く外反し、端部は丸く、胴部は球形である。調整は内外面ハケメである。8（No.16）は口縁部が外傾し、端部は丸い。胴部の張り具合は7と同程度である。調整は外面がハケメ、内面は磨滅しており不明である。9（No.16）は8と同一固体の底部片であり、丸底である。調整は内外面ハケメである。10（No.11）は口縁部が短く外傾し、胴部の張りはあまり強くないが、底部に向かって窄まる。底部は平底である。調整は外面が被熱による損傷が激しく不明、内面が工具によるナデである。

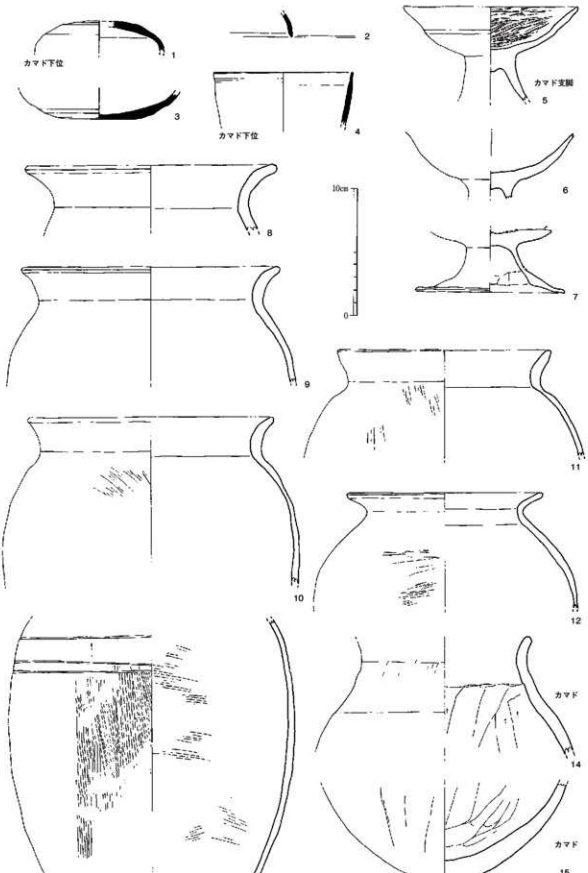
出土土器から古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

15号竪穴住居跡（図版6、第21図）

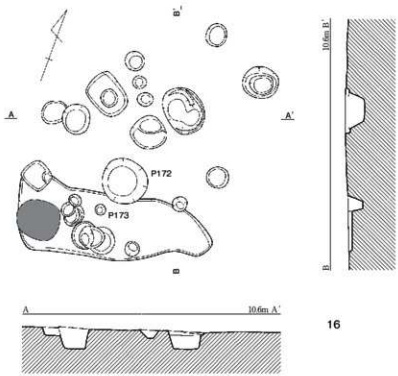
1b区中央南東寄りに位置し、主軸はN-50°-Wである。西側は14号竪穴住居跡と重複し、東側は現代のゴミ穴によって破壊され、かつ全体的に削平されて残存状況は悪い。14号竪穴住居と重複する部分において、先後関係の把握が困難であったが、14号竪穴住居跡出土土器の検討と15号竪穴住居跡のカマドの存在などから、15号竪穴住居が後続すると判断される。規模は北西辺284cm以上、北東辺200cm以上、南東辺74cm以上、南西辺270cm以上を測る。南東辺が北西辺に対して並行せず、1辺約450cmのやや歪な方形竪穴住居跡であると想定される。残存する深さは約10cmである。カマドは北西壁に内接され、燃焼部中央に支脚であろう高杯が伏せられた状態で出土した。この他、検出されたピットからは主柱穴を特定できなかった。

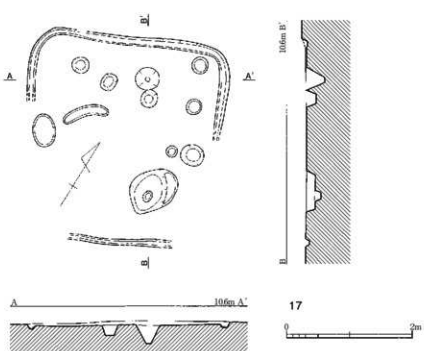


第21図　Ⅴ－1b区15号竪穴住居跡実測図（1／60、1／30）



第22図　Ⅴ－１b区15号竪穴住居跡出土土器実測図（１／３）





第23図　Ⅴ－１b区16・17号竪穴住居跡実測図（１／60）

出土遺物（第22図）

1・2は須恵器杯蓋である。1はカマド下位から出土した。天井部と体部の境は不明瞭である。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ、内面は回転ナデである。2は口縁端部のみの小片である。端部内面に浅い段がある。3は須恵器杯身である。底部と口縁部の境は若干くぼむ。調整は外面が回転ヘラケズリ、内面が回転ナデである。4はカマド下位から出土した須恵器口縁部片である。端部は丸く収め、調整は内外面回転ナデである。器種は高杯か。5～7は土師器高杯である。5はカマドの支脚に転用された土師器高杯である。杯底部と口縁部の境に浅い段があり、口縁部は直線的に伸びる。脚部は中空柱状で、成形方法は充填法である。調整は外面が被熱による器面の損傷が激しいため不明、内面がミガキである。6は土師器高杯の杯部である。端部欠損しているが、口縁は丸みを帯びながら若干外反するであろう。7は土師器高杯である。杯部はほとんど残存していないが、脚部は中空柱状の短脚で裾部が大きく開き端部は丸い。特に内面では脚部と裾部の境が明瞭である。調整は外面が磨滅しており不明、脚部内面がナデである。8～11は土師器甕である。いずれも淡黄褐色を呈し、被熱によるのか一部赤化している。全体的に表面の磨滅が著しく、調整は不明である。口縁部は外反し、端部は丸くあるいはやや平坦気味に収める。胎土は良で、砂粒をほとんど含まない。12は土師器甕である。8～11と異なり、胎土に砂粒を多く含み、色調は褐色から黒色である。口縁部は直線的に開き、端部は丸い。13はカマドから出土した土師器甕胴部である。残存部位が限定的であり、復元胴部径や傾きは確度が高くないが、胴部は長胴形である。表面の剥離が著しいが、肩部に3条の沈線が確認できる。調整は、外面が沈線の下方で縦方向のハケメ、内面が横あるいは斜め方向のハケメである。胎土は良で、砂粒をほとんど含まず、色調は全体的に淡黄褐色である。胎土や色調が8～11と近似しており、いずれかの同一固体の可能性がある。14・15はカマドから出土した土師器である。胎土は良で砂粒をほとんど含まず、色調は赤褐色である。胎土の特徴から同一固体の可能性が高い。14は口縁部の破片である。短く外反し、端部はやや丸い。頸部から胴部まではなだらかに伸びる。表面の磨滅が著しいため調整は不明瞭だが、外面にハケメがわずかに残る。内面は胴部から頸部にかけて縦方向のケズリである。頸部付近は粘土帯の接合痕を消しきれていない。外面には一部煤が付着している。15は丸底の底部片である。調整は外面がナデ、内面がケズリである。

カマドの存在や出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

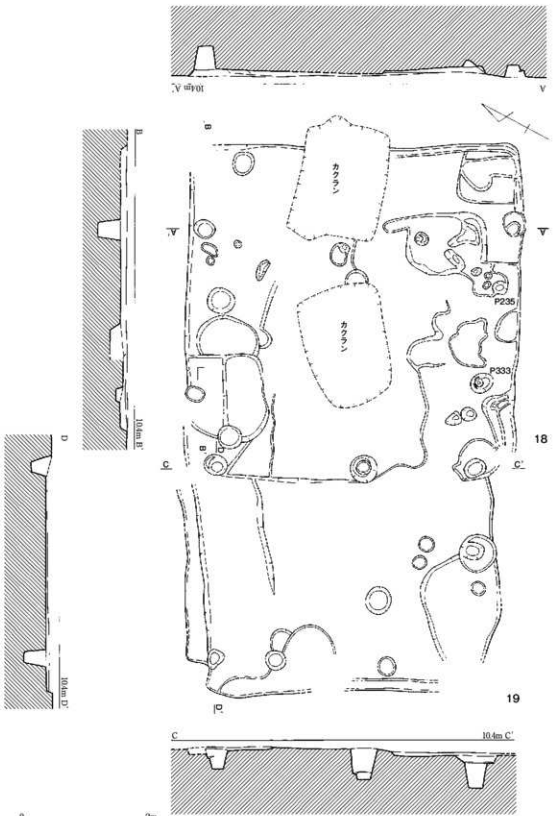
16号竪穴住居跡（図版6、第23図）

1b区中央に位置し、明確な竪穴住居の輪郭をなしていないが、焼土が集中する箇所があることや残存状況が悪い竪穴住居跡が多いため、竪穴住居跡とした。主軸はN-18°-Wである。規模は南辺300cm以上、西辺120cm以上を測り、残存する深さは約5cmである。残存状況が悪く、本来の規模を推定し難い。住居内遺構はピットが数基確認されたが、主柱穴は不明である。

出土遺物（第27図）

1はP172から出土した。高杯もしくは器台の脚部である。直線的に開き、端部は丸い。内外面ともに表面の剥離が著しいが、外面は縦方向、内面は横方向のハケメがわずかに残る。

P172は16号竪穴住居跡に直接関係するかどうかは不明確であり、出土遺物がわずかであるため、遺構の時期は判断し難い。



第24図　Ⅴ－1b区18・19号竪穴住居跡実測図（1／60）

17号竪穴住居跡（図版６、第23図）

１b区中央やや南寄りに位置し、主軸はN-30°-Wである。残存状況が悪く、壁溝が一部確認されたのみである。規模は北西辺320cm、北東辺130cm以上、南西辺140cm以上、南西辺130cm以上を測り、１辺320cmの方形竪穴住居跡であろう。住居内遺構は壁溝とピットが検出された。壁溝は底幅約５cm、深さ５cmであり、全体の残存状況が悪いため、全周していたかどうかは不明である。ピットは数基確認されたが、主柱穴となりうるピットは中軸やや西に２基あり、２本柱構造が想定される。図化可能な遺物はない。

18・19号竪穴住居跡（図版９、第24図）

１b区南端に位置し、18号の西南辺と19号北東辺が重複する。また、３号掘立柱建物跡の柱穴や現代のゴミ穴による破壊を受けた箇所が散在する。19号竪穴住居跡の北西辺では、位置を違えて並行する段差があり、別の竪穴住居跡が重複する可能性もあるが、認定するだけの根拠がない。18号竪穴住居跡の主軸はN-27°-W、19号竪穴住居跡の主軸はN-30°-Wである。検出面から床面までの深さは５cm～15cmと、残存状況は悪く、両者の先後関係も不明である。18号竪穴住居跡の規模は、各辺約530cmで平面形は方形である。19号竪穴住居跡は北西辺320cm以上、南西350cm以上、南東辺280cm以上を測る。各辺の状況から、１辺約460cmの方形竪穴住居跡であると考えられる。18号竪穴住居跡の住居内遺構は主柱穴となりうるピットを４本抽出した他、壁溝や段差、ピットなどがある。壁溝は北東辺と南東辺の一部で確認され、底面幅約８cm、深さ約２cmである。段差やピットなどは性格不明である。19号竪穴住居跡の住居内遺構は種柱穴となりうるピットを３本抽出したが、残る１基は他の遺構により破壊されたと考えられる。壁溝は南西辺の一部で確認され、底面幅約12cm、深さ約５cmである。段差やピットなどの性格は不明である。

出土遺物（第27図）

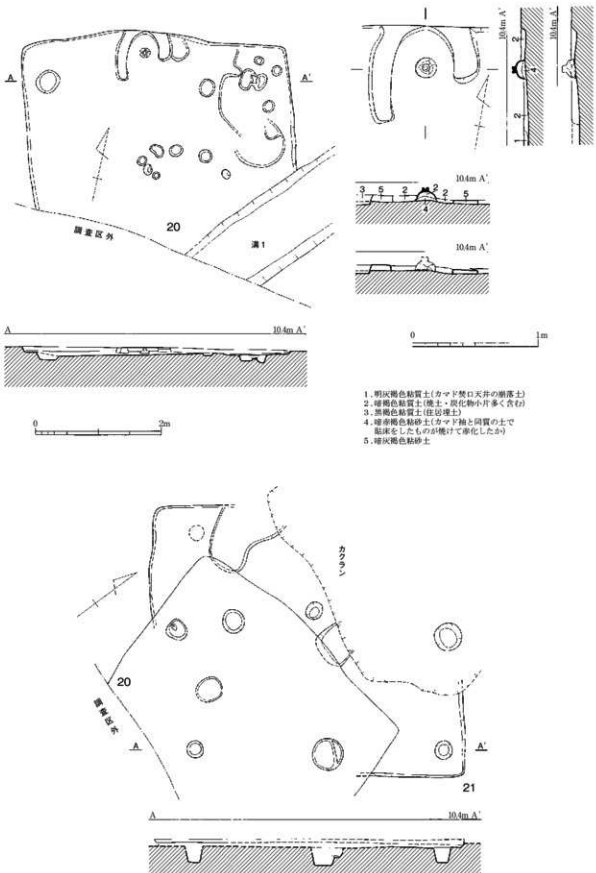
２・３・５はP235から、６はP333から、４は18号竪穴住居跡の埋土から出土した。２は須恵器杯蓋であり、口縁部の内側にかえりをもつ。口縁端部は平坦である。調整は内外面回転ナデである。３は須恵器の口縁部小片である。口縁端部は丸く、端部から約１cm下で明瞭に屈曲する。器種は杯身あるいは高杯であろうか。４は須恵器の高杯か。口縁部の小片である。端部は丸く、やや直線的に伸びる。調整は内外面回転ナデである。５は土師器甕の把手である。先端は先細るが短く、小さく湾曲する。６は土師器の小型の甕である。口縁部は外反し、胴部は丸い。表面が被熱のため激しく損傷しており、調整は不明、また、色調も赤化している部分が多い。

７は19号竪穴住居跡の埋土から出土した。土師器甑である。把手部分が欠落しているが被熱による損傷が著しいため、調整は不明である。

主柱穴P333から出土した小型の甕は調整が不明瞭で特徴を掴み難いが、P235が18号竪穴住居跡に伴うとすれば、須恵器の特徴から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

20号竪穴住居跡（図版７、第25図）

１b区南端に位置し、21・22・27・26号竪穴住居跡と１号溝と重複する。１号溝より先行し、21・22・27・26号竪穴住居跡に後続する。主軸はN-19°-Wである。規模は北辺420cm、西辺260cm以上、東辺200cm以上を測る。北辺から推定すると、１辺420cmのやや平行四辺形に近い



第25図　Ⅴ－1b区20・21号竪穴住居跡実測図（1／60、1／30）

方形竪穴住居であると考えられる。住居内遺構はカマド、主柱穴２基、その他ピットである。カマドは北壁中央に内接し、燃焼部中央に高杯が伏せられた状態で出土した。カマドの支脚であろう。主柱穴となりうるピットは北壁寄り両隅付近で２基検出され、４本柱構造である。対応する柱穴は溝１によって破壊されているか、もしくは調査区外に存在する。柱穴の径は約30cm、深さは約10cmである。その他ピットは性格不明である。

出土遺物（第27図）

８は土師器杯か。口縁部は内湾し、端部は丸い。調整は内外面横方向のミガキである。胎土は精良で砂粒をほとんど含まず、色調は赤褐色である。９は脚部が欠落しているが土師器高杯の杯部であろうか。調整は内外面横方向のミガキである。胎土は精良で砂粒をほとんど含まず、色調は赤褐色である。10は土師器甕である。口縁部は直線的に伸び、若干外に開き、端部は丸い。調整は表面が磨滅しているが、外面に縦方向のハケメが確認できる。

出土遺物が少ないが、カマドの存在や出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

21号竪穴住居跡（図版７、第25図）

１b区南端に位置する。北西隅付近は現代のゴミ穴によって、南隅付近は20号竪穴住居跡によって破壊されている。また、20・22・27・26号竪穴住居跡と重複し、検出状況から判断して、20号竪穴住居跡より先行し22・26・27号竪穴住居跡に後続すると考えられる。主軸はN-34°-Eである。規模は、北東辺136cm以上、南東辺150cm以上、南西辺176cm以上北西辺108cm以上を測る。東隅と西隅が確認されたことからは考えると長軸504cm、短軸424cmの長方形竪穴住居跡であると推定される。検出面から床面までの深さは約７cmである。住居内遺構はピットである。この内、主柱穴になりうるピットが東隅と南隅で確認されたことから４本柱構造であると考えられるが、対応する２基の柱穴は未確認である。また、住居中央に１辺約60cm深さ20cmの土坑があるが、現代のゴミ穴によって破壊されているため平面形は不明である。この他、主柱穴間中央にもピットがあるが、性格は不明である。

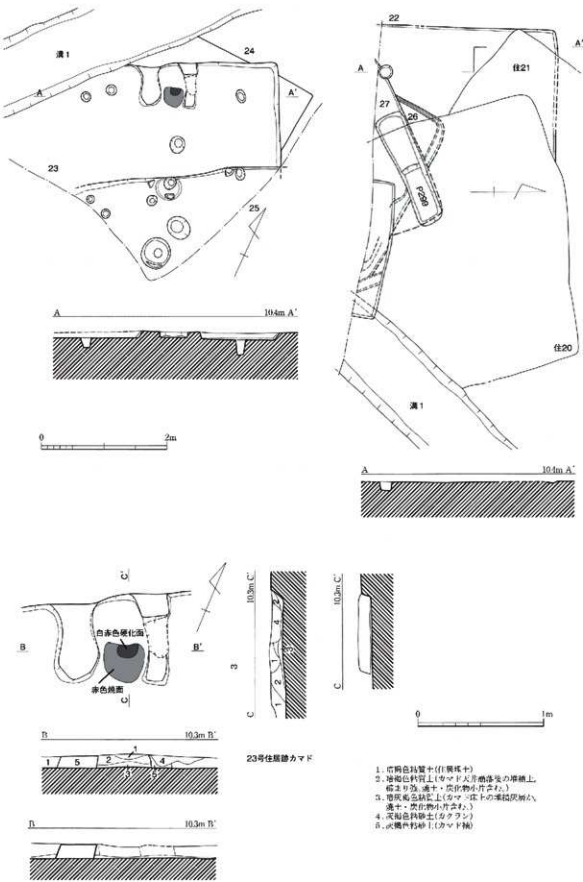
出土遺物（第27図）

11は土師器甕の口縁部片である。口縁部は外反し、端部は丸い。調整は内外面ナデである。12は土師器の口縁部片である。口縁部は外反し、端部は丸い。高杯であろうか。

遺物が少量だが、重複関係から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

22・26・27号竪穴住居跡（図版７、第26図）

１b区南端に位置し、南側は調査区外に延びる。20・21号竪穴住居跡と重複する。検出状況から判断すると、26号竪穴住居跡が27号竪穴住居跡より先行するが、22号竪穴住居跡との関係は不明である。主軸は、22号竪穴住居跡がほぼ南北方向、26号竪穴住居跡がN-25°-W、27号竪穴住居跡がN-30°-Eである。重複範囲が広いことと、大部分が調査区外に延びるため、各竪穴住居跡の規模平面形の復元はできない。残存部分で測ると、22号竪穴住居跡は北辺200cm以上、西辺274cm以上、26号竪穴住居跡は北辺260cm以上、西辺100cm以上、27号竪穴住居跡は北辺270cm以上、東辺80cm以上である。検出面から床面までの深さは22号竪穴住居跡が若干、26号竪穴住居跡が約30cm、27号竪穴住居跡が約20cmである。住居内遺構は26号竪穴住居跡で壁溝が確認されたのみ



第26図　Ⅴ－1b区22～27号竪穴住居跡実測図（1／60、1／30）

で、それ以外は不明である。壁溝は西辺で底幅約５cm、深さ約10cm、北辺で底幅約10cm、深さ約10cmである。また、27号竪穴住居跡の北辺に沿って幅40cm、長さ190cm、の長方形土坑があり、底面が２段であった。検出面からの深さは上段までが45cm、下段までが約70cmである。住居との関係や性格については不明である。

出土遺物（第27図）

13～17は20～22号竪穴住居跡から出土した。13は須恵器杯身である。口縁部はわずかに内傾し、直線的に立ち上がる。端部内面及び受部と体部の境に沈線がまわる。14は土師器高杯の脚裾部である。脚部と裾部は短く、端部は丸い。調整は外面が磨滅しており不明、内面はナデである。胎土は精良であり、砂粒をほとんど含まず、色調は赤褐色である。15は須恵器の口縁部片である。端部付近で内湾気味になり、端部は丸い。器種は平瓶か。16～17は土師器甕である。16は口縁部が外反し、端部はやや平坦である。調整は頸部外面が縦方向のハケメ後ナデ、内面がナデである。17は頸部から胴部の破片である。胴部はやや長いものと考えられる。調整は表面の磨滅が著しいため不明であるが、内面は粘土の輪積みの痕跡を消しきれていない。

20～22号竪穴住居跡出土土器から、これらの竪穴住居跡は古墳時後期頃の遺構であろうか。

18は26号竪穴住居跡から出土した土師器高杯である。杯底部と口縁部の境には稜を有し、口縁部は下１／３の辺りから屈曲して外上方へ伸び、端部は丸い。調整はまめつしており不明であるが、器壁の凹凸が明瞭であり、作りが粗雑である。胎土は良で砂粒をほとんど含まず、色調は赤褐色である。古墳時代前期から中期の土師器であろうか。

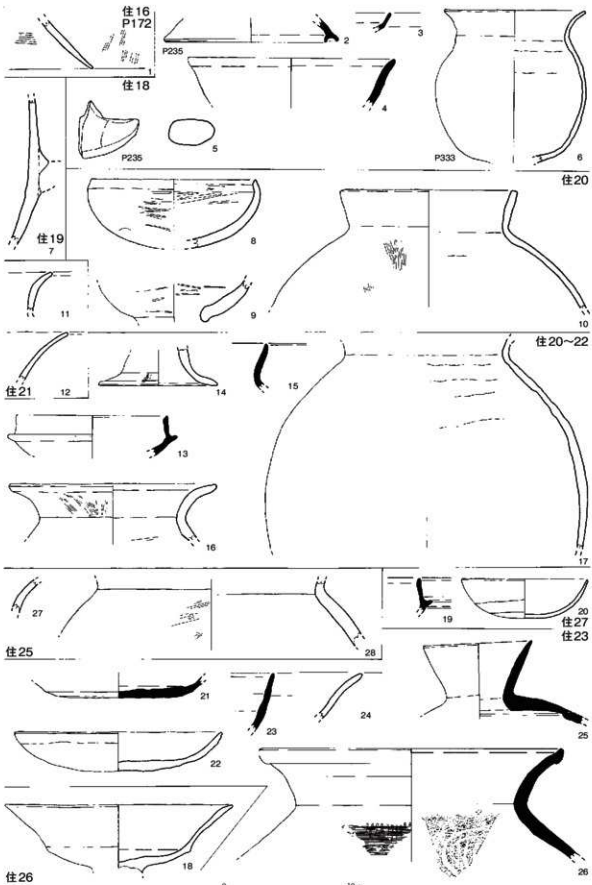
検討可能な土器が１点のみであり、検出範囲も狭いことから時期は判断しかねる。

19・20はP299から出土した。19は須恵器杯身である。口縁部はわずかに内傾しながら直線的に立ち上がり、端部は丸い。20は土師器杯である。調整は磨滅しており不明であるが、外面には粘土紐の単位が明瞭に残る。また一部赤色顔料が付着している。

竪穴住居跡から出土した遺物はないが、P299出土土器から、古墳時代後期頃の竪穴住居跡であろうか。

23・24・25号竪穴住居跡（図版７、第26図）

１b区南端に位置し、西側は１号溝に破壊され、南・東側は調査区外に延びる。検出状況から23号竪穴住居は24・25号竪穴住居跡に後続するが、24・25号竪穴住居跡に関しては調査区内で重複関係が確認できなかったため先後関係不明である。主軸は23号竪穴住居跡がN-26°-W、24号竪穴住居跡はほぼ南北方向、25号竪穴住居跡はN-26°-Wである。規模は23号竪穴住居跡が北西辺252cm以上、北東辺164cm以上、他の辺は不明である。しかし、北東辺中央にカマドが構築されており、住居中央に位置すると仮定すれば、１辺332cmの方形竪穴住居跡であると考えられる。24号竪穴住居跡は北辺240cm以上、東辺は120cm以上を測り、他の辺は不明である。25号竪穴住居跡は北西辺352cm以上を測り、他の辺は不明である。24・25号竪穴住居跡は調査区内における検出範囲が限定的であるため、規模の推定は難しい。住居内遺構については、23号竪穴住居跡に関してのみ確認された。カマドは北西壁に内接されていた。主柱穴は北西辺に並行し、かつカマドを挟んで対称の位置に２基検出された。対応する柱穴は調査区外に存在するであろう。



第27図　Ⅴ－１b区16・18～23、25～27号竪穴住居跡出土土器実測図（１／３）

出土遺物（第27図）

21～26は23号竪穴住居跡から出土した。21は須恵器杯身である。調整は外面が回転ヘラケズリ、内面が回転ナデである。22は土師器皿である。調整は磨滅しており不明である。胎土は精良で砂粒をほとんど含まず、色調は赤褐色である。23は須恵器杯身か。口縁部は直線的に伸び、端部は丸い。焼成不良で表面は粉を吹くような状態である。24は土師器高杯か。口縁部は外反気味に伸び、端部は丸い。調整は磨滅しており不明である。25は須恵器平瓶である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸い。調整は内外面ナデで、胎土には白色の砂粒が多く含まれる。26は須恵器甕である。口縁部は外反し、端部は若干上方につまみ上がり、口縁端部外面は肥厚する。調整は口縁部が内外面回転ナデである。肩部は外面が平行タタキ後カキメ、内面がナデであるが、当て具痕を消しきれていない。

カマドの存在や出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡であると考えられる。

27・28は25号竪穴住居跡から出土した土師器壺か。27は口縁部片であり、外反するが端部の形状は不明である。調整は外面がヨコナデ、内面が磨滅しており不明である。28は頸部から肩部にかけての破片である。調整は外面が横方向のハケメ、表面が磨滅しており不明瞭であるが、内面はナデであろう。色調は淡赤褐色を呈し、胎土も近似していることから同一個体と考えられる。

出土量がわずかであり、また、出土土器からも時期を判断することは難しい。

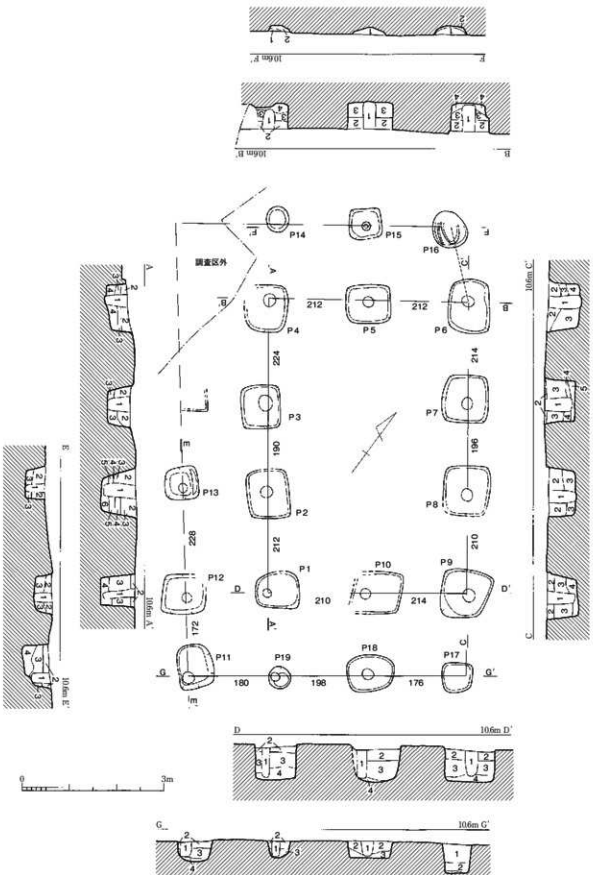
5　掘立柱建物跡（1b区）

1号掘立柱建物跡（図版8、第28図）

1b区北西部に位置する。6～10号竪穴住居跡と重複し、これらの遺構より新しい。桁行3間梁行2間の身舎の3面に1間分の廂が付く、桁行5間梁行3間の三面廂の掘立柱建物跡である。地方官衙における三面廂形式は全体の0.7%と少なく、極めて珍しい（奈良文化財研究所2003『古代の官衙遺跡Ⅰ』）。建物南西隅部分は調査区外に延びるため、廂の柱穴の内2基が確認されていない。梁行方向の軸はN-55°-E（桁行方向ではN-35°-W）である。建物の平面規模は桁行総長952cm、梁行総長554cmである。身舎の桁行総長は約620cm、梁行総長約424cmである。柱間寸法は桁行の中央間が190～195cm、脇間が210～214cmであり、中央間がやや狭い。梁行は210～214cmであり、ほぼ等間隔である。廂は両妻と北西側の平に付き、身舎の桁行及び梁行とほぼ並行するが、柱筋はわずかに通らない。廂の出は北西妻側で約158cm、南東妻側で約176cmである。柱間寸法は桁行約172～228cm、梁行約176～198cmであり、桁行の柱間寸法は身舎の中央間と脇間の関係とほぼ対応する。平側の廂が付く西南方向が正面と考えられる。柱穴規模は、身舎部分が1辺1mの方形であり、検出面からの深さは約60cm、柱の径は約25cmである。廂部分は1辺約50～90cmの方形もしくは円形であり、検出面からの深さは約30～40cm、柱の径は約20cmである。柱穴断面の特徴は、柱痕跡が灰色から暗灰色の締まりのない土であり、埋土は重複する竪穴住居跡の埋土と地山ブロック土で構成される。

出土遺物（第31図）

1はP6から、2はP2から、3はP18から出土した須恵器杯蓋である。1～3は口縁部内面にかえりを有する。4はP13から出土した須恵器高杯の裾部である。端部は短く外反する。5はP9か



第28図　Ⅴ－1b区1号掘立柱跡実測図（1／80）

ら、6はP15から出土した須恵器杯身である。5は焼成不良で表面は粉を吹いたような状態である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸い。6は丸みを帯びながら立ち上がり、端部は丸い。5に比して深さは浅い。7はP7から出土した土師器杯身である。8はP10から出土した土師器杯である。口縁部は丸みを帯びながら立ち上がり、端部はやや平坦である。表面の磨滅が著しいため、調整は不明である。胎土は精良で砂粒をほとんど含まず、色調は赤褐色である。9はP15から出土した土師器甕である。口縁部の屈曲がやや強い。表面が磨滅しており、調整は不明である。10はP17から出土した高杯である。小片であるが、脚部と裾部の境で明瞭に屈曲する。11はP10から出土した土師器高杯である。脚部は中空の柱状で開き気味であり、裾部との境から大きく開く。裾部との境より若干上方に2孔の透かし穴が穿たれる。12はP9から出土した土師器甕の把手であり、上方に直線的に伸びる。

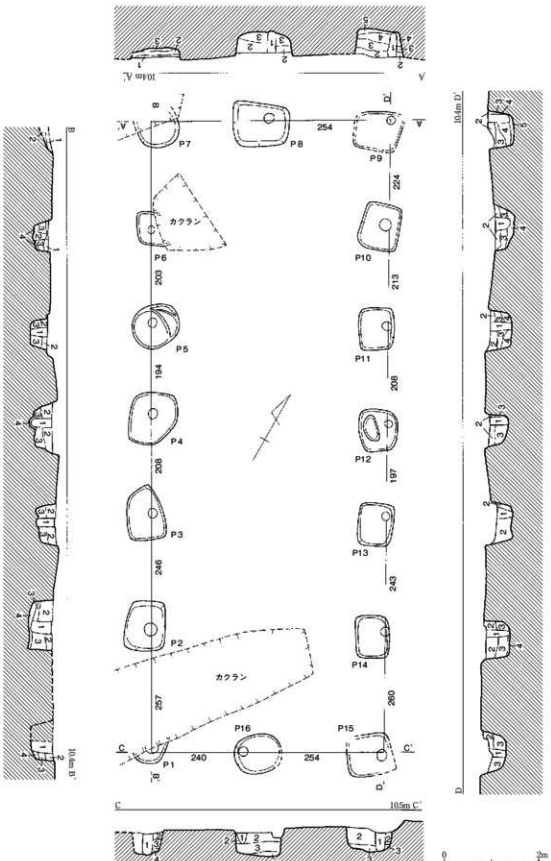
柱穴埋土と柱痕跡と出土位置を区別していないが、1～4の形状から7世紀後半代の建物跡と考えられる。ちなみに10・11は6・7号竪穴住居跡と重複しており、両遺構の遺物が混入したものと考えられる。

2号掘立柱建物跡（図版9、第29図）

1b区中央北寄りに位置し、1号掘立柱建物の東に近接する。また、4・5・7・11・13号竪穴住居跡や2号溝と重複し、竪穴住居跡群に後続し、2号溝より先行する。現代のゴミ穴によって隅柱2基が部分的に破壊されていたが、両妻で中央柱が確認されたため、桁行6間梁行2間の掘立柱建物跡であることが判明した。桁行方向の軸はN-29°-Wである。建物の平面規模は桁行総長約1340cm、梁行総長約498cmである。柱間寸法は桁行が194～260cmであり、中央2間がやや狭く、脇間に関しては北西側の脇間が南東側の脇間よりやや狭い傾向にあり、梁行は240～250cmである。柱穴規模は1辺100cmを基本とした方形もしくは不整形な円形であり、検出面からの深さは30～60cm、柱の径15～20cmである。柱穴断面の特徴は、柱痕跡が灰色から暗灰色の締まりのない土であり、埋土は重複する竪穴住居跡の埋土と地山ブロック土で構成される。

出土遺物（第31図）

13はP4から、14はP15から出土した須恵器杯蓋である。14は天井部と口縁部の境が不明瞭であり、端部は丸い。14は天井部が平坦で、口縁端部内側に短いかえりが付く。15はP7から、16はP13から出土した須恵器杯身である。いずれも口縁部は内傾し、受け部は短く外側に伸びる。17はP15から出土した須恵器杯身である。口縁部は直線的に延び、端部は丸い。18はP5から出土した土師器杯である。口縁部がわずかに外反気味に立ち上がる。表面が磨滅しており、調整は不明である。胎土は精良であり、砂粒をほとんど含まない。色調は黄褐色を呈し、土器焼成時の黒斑が一部に見られる。19はP16から出土した須恵器高杯脚部である。調整は内外面回転ナデである。20はP13から、21はP14から出土した土師器高杯である。20は杯底部と口縁部の境にくぼみがあり、口縁端部は丸みを帯びながら伸びる。表面の磨滅が著しく、調整は不明である。色調は淡赤褐色である。21は口縁部が直線的に伸び、端部は外反する。表面の磨滅が著しく、調整は不明である。色調は赤褐色である。22はP5から出土した土師器甕の把手である。端部は上方に湾曲する。23はP2から、24はP15から出土した土師器甕である。いずれも口縁部は外反する。調整は表面が磨滅しており不明である。23は砂粒が少なく、24は砂粒が多い。

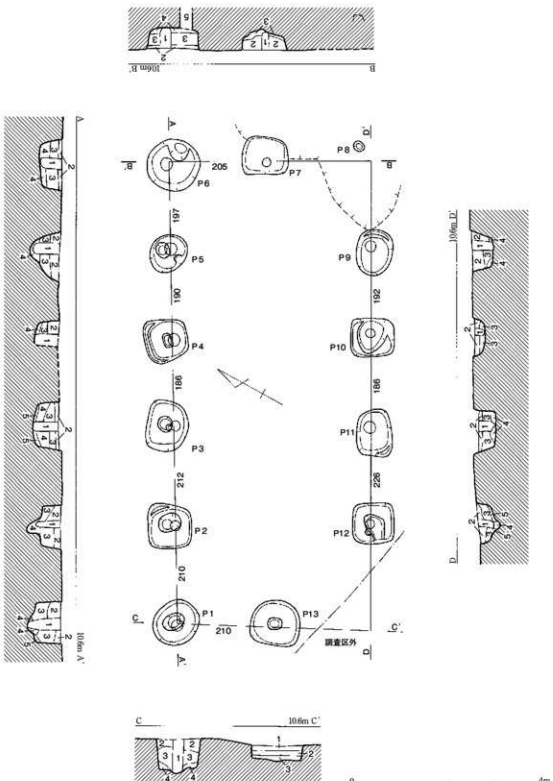


第29図　Ⅴ－1b区2号掘立柱跡実測図（1／80）

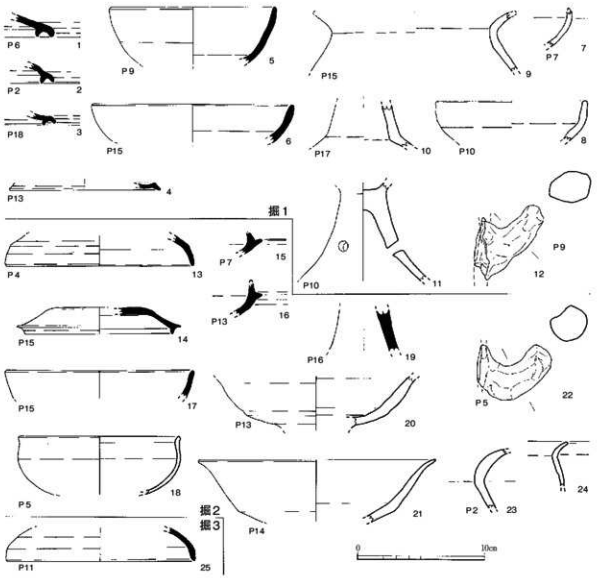
第１表　Ⅴ - １b区掘立柱建物柱穴断面観察表

柱穴	層	色調	特徴
１号Ｐ１	１	灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まり弱　砂が少量混じる
	３	暗褐色	地山由来土に暗褐色土が混じる
	４	黄褐色	３に似るがブロック土
１号Ｐ２	１	灰色	柱痕跡
	２	暗灰色	締まりやや弱　褐色土の粒が混じる
	３	黄褐色	地山由来土に褐色土が少量混じる
	４	暗褐色	褐色土が混じる
	５	黄褐色	３に似るがややブロック土
	６	暗褐色	４に似るがやや灰色
１号Ｐ３	１	灰色	柱痕跡　上部は２が少量混じる
	２	褐色	地山と暗褐色土の粒が混じる
	３	暗褐色	地山と暗褐色と褐色のブロック土が混じる
１号Ｐ４	１	灰色	柱痕跡
	２	褐色	締まりやや弱　地山と暗褐色土の粒が混じる
	３	暗褐色	地山由来土と暗褐色土が混じる
	４	暗褐色	地山と暗褐色土のブロック土が混じる
１号Ｐ５	１	暗灰色	柱痕跡
	２	黄褐色	地山と暗褐色土のブロック土が混じる
	３	黄褐色	２に似るがブロックがより明瞭
１号Ｐ６	１	暗灰色	柱痕跡
	２	黄褐色	地山と暗褐色土の粒が混じる
	３	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色ブロック土が少量混じる
	４	暗褐色	暗褐色ブロック土に地山ブロック土が少量混じる
１号Ｐ７	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱　暗褐色土に褐色土が少量混じる
	３	暗褐色	２に似るがブロック土
	４	褐色	地山ブロック土に暗褐色ブロック土が少量混じる
	５	黄褐色	４に似るがほぼ地山ブロック土
１号Ｐ８	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱　暗褐色土に褐色土が混じる
	３	暗褐色	２に似るがブロック土
１号Ｐ９	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱　暗褐色土に褐色土が混じる
	３	暗褐色	２に似るが地山ブロックとが少量混じる
	４	褐色	３に似るがブロックがやや明瞭
１号Ｐ１０	１	暗灰色	柱痕跡
	２	褐色	締まりやや弱　暗褐色土に褐色土の粒が混じる
	３	暗褐色	２に似るがブロック土
	４	褐色	地山ブロック土と暗褐色ブロック土が混じる
１号Ｐ１１	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱
	３	暗褐色	暗褐色土に褐色土が混じる
	４	黄褐色	地山ブロック土と暗褐色ブロック土が少量混じる
１号Ｐ１２	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱
	３	褐色	地山ブロック土に暗褐色土が少量混じる
１号Ｐ１３	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	暗褐色土に地山の粒が少量混じる
	３	暗褐色	２に似るがやや地山の粒が多い
１号Ｐ１４	１	暗褐色	
	２	褐色	暗褐色土に地山ブロック土が混じる
１号Ｐ１５	１	暗褐色	
１号Ｐ１６	１	暗褐色	
	２	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色土が混じる
１号Ｐ１７	１	暗褐色	暗褐色土に地山の粒が少量混じる
	２	暗褐色	１に似るが地山の粒がより多い
	３	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色土が少量混じる
１号Ｐ１８	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱
	３	暗褐色	２に似るがやや色調明るい
１号Ｐ１９	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	暗褐色土に地山の粒が少量混じる
	３	褐色	２に似るが地山の粒がやや多い　２号Ｐ１
	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	暗褐色ブロック土に地山ブロック土が混じる
	３	褐色	２に似るが暗褐色ブロック土がより多い
	４	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色土の粒が混じる
２号Ｐ２	１	暗灰色	柱痕跡
	２	褐色	暗褐色土に地山ブロック土が混じる
	３	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色ブロック土が少量混じる
	４	黄褐色	３に似るが暗褐色ブロック土がより細かく含まない
２号Ｐ３	１	暗灰色	柱痕跡
	２	褐色	締まりやや弱　暗褐色土と暗褐色土と地山の粒が混じる
	３	褐色	２に似るが締まりやや強いブロック土
２号Ｐ４	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱　暗褐色土と褐色土が混じる
	３	暗褐色	２に似るが締まりやや強いブロック土
	４	黄褐色	地山由来土に暗褐色土の粒が混じる
２号Ｐ５	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱　暗褐色土に地山の粒が混じる
	３	暗褐色	２に似るがブロック土
	４	黄褐色	地山由来土に暗褐色土の粒が少量混じる
２号Ｐ６	１	褐色	締まりやや弱　暗褐色土に褐色土が混じる
	２	暗灰色	柱痕跡
	３	暗褐色	暗褐色土に地山の粒が混じる
	４	黄褐色	３に似るが地山の粒がより多い

柱穴	層	色調	特徴
２号Ｐ７	１	暗褐色	暗灰色土に地山の粒と炭粒が混じる
	２	褐色	地山ブロック土に暗褐色土が混じる
	３	黄褐色	２に似るが暗褐色土が特別
２号Ｐ８	１	暗灰色	柱痕跡
	２	褐色	暗褐色土に地山ブロック土が混じる
	３	暗褐色	２に似るが地山ブロック土がより明瞭
２号Ｐ９	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	褐色土と暗褐色土の粒が混じる
	３	暗褐色	２に似るがブロック土
	４	褐色	暗褐色土と地山由来土が斑に混じる
	５	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色土の粒が少量混じる
２号Ｐ１０	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱　暗褐色土に地山由来土が少量混じる
	３	褐色	暗褐色土と地山由来土が混じる
	４	黄褐色	地山由来土に暗褐色土の粒が少量混じる
２号Ｐ１１	１	暗灰色	柱痕跡
	２	褐色	暗褐色土に地山ブロック土が混じる
	３	暗褐色	暗褐色土に地山の粒が少量混じる
	４	黄褐色	地山ブロック土と暗褐色ブロック土が混じる
２号Ｐ１２	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	暗褐色土と褐色土が混じる
	３	褐色	暗褐色ブロック土と地山ブロック土が混じる
２号Ｐ１３	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	暗褐色土に褐色土の粒が混じる
	３	暗褐色	暗褐色ブロック土に地山ブロック土が少量混じる
２号Ｐ１４	１	暗灰色	柱痕跡
	２	褐色	締まりやや弱　暗褐色土と地山由来土が混じる
	３	暗褐色	暗褐色ブロック土に地山由来土が混じる
	４	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色土が少量混じる
２号Ｐ１５	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	暗褐色土に褐色土の粒が混じる
	３	褐色	地山ブロック土に暗褐色ブロック土が混じる
２号Ｐ１６	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	暗褐色土に褐色土が混じる
	３	褐色	暗褐色ブロック土に地山ブロック土が混じる
２号Ｐ１７	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	暗褐色土に地山ブロック土が混じる
	３	褐色	暗褐色ブロック土に地山ブロック土が混じる
	４	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色土の粒が混じる
３号Ｐ１	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱
	３	褐色	暗褐色ブロック土に地山ブロック土が混じる
	４	黄褐色	３に似るが暗褐色ブロック土がやや少ない
３号Ｐ２	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱
	３	黄褐色	地ブロック土に暗褐色ブロック土が少量混じる
	４	黄褐色	３に似るが暗褐色ブロック土がやや多い
３号Ｐ３	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱
	３	暗褐色	暗褐色土に地山由来土が混じる
	４	褐色	地山ブロック土に暗褐色土が少量混じる
３号Ｐ４	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱　暗褐色土に地山の粒が少量混じる
	３	褐色	地山ブロック土に暗褐色ブロック土が混じる
	４	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色土が少量混じる
３号Ｐ５	１	黒灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱　暗褐色土に地山の粒が少量混じる
	３	褐色	地山ブロック土に暗褐色ブロック土が少量混じる
	４	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色土の粒が少量混じる
３号Ｐ６	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱
	３	暗褐色	暗褐色土に地山ブロック土が少量混じる
	４	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色土が混じる
	５	暗灰色	３号掘立柱建物以前の遺構か
３号Ｐ７	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	暗褐色土に地山の粒が少量混じる
	３	褐色	２に似るが地山の粒がやや多い
３号Ｐ８	１	暗灰色	柱痕跡
	２	褐色	褐色土に地山の粒が少量混じる
	３	暗褐色	２に似るが色調暗い
	４	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色土が少量混じる
３号Ｐ９	１	褐色	柱痕跡
	２	褐色	
	３	褐色	地山ブロック土に暗褐色土が混じる
３号Ｐ１０	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	暗褐色土に地山の粒が少量混じる
	３	暗褐色	暗褐色ブロック土に地山ブロック土が少量混じる
	４	褐色	３に似るがやや明るい
３号Ｐ１１	１	暗灰色	柱痕跡
	２	暗褐色	締まりやや弱　地山の粒が混じる
	３	暗褐色	暗褐色ブロック土に地山ブロック土が少量混じる
	４	灰色	砂土
	５	黄褐色	地山ブロック土に暗褐色土の粒が混じる
３号Ｐ１２	１	暗褐色	地山の粒が少量混じる
	２	褐色	暗褐色土と地山由来土が混じる



第30図　Ⅴ－１b区３号掘立柱跡実測図（１／80）

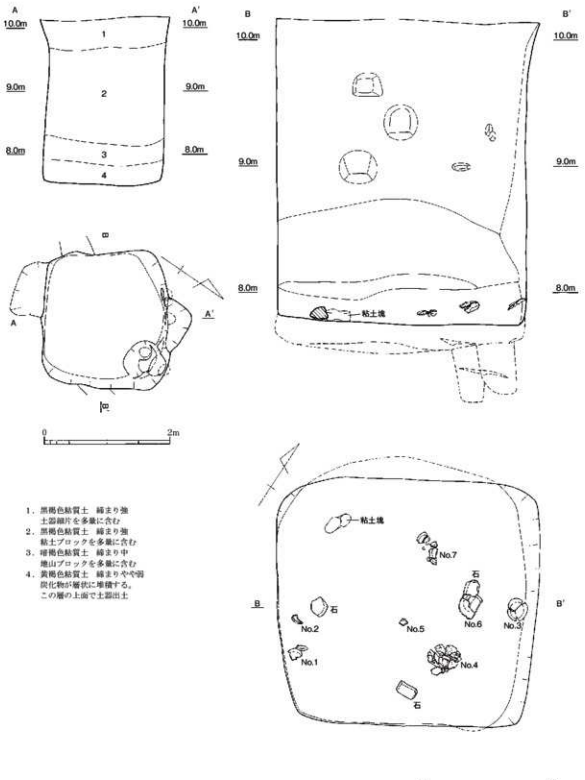


第31図　Ⅴ・1b区1～3号掘立柱建物跡出土土器実測図（1／3）

一部重複する竪穴住居跡の遺物の混入が見られるが、出土土器から7世紀中葉以降の建物と考えられる。

3号掘立柱建物跡（図版10、第30図）

1b区南端に位置し、1・2号掘立柱建物跡より南に約10m離れる。また、18・19号竪穴住居跡と重複し、竪穴住居群に後続する。南の隅柱は調査区外に、東の隅柱は現代のゴミ穴によってほぼ破壊されていたが、両妻で中央柱が確認されたため、桁行5間梁行2間の掘立柱建物跡であることが判明した。桁行方向の軸はN-60°-E（梁行方向の軸はN-30°-W）である。建物の平面規模は桁行総長約995cm、梁行総長416cmである。柱間寸法は桁行が186～226cmであり、東側3間がやや狭い傾向にあり、梁行が205～210cmである。柱穴規模は1辺約100cmを基本とした方形もしくは不整形な円形であり、検出面からの深さは20～70cm、柱の径は15～20cmである。柱穴断面の特徴は、柱痕跡が灰色から暗灰色の締まりのない土であり、埋土は重複する竪穴住居跡の埋土と地山ブ



第32図　Ⅴ－１b区１号土坑実測図（１／60、１／30）

ロック土で構成される。

出土遺物（第31図）

25はP11から出土した須恵器杯蓋である。小片であるが、口縁端部は丸い。

遺物がわずかであり、重複する竪穴住居跡の遺物が混入している可能性もあるため、出土土器から時期を判断することは難しいが、建物の主軸が2号掘立柱建物と直行するため、同時期の建物である可能性が高い。

6　土坑（1b区）

1号土坑（図版10・11、第32図）

1b区北部、2号掘立柱建物跡の北東に、約140cmの間隔を置いて位置する。主軸はN-30°-W、1辺約200cm四方の方形である。検出面から掘削面までの深さは約270cmであるが、北隅は奥まりながらさらに約40cm深くなるため、最深部までの深さは約310cmである。壁面はほぼ垂直であるが、北壁中央中位より上部に直径約30cm、奥行き約16cmの龕状の掘りこみが3基穿たれる。検出面から深さ約240cmまでの埋土は、地山ブロック土などの堅く締まった土であり、土器細片などが多量に含まれる。この埋土の下面では土師器皿などが伏せられた状態で出土し、また、部分的に炭化物が層状に堆積していた。周辺に火を受けた痕跡がないため、何らかの有機物が炭化したか、炭自体を撒いたのであろう。遺物出土状況を勘案すれば、この面が土坑の機能面であり、遺物出土面から掘削面までの黄褐色粘質土は貼床の可能性が考えられる。

出土遺物（図版13、第33図）

1・4・5・7～9・14～19は埋土から、2・6は1層から出土し、3・10～13・20・21は出土状況図に載っている遺物である。1～4は須恵器杯蓋である。いずれも口縁端部内側にかえりが付く。1は天井部に中くぼみのつまみが付き、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。2は口縁端部が横方向に屈曲し、端部は平坦である。かえりは口縁端部より下がり、端部は丸い。3（No.2）は口縁端部が平坦であり、かえりは三角形であり、口縁端部より下がる。4は端部が丸く、短いかえりが1～3に比して内側に付く。天井部の調整は回転ヘラケズリである。5・6は須恵器杯もしくは高杯である。口縁部は丸く、底部と口縁部の境に沈線がまわる。断面の色調はセピア色である。6は底部と口縁部の境は丸く、口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。調整は内外面回転ナデである。7・8は須恵器高杯脚部である。7は脚部が中空柱状で、裾端部は若干反り、端部は平坦である。8は裾端部が丸い。9は須恵器甕の把手である。幅広であり、端部は上方に湾曲し、内面に当具痕が残る。内外面灰色、断面は淡赤褐色である。10～13は須恵器甕である。10は口縁部が外反し、端部が内側につまみ上がり、外面が肥厚する。11は口縁部が外反し、端部は粘土を付け足して内外面ともに肥厚するが、外面は粘土の接合痕を消しきれていない。また、端部には1条の沈線がまわる。12は口縁部が外反し、端部が上方につまみ上がる。端部外面は肥厚するが、回転ナデにより浅くくぼみながら平坦に整えている。13は頸部から肩部の破片である。調整は外面が平行タタキ後カキメ、内面は当具痕が残る。14～17は畿内系暗門土師器である。胎土は精良であり、砂粒をほとんど含まず、色調は赤褐色である。14（No.1）は小型の杯、15（No.3）・16（No.7）は大型の杯、17（No.6）は皿である。底部は平坦で、口縁部は丸みを帯びながら伸び、端部は丸い。調整は内外面ミガキであり、内面は放射状の暗文があり、密度が高い。15は底部

第33図　Ⅴ－1b区1号土坑出土土器実測図（1／3）

に焼成時の黒斑が残る。18は土師器甑底部か。端部は平坦であり、調整は内外面ナデである。19～21は土師器甕である。19は口縁部が短く外反し、端部が丸い。調整は口縁部外面が縦方向のハケメ後ヨコナデ、内面がヨコナデである。胴部外面は縦方向のハケメ、内面が横方向のハケメである。色調は淡赤褐色である。20は口縁部が短く外反し、端部が丸い。調整は外面が縦方向の粗いハケメ、内面がナデである。21（No.4）は20と同一個体で、底部は丸底である。

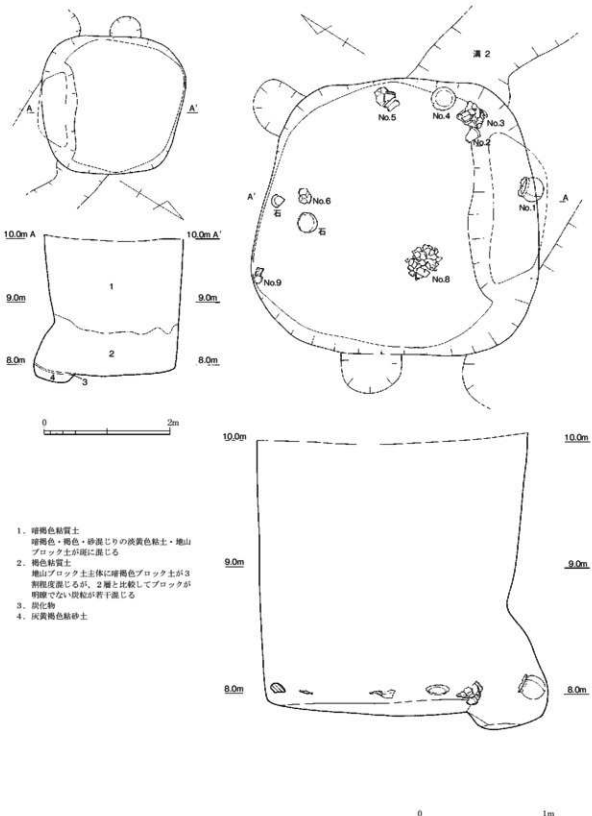
出土土器から、7世紀中頃から後半の土坑と考えられえる。

2号土坑（図版11、第34図）

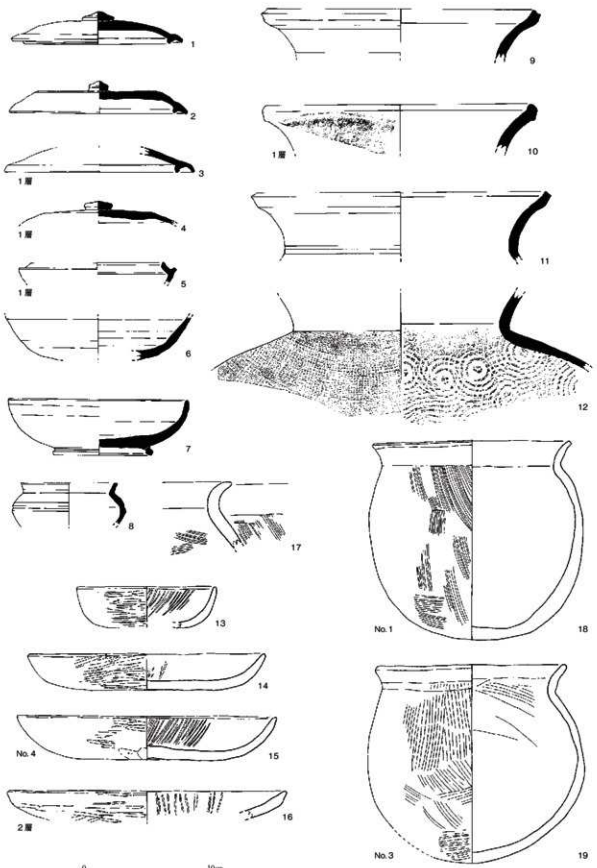
1b区北部東よりで、1号土坑の南東、2号掘立柱建物跡の東に位置する。1号土坑との間隔は約240cm、2号掘立柱建物跡との間隔は約180cmである。2号溝と重複し、溝より先行する。主軸はN-32°-W、1辺約200cm四方の方形である。検出面から掘削面までの深さは約220cmであるが、南東壁側はさらに約20cm深くなる。壁面はほぼ垂直であるが、南東壁は深さ140cmより下位が約30cm奥まる。土坑底面では破砕された土師器甕や土師器皿が据えられた状態で出土し、また、南壁下部の奥まった部分では完形の土師器甕が倒れた状態で出土した。土器出土面は掘削面とほぼ一致するが、南壁奥部は土師器甕の直下に炭化物層、さらに下には灰黄褐色土が約20cm堆積する。炭化物層周辺に火を受けた痕跡がないため、何らかの有機物が炭化したか、炭自体を撒いたものか。遺物出土状況を勘案すれば、この奥まった部分の灰黄褐色粘砂土は貼床であろう。

出土遺物（図版14、第36・37図）

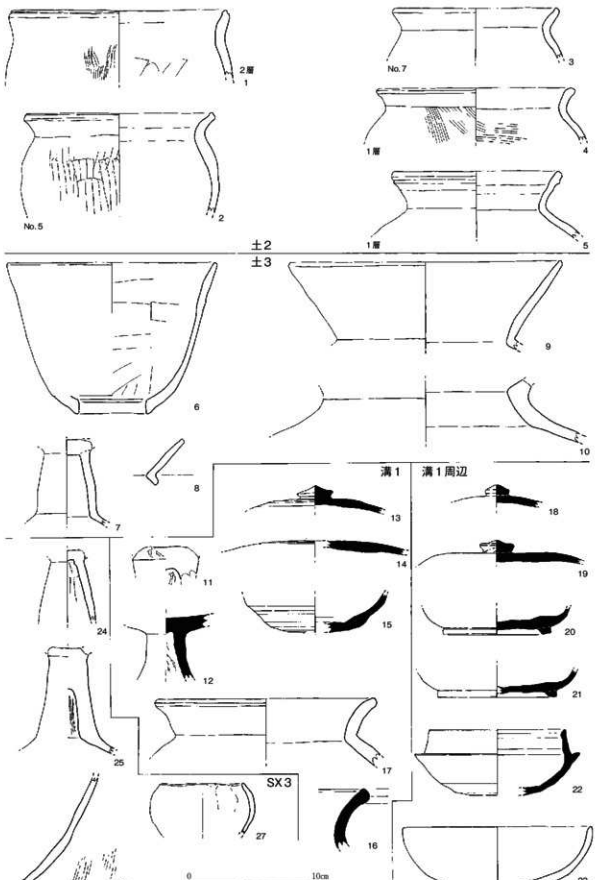
36図1・2・6・8・9・12～14・17は埋土から、3～5・10は1層から、16は2層から出土した。7・15・18・19は出土状況図に載っている遺物である。1～4は須恵器杯蓋である。1・2は天井部に宝珠形つまみがつき、口縁端部内側にかえりがつく。宝珠形つまみは、1が2に比して扁平かつ径が大きい。かえりは1が口縁端部より下がり、2は口縁端部とほぼ同じ高さである。調整は天井部外面が回転ケズリ、内面は回転ナデである。3は口縁部片であり、内側にかえりが付く。4は天井部の破片である。天井部に宝珠形つまみがつく。調整は外面が回転ケズリ、内面が回転ナデである。5・6は須恵器杯身である。5は口縁部が短く内傾し、受け部も短い。6は杯底部から口縁部の破片であり、端部は残存していない。調整は底部外面が回転ケズリ、内面は回転ナデである。7は須恵器杯身である。焼成不良のためか、色調が内面は灰色、外面は橙色である。外面は底部から口縁部は丸みを帯びながら伸び、端部は丸い。平坦な底部に短く外反し、端部は丸く、内面に稜をもつ高台が取り付く。調整は内面がナデ、外面が口縁部はナデ、底部は回転ケズリである。8は須恵器短頸壺である。口縁部は短く直立気味で、肩部と胴部の境にくぼみ状の沈線がまわる。調整は内外面回転ナデである。9～12は須恵器甕である。9は口縁端部が平坦であり、中央がややくぼみ、内側にややつまみ上げる。調整は内外面回転ナデである。10は口縁端部が丸く、上方にややつまみ上げる。口縁部外面は粘土を付け足して肥厚させる。焼成不良で表面が磨滅しており、調整は不明瞭だが、頸部外面に平行タタキ後カキメであろうか。11は口縁端部が平坦であり、上方にややつまみ上げる。外面はやや肥厚するが、9・10に比して厚くない。12は頸部から肩部の破片である。外面は平行タタキ後カキメ、内面は当て具痕が残る。13～16は畿内系暗門土師器であり、13は杯、14～16は皿である。13・15・16は胎土が精良であり、砂粒をほとんど含まないが、14は砂粒が多い。色調は赤褐色である。13は底部が平坦で、口縁部は丸みを帯びながら伸び、端部



第34図　Ⅴ－1b区2号土坑実測図（1／60、1／30）



第35図　Ⅴ－1b区2号土坑出土土器実測図①（1／3）



第36図　Ⅴ－1b区3号土坑出土土器実測図②、3号性格不明遺構、1号溝及び1号溝周辺出土土器実測図（1／3）

は丸い。調整は内外面ミガキであり、内面は放射状の暗文があり、密度が高い。14・15（No.4）は、磨滅しているが内外面の調整はミガキであろう。14は内面が磨滅しており不明である。16は口縁端部が短く、底部と口縁部の境が明瞭であり、端部が丸い。調整は内外面ミガキであるが、13～15に比して密度は高くない。18・19は土師器甕である。18（No.1）はほぼ完形である。口縁部は短く外反し、端部外面が若干肥厚する。丸底状の底部であり、自立する。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、胴部外面が縦方向の細かいハケメ、内面がナデである。胎土は良、砂粒をやや多く含み、色調は赤褐色である。19（No.3）は口縁部が短く外反し、端部は丸い。底部は丸底である。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、胴部外面が縦方向の粗いハケメ、内面がナデである。胎土・色調は19と近似する。

37図4・5は1層から出土した。1は2層から出土した。2・3は出土状況図に載っている遺物である。1～5は土師器甕である。1は口縁部の反りが緩やかである。口縁端部は上方につまみ上げ、端部外面はやや平坦で中央に沈線状のくぼみがまわる。調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケメ、内面がナデである。2（No.5）・3（No.7）は1に比して口縁部が強く外反し、端部はつまみ上がる。端部外面は平坦で中央に浅いくぼみがまわるが連続しない。調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面が縦方向の工具によるナデ、内面がナデである。1～3は胎土が精良であり、砂粒はほとんど含まず、色調も赤褐色であり、特徴が近似する。出土位置は離れているが、同一固体の可能性がある。4は口縁部が短く外反し、端部は丸い。調整は口縁部が内外面ヨコナデ、胴部外面が縦方向の細かいハケメ、内面が横方向の細かいハケメである。5は口縁部が直線的に外傾し、口縁端部外側が肥厚し、肥厚部下端は稜になる。調整は内外面回転ナデである。胎土は良で砂粒は少なく、色調は内外面淡黄褐色、断面赤褐色である。また、内外面に赤色顔料が付着する。器形や調整法は須恵器と同様であり、焼成不良の須恵器であろうか。

出土土器から7世紀後半の土坑と考えられる。

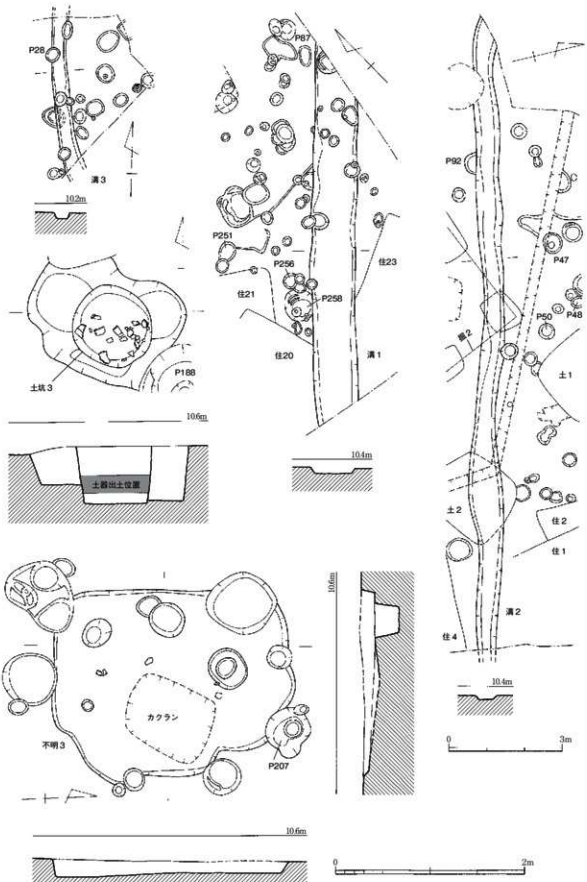
3号土坑（第35図）

1b区中央西端に位置する。周辺はピット群が高密度に分布しており、重複関係が著しい。規模は直径約85cm深さ約60cmの円形土坑である。遺物の出土位置は底面から10cm以上高い位置であり、埋没時に混入したと考えられる。周辺のピット群は掘立柱建物の柱穴の可能性があるが、建物の復元に至っておらず、3号土坑も柱穴の可能性はあるが、現状では性格不明である。

出土遺物（第37図）

6は土師器甑である。底部には穿孔が1箇所認められる。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。調整は外面が磨滅しており不明、内面が横方向のケズリである。7は高杯である。被熱により激しく損傷し、色調も一部赤化している。脚部と杯部との接合方法は円盤充填法である。8は土師器の甕の口縁か。端部が残存せず、詳細不明である。調整は内外面ナデである。色調は褐色である。9・10は土師器壺である。9は口縁部であり、口縁部は直線的に開き、端部は平坦である。調整は磨滅しており不明である。10は頸部から肩部の破片である。口縁部が残存していないが、口縁部に向かう屈曲が強い。調整は磨滅しており不明である。

重複遺構の遺物の混入も考えられるが、出土土器から古墳時代後期以降の土坑と考えられる。



第37図　Ⅴ・1b区3号土坑、3号性格不明遺構、1～3号溝実測図（1／40、1／100）

7　溝（1b区）

1号溝（第35図）

1b区南東部に位置する。20・23～25号竪穴住居跡と重複し、竪穴住居群に後続する。主軸はN-44°-Eであり、南西方向では隣接するV-2区の3号溝に繋がる。北東方向では隣接するⅡ-2区（東九州自動車道）でも延長が確認されている。規模は上端幅約120cm、下端幅約80cm、検出面からの深さは約20cmである。

出土遺物（第37図）

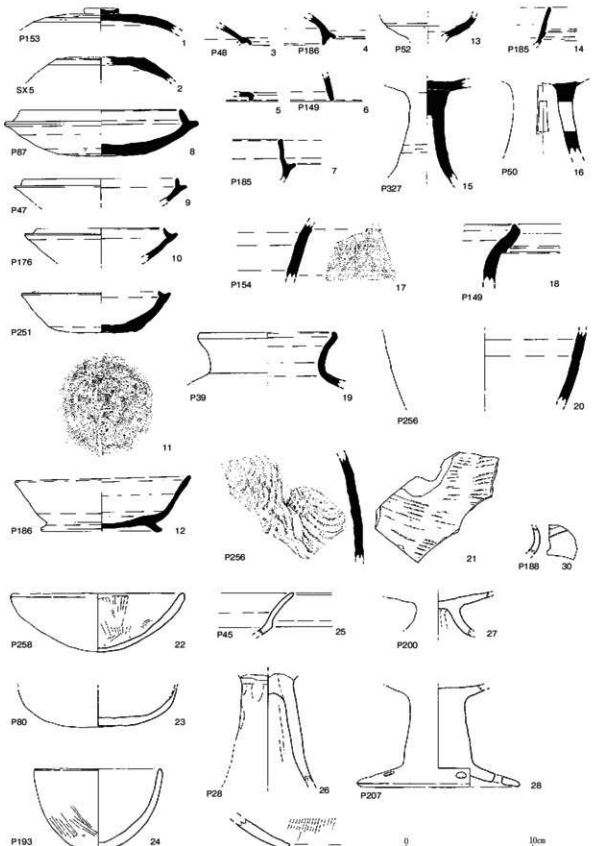
11～15までは溝の埋土から出土した。18～23は溝1周辺の検出時に出土した。溝の一部を掘っている可能性があるので、ここで掲載する。11は土師器高杯である。小片であるが、接合痕から、脚部と杯部は別作りであると考えられる。12は須恵器高杯である。調整は杯部内面がナデ、脚部外面が回転ナデである。13・14は宝珠形つまみが付く須恵器杯蓋である。13は立体的で縁辺はシャープなつまみが付き、14はつまみが欠落している。調整は外面が回転ヘラケズリ、内面が回転ナデである。15は須恵器杯身である。調整は底部の回転ヘラケズリをせず、他は回転ナデである。16は須恵器甕である。口縁部は外反し、端部は丸く、外面が肥厚する。調整は内外面回転ナデである。17は土師器甕である。口縁部は外反し、端部は丸い。調整は磨滅しており不明である。18・19は宝珠形つまみが付く須恵器杯蓋である。天井部の破片であるが、つまみは立体的であり、径は18の方が小さく、盛り上がりは若干大きい。調整は灰かぶりのため不明である。19の調整は天井部が回転ヘラケズリ、内面がナデである。内面は特に滑らかであるが、墨痕などは確認されなかった。20・21は須恵器の高台付杯身である。高台は底部と体部の境付近に付き、若干外側に張る。断面は逆台形であり、端面は若干くぼむ。調整は体部外面が回転ナデ、底部は回転ヘラケズリをせず、内面は回転ナデである。21は高台が底部と体部の境付近に付き、若干外側に張る。断面は逆台形であり、端面は平坦である。調整は体部外面が回転ナデ、底部はナデ、内面は回転ナデである。見込み部分は特に滑らかであるが、墨痕などは確認されなかった。22は須恵器杯身である。口縁部はわずかに内傾し、直線的に立ち上がり、端部は平坦である。受部と体部の境に沈線がまわり、端部はシャープである。調整は、底部外面が回転ヘラケズリ、体部・口縁部外面は回転ナデ、内面は回転ナデである。23は土師器杯である。底部は平坦で、口縁部は丸みを帯びながら伸び、端部は細く丸い。調整は内外面ナデである。底部外面には成形時の粘土接合痕が残る。胎土は良で、砂粒は少ない。色調は淡赤褐色である。

遺構の重複が激しい箇所であり、先行する竪穴住居跡の遺物と考えられるものが混入しているが、出土土器から奈良時代前半の溝と考えられる。

2号溝（第35図）

1b区北部に位置する。1号竪穴住居跡・2号掘立柱建物・2号土坑などと重複し、これらの遺構に後続する。主軸はN-78°-Wで、西側延長は1a区で確認されていないため、1a区と1b区の間で北か南に曲がると考えられる。東側は隣接するⅡ-2区（東九州自動車道）で延長が確認されている。規模は上端幅約60cm、下端幅約40cm、検出面からの深さ約5cmである。

時期が検討できる遺物はないが、遺構の重複関係から中世以降の溝か。



第38図　Ⅴ－1b区その他の遺構出土土器実測図①（1／3）

３号溝（第35図）

１b区北東部に位置し、主軸はほぼ南北方向である。南側は若干東に曲がるが、隣接するⅡ-２区（東九州自動車道）で延長が確認されていない。規模は上端幅約40cm、下端幅約30cm、検出面からの深さ約20cmである。

時期が検討できる遺物はないが、遺構の重複関係から中世以降の溝か。

８　性格不明遺構（Ｉb区）

３号性格不明遺構（第35図）

１b区西南部に位置する。長軸がほぼ南北方向である。規模は長軸約380cm、短軸約300cm、検出面からの深さは６～18cmの不整形土坑である。遺物出土量は少なく、性格不明である。

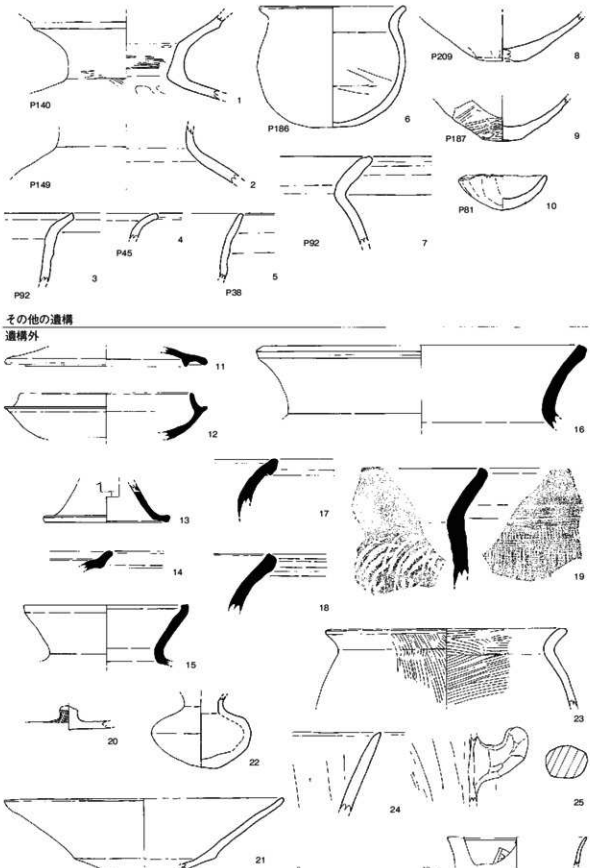
出土遺物（第37図）

24・25は土師器高杯である。24は中空柱状の脚部で、杯部との接合方法は円盤充填法である。調整は磨滅しており不明である。25は中空柱状の脚部であるが、内面が狭く、重量感がある。接合痕から杯部と脚部は別作りであろう。調整は表面が剥離しており不明である。26は土師器椀あるいは杯である。口縁部は内湾し、端部は丸い。内面には指頭圧痕が残る。27は土師器甕である。調整は外面がハケメ、内面が磨滅しており不明である。

須恵器がまったく出土しないことや高杯の特徴から、古墳時代前期以降の遺構であろう。

９　その他の遺構出土、遺構外出土土器（１b区）（図版14、第38・39図）

38図１はP150から出土した須恵器杯蓋である。天井部に扁平な宝珠形つまみが付く。８世紀代であろう。２はSX５から出土した須恵器杯蓋である。天井部平坦であり、回転ヘラケズリをしない。７世紀前半であろう。３はP48から、４はP186から出土した須恵器杯蓋である。口縁部内面にかえりが付く。７世紀代であろう。５はP40から出土した。須恵器杯蓋か。端部はほぼ直角に屈曲する。８世紀代であろう。６はP149から出土した。須恵器杯蓋か。端部は丸い。７はP185から出土した須恵器杯身である。口縁部はわずかに内傾し、直線的に立ち上がる。端部中央が浅くくぼみ、受部と体部の境に沈線がまわる。６世紀前半であろう。８はP87から、９はP47から、10はP176から、11はP251から出土した須恵器杯身である。口縁部は短く内傾する。８は底部が回転ヘラケズリをし、11はしない。７世紀前半であろう。12はP186から出土した須恵器の高台付杯身である。焼成不良のため、内外面磨滅している。調整は底部外面が回転ヘラケズリである。高台は底部と体部の境付近に付き、外側へ張り出す。７世紀後半であろう。13はP52から出土した須恵器高杯杯部である。脚部の透かし孔穿孔時の工具痕が残る。７世紀前半以前か。14はP185から出土した須恵器高杯杯部である。口縁部はやや外傾し、口縁下約２cmの箇所に２条の平行する沈線がまわる。15はP327から、16はP50から出土した須恵器高杯である。15は透かし孔がなく、16は少なくとも２箇所透かし孔がある。７世紀前半以前か。17はP154から出土した須恵器壺・器台あるいは甕か。外面に２段の波状文がある。６世紀代か。18はP149から出土した須恵器甕である。口縁は外反し、端部は上方につまみ上げる。口縁外面が肥厚し、沈線がまわる。19はP39から出土した須恵器壺か。口縁部は外反し、端部は上方につまみ上がる。20はP256から出土した須恵器壺か胴部片である。調整は内外面回転ナデである。21はP256から出土した須恵器甕である。調整は外面が



第39図　Ⅴ－１b区その他の遺構出土土器実測図②、遺構外出土土器実測図（１／３）

平行タタキ、内面は当具痕が残る。外面は自然釉がかかる。22はP258から出土した土師器椀か。口縁端部は丸く、底部は丸底である。調整は内面がハケメ、外面が磨滅しており不明である。23はP80から出土した土師器杯である。調整は内外面磨滅しており不明である。24はP193から出土した土師器鉢である。丸底状の底部である。調整は底部付近でハケメ、それ意外は表面が剥離しており不明である。25はP43から出土した高杯である。口縁部は底部から大きく外反する。弥生時代後期であろうか。26はP28から出土した土師器高杯脚部である。杯部と脚部の接合は充填法である。27はP200から出土した土師器高杯である。脚部は短く、裾部は開く。28はP207から出土した土師器高杯である。脚部は中実柱状で裾部が大きく開き、径0.8cmの透かし孔が4孔ある。杯部の形状は不明だが、古墳時時代前期であろう。29はP55から出土した高杯か器台の裾部である。端部は平坦である。30はP188から出土した近世磁器か。

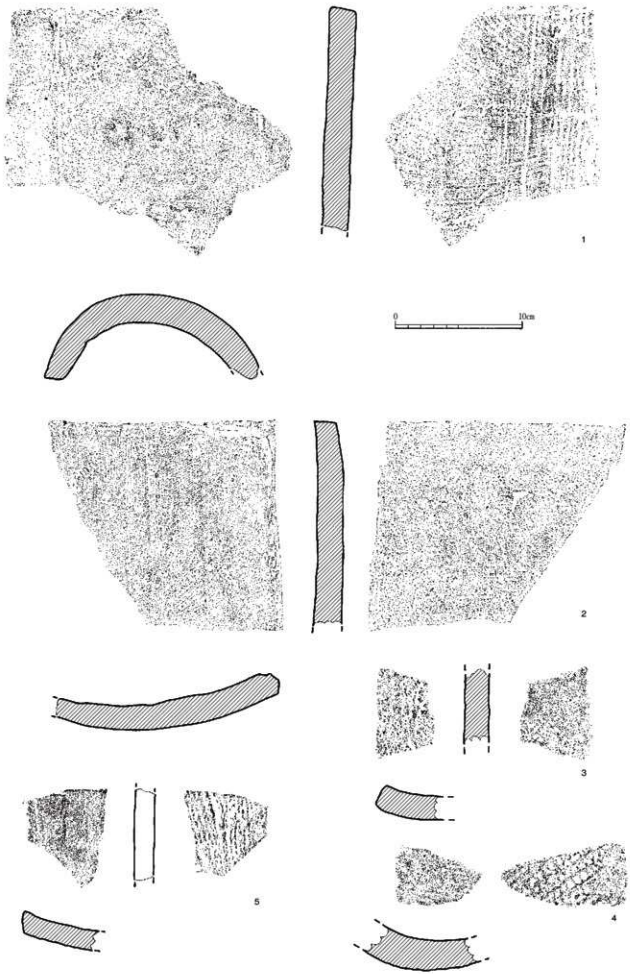
39図1はP140から出土した土師器壺である。口縁部の屈曲から二重口縁壺であろう。古墳時代前期である。2はP149から出土した土師器壺の頸部である。3はP92から、4はP45から、5はP38から、6はP186から、7はP92から出土した甕である。3～5は頸部の屈曲が弱く、外反し、端部はやや平坦である。5はほとんど外反しない。6は口縁部が短く外反し、端部は丸く、底部は丸底状で自立する。調整は外面が磨滅しており不明、内面がナデである。7は口縁部が「く」の字状に屈曲し端部は丸い。8はP209から出土した甕である。底部は上げ底状の平底である。9はP187から出土した甕である。底部は平底で、調整は外面がタタキ、内面が磨滅しており不明である。砂粒を多く含む。10はP81から出土した小型の椀か。底部は丸底である。

39図11～26は遺構外出土の遺物である。11は須恵器杯蓋である。口縁部内面に短いかえりが付く。7世紀後半である。12は須恵器杯身である。口縁部は外反しつつ内傾する。調整は底部外面が回転ヘラケズリである。6世紀後半である。13は須恵器高杯である。脚部に長方形透かしが入る。裾端部は平坦である。6世紀後半以前か。14は須恵器壺か。端部は外反する。15は須恵器壺である。口縁部は外傾し、端部は平坦であり、内面に稜がつく。16～19は須恵器甕である。16は口縁部が外反し、端部はやや平坦である。口縁端部外面が肥厚する。17は口縁端部外面の肥厚部の下に稜がつく。18は16と同一個体か。19は口縁部が外反し、端部はつまみ上がる。調整は外面が平行タタキ後カキメ、内面は当具痕が残る。20は畿内系暗文土師器の杯蓋である。天井部に乳頭状のつまみが付く。調整は外面がミガキ、内面がナデである。7世紀中葉か。21は土師器高杯である。杯底部と口縁部の境に若干稜が付き、口縁端部は丸い。古墳時代前期である。22は土師器小壺である。底部は丸底状であり、傾斜するが自立する。23は土師器甕である。口縁部は短く外反し、端部は丸い。調整は外面が粗い縦方向のハケメ、内面が粗い横方向のハケメである。24は器種不明の口縁部である。口縁部は直線的で端部は先細る。調整は外面が磨滅しており不明である。内面が縦方向のケズリである。25は土師器甑把手である。端部は上方に湾曲する。調整は外面ナデ、内面が縦方向のケズリである。26は磁器である。口縁は外反する。近世か。

10　その他の遺物（1b区）

出土瓦（図版15、第40・41図）

1・2は1号土坑出土である。1は丸瓦片である。内面には布目の痕跡が明瞭に残る。2は平瓦片である。これも内面に布目の痕跡が明瞭に残る。3は1号溝出土の平瓦片である。調整は磨滅し



第40図　Ⅴ－１区出土瓦実測図①（１／３）

ており不明である。4はP15出土の平瓦片である。外面には格子目の痕跡が残るが、内面の痕跡は布と思われるが不鮮明である。他の瓦に比べて肉厚であり、全体的に丸みもあるので丸瓦の可能性もある。5はP191出土の平瓦である。外面には縄目の痕跡が明瞭に残る。6～12は包含層出土である。6・7は同一の丸瓦片か。6は行基式丸瓦の玉縁付近の破片であるが、玉縁部分は欠損している。8～12は平瓦片である。8・12の外面には縄面の痕跡が明瞭に残る。その他の調整は不鮮明である。

出土土製品（図版16、第41図）

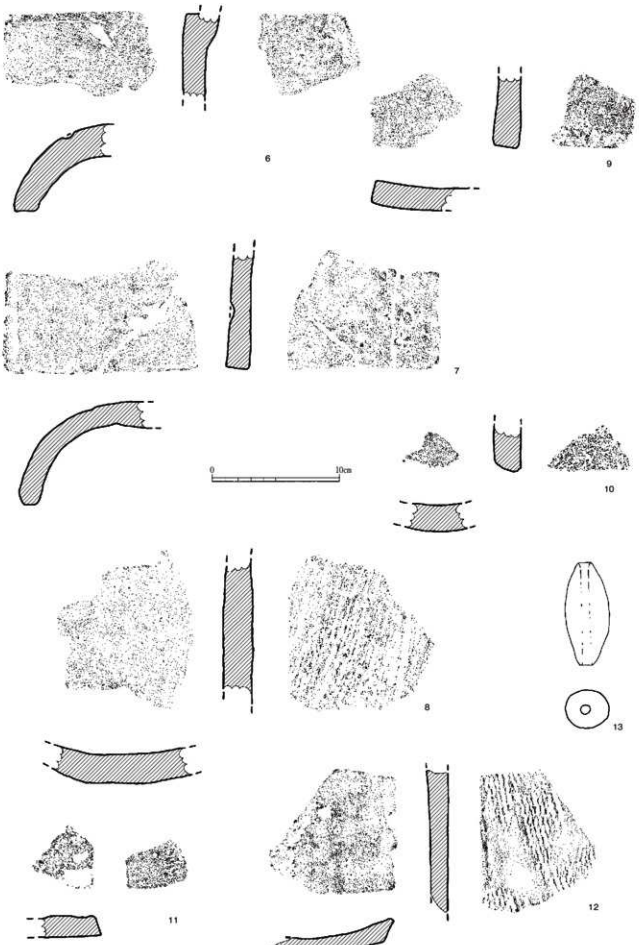
13は包含層出土の一回り大きな土錘で、調査区内で唯一の遺物である。焼成は良好で全体的に橙色となり、ほぼ完形な状態で出土する。孔径1.1cmを測る。

出土石製品（図版16、第42図）

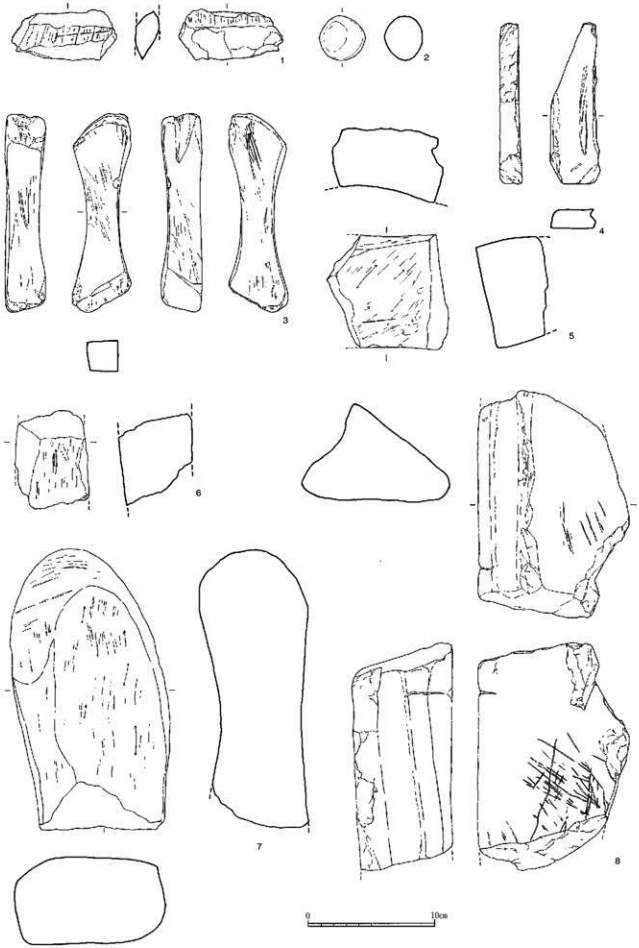
1は2号土坑出土の滑石製石鍋の体部片か。全体的に残りは良くなく、内外面ともわずかにしか元の器面を残していない。わすかに縦方向の削りの痕跡が残る。再利用した痕跡は見当たらない。2は7号竪穴住居出土の投げ玉で、外面は全体的に滑らかである。少し崩れた楕円形である。3～8は砥石である。3は2号竪穴住居出土で、表面には縦や斜め方向の擦痕が残る。石は四面すべてを砥石として使用しているため、特に両側面の中程が深くくぼんでいる。4は7号竪穴住居出土である。白色の石は上面を砥石として使用していて、わずかに擦痕が残る。5は14号竪穴住居出土である。上下の端や裏面は欠損しているが、三面を砥石として使用している。6は1号土坑出土である。これも両端を欠損していて残りは悪いが、向かい合う2面のみ砥石として使用している。7はP152出土である。先端部は丸みを帯び、擦痕が残り、下端が欠損する。これも2面のみ砥石として使用していて、中程がくぼんでいる。8は包含層出土である。外面には斜め方向の擦痕が明瞭に残る。断面三角形状を呈し、その内2面を砥石として使用したものか。

出土鉄器・鍛冶関連遺物（図版16、第43図）

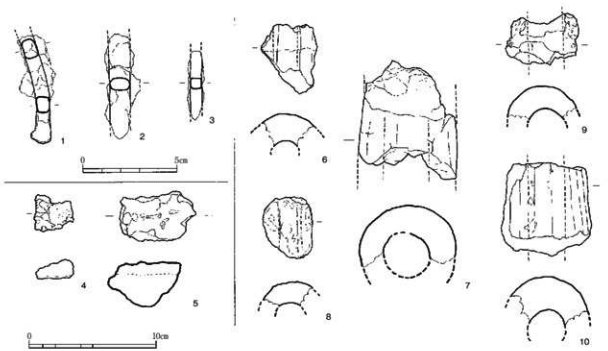
1～3は鉄製品である。1はP186出土である。下端部は欠損しているが、逆レ状になる。また全体的に湾曲しており、鎹の可能性がある。2はP188出土の不明鉄製品片である。断面形は隅丸長方形状となる。3は包含層出土の釘である。先端部は三角形状に尖るが、断面形は四角になる。4～10は製鉄関連遺物である。4・5は塊形鍛冶滓である。4は1号土坑、5は2号土坑出土である。底面に灰色の炉床土が付着する。6～10は羽口片である。6～9は先端部に近い部位で、外面が黒く焼けている。6は1号土坑出土、7はP149出土、8～10は包含層出土である。7の羽口片の残りから、外径7.6cm、内径3.5cm程の孔径が推測される。8は特に先端に近い位置にあるものか。他よりも溶解したガラス質状のものが付着する。10は羽口片の中程の部位である。全体的に厚いが、外面は縦方向に削られて円形になる。



第41図　Ⅴ－１区出土瓦実測図②・土製品実測図（１／３）



第42図　Ⅴ－１区石製品実測図（１／３）



第43図　Ⅴ－１区鉄器・鍛冶関連遺物実測図（１／２、１／３）

第２表　Ⅴ－１区出土土製品・石製品・鉄器・鍛冶関連遺物観察表

挿図	番号	図版	出土遺構	種類	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	残存	備考
41	13	16	包含層	土製品	土錘	8.1	3.6	2.1	78.2	0.9	
42	1	16	2号土坑	石製品	石鍋片	4.0	8.3	2.0	93.2	0.5以下	滑石
42	2	16	7号竪穴住居	石製品	投げ玉	3.6	3.6	3.0	50.3	1.0	凝灰岩
42	3	16	2号竪穴住居P97	石製品	砥石	15.8	4.7	3.3	312.7	0.8	粘板岩
42	4	16	7号竪穴住居	石製品	砥石	12.8	4.0	1.8	106.4	0.5以上	凝灰岩
42	5	16	14号竪穴住居	石製品	砥石	9.6	8.8	5.7	711.1	0.5以下	砂岩
42	6	16	1号土坑	石製品	砥石	7.8	5.8	5.9	286.7	0.5以下	凝灰岩
42	7	16	P152	石製品	砥石	22.2	12.6	7.0	2779.8	0.5以上	砂岩
42	8	16	包含層	石製品	砥石	18.0	12.0	7.9	1754.7	0.8	砂岩
42	1	16	P186	鉄製品	鎹？	6.7	0.7	0.8	16.8	0.5以下	
42	2	16	P188	鉄製品	不明	5.6	1.1	0.7	15.0	0.5以下	
42	3	16	包含層	鉄製品	釘	3.6	0.6	0.6	3.9	0.5以下	
43	4	16	1号土坑	鍛冶関連	椀形滓	3.0	3.2	2.6	9.2	1.0	
43	5	16	2号土坑	鍛冶関連	椀形滓	4.0	6.0	3.7	73.3	1.0	
43	6	16	1号土坑	鍛冶関連	羽口	5.5	4.5	2.2	47.0	0.5以下	
43	7	16	P149	鍛冶関連	羽口	9.5	4.9	2.3	188.9	0.5以下	
43	8	16	包含層	鍛冶関連	羽口	4.9	4.0	1.7	31.8	0.5以下	
43	9	16	包含層	鍛冶関連	羽口	4.1	5.5	1.9	43.7	0.5以下	
43	10	16	包含層	鍛冶関連	羽口	7.5	4.1	2.2	172.0	0.5以下	

11　小結

本調査区においては、弥生時代終末から古墳時代前期、古墳時代後期、古代の遺構・遺物が検出された。また、直接遺構の時期を示すものではないが、弥生時代後期以前の遺物も出土した。

竪穴住居跡に関して、他の調査区でも多数検出されており、総合的に検討する必要はあるが、ここでは、V-1区に関して述べる。各時期にまとめると、弥生時代終末から古墳時代初頭のものが28号の1棟、古墳時代初頭のものが7・14号の2棟、古墳時代後期の竪穴住居跡は確定的なものが18棟、可能性が高いものが1棟である。時期不明が6棟であるが、残存する深さを考慮すれば後期のものが多いであろう。古墳時代初頭のものは、主軸が約65度西に振っており、また後期の竪穴住居跡と比較して面積は大きく、検出面からの深さも深い傾向にある。このためか、屋内施設も、壁溝・ベッド状遺構・床面小溝・屋内土坑・小穴群などが良好に残存していた。後期の竪穴住居跡の時期を詳細にみると、5号から6世紀初葉の杯蓋が、1・4・9・12・20・21・27号から6世紀前葉の須恵器が、6・15号から6世紀後半の須恵器が、18号の柱穴から7世紀中・後葉の須恵器杯蓋が出土した。住居跡の数は、後期でも6世紀前葉が最も多い。不明も含めた後期の住居の主軸は、ほぼ北向きが8・22・24号、5～12度振るものが1～5・11号、18～30度振るものが9・10・13・16～20・23・25～27号、34～60度振るものが1（1a区）・6・12・15号であり、6・12号は主軸が一致する。傾向としては、振り幅が小さいものが先行し、大きいものが後続する。カマドを有するものは1・4・6・12・15・20・23号の7棟であり、主軸が北向きに近い1・4号は北壁に、北から約60度振る6・12・15号は北東あるいは北西壁に内接される。設置位置は概ね壁中央であるが、6号のみ北寄りに偏る。壁溝が検出されたのは2・4・8・9・10・18・19・26号であるが、主軸・規模等との相関関係は特に見出せない。分布に関して、20～27は特に重複関係が著しい。東に隣接するII-2区で住居跡が濃密に重複しており、20～27号はこの住居群の西縁辺に位置しているのであろうか。

掘立柱建物に関して、検出された遺構は7世紀後半代の官衙的な配置をとる大型掘立柱建物である。1号と2号は近接し、かつ、主軸角度が若干異なるため、同時並存は考え難い。1・3号の主軸は直行し、関係は強いと考えられるが、1号の中軸線に対して3号と対称の位置は1a区内であるが、対応する建物はない。未調査部分である1a区・1b区間の遺構配置の解明が待たれる。

土坑に関して、大型の1・2号はいずれも底面で湧水はなく、井戸とは考え難い。また、底面に炭化物の集中箇所があり、炭の防湿効果を考慮すれば貯蔵の用途も想定できる。特徴としては、1号の壁面の小穴が挙げられる。類例として平城宮東楼（SB7802）の柱穴壁面に穿たれた龕風掘込みがあり、足掛け用の穴と考えられている（奈良国立文化財研究所1982『平城宮発掘調査報告XI』）。当遺構に関しても同様の機能であろうか。また、1号・2号ともに畿内系暗文土師器が出土した。畿内系暗文土師器は貴重品の可能性が高く、両土坑は用途が特別なのか、あるいは祭祀に用いられた土器なのであろうか。両土坑は稀有な遺構であり、用途は特定し難いが、出土土器の時期は掘立柱建物群と近似しており、建物群と合わせて官衙を構成する施設の一部であった可能性も考えられる。類例の増加を待って検討したい。

溝に関して、1号溝は奈良時代の溝であるが、隣接するV-2区やII-2区における溝の延長から、V-1区の掘立柱建物群を囲繞する溝ではない。時期的には掘立柱建物群に後続するようであるが、溝の性格に関しては溝の内側に当たる部分の遺構配置などを勘案した上で検討したい。

Ⅳ　V-２区の遺構と遺物

１　調査の概要

V-２区はV-１区の南側に現道を挟んで隣接し、面積は約600㎡である。標高は調査区中央付近で約11m、南側に向かってわずかに傾斜する。調査前は住宅があったが、その前は畑地だったようであり、住宅に伴う攪乱、及び南北方向の畑の勘溝によって、遺構は大きく壊されていた。

遺構は表土直下の黄褐色粘質土の地山面上に確認でき、遺構の識別は容易であったが、遺構密度は特に北側で高く、その部分では遺構の切り合い関係の把握に苦慮した。遺構は弥生時代後期終末から中世にかけ、竪穴住居跡が11棟、掘立柱建物跡が２棟、柵列が２条、溝が３条の他、道路状遺構が確認された。

２　竪穴住居跡

１号竪穴住居跡（図版18、第45図）

調査区北東に位置し、２号竪穴住居跡を切る。北東部は調査区外に延びるが、北西-南東340cm、北東-南西325cmの方形プランである。検出当初は２号竪穴住居跡との切り合い関係が明瞭でなく、10cm程両住居跡の埋土を掘り下げたところ、１号竪穴住居跡の方が同じ暗褐色粘質土でも明るい色調のため区別することができた。北西壁中央にカマドを有し、この付近は埋土にカマドの構築材の一部と思われる粘土塊が多く見られたものの、残存状況は悪く、基底部を残すに留まる。燃焼部は赤く焼けており、その手前には径40～50cm程の範囲に木炭が溜まっていた。

床面には赤褐色の地山ブロックを多く含む堅く締まった土が３～５cm程の厚さで広がっており、貼床を施していたものと思われる。柱穴は現代の建物の基礎の関係で精査することができず、確認することができなかった。

出土土器（第46図）

１は直口壺で口縁部は内湾して立ち上がる。磨滅が著しく調整は不明。２は壺の口縁部と思われるが、中程で丸みを帯びて外に張り出す。端部は外側に突出する。磨滅が著しく調整は不明。３～５は甕である。いずれも緩やかに外反するが、５は屈曲部で器壁が厚くなる。磨滅が著しいが、４は外面にハケ調整が残る。６は小型器台、７・８は高杯である。７は口縁部で磨滅が著しい。８は脚部で裾が屈曲して外に開く。外面調整はミガキで、脚部上部内面には絞り痕が残る。９・10は須恵器である。９は須恵器高杯で杯部と口縁部の境に沈線を施す。10は須恵器甕の口縁部で端部先端、及び内端、外端が突出する。

11～15は１号竪穴住居跡と２号竪穴住居跡との切り合い部分から出土したもので、取り上げ時に判別できなかったものである。11は二重口縁壺の口縁部で、外面にハケ調整の痕跡が残る。12・13は鉢の口縁部になろうか。いずれも緩やかに内湾し、器面は磨滅が著しい。14は高杯で磨滅しているがハケ調整が残る。15は甑の把手部で粗いナデによって調整する。

出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

２号竪穴住居跡（図版18、第45図）

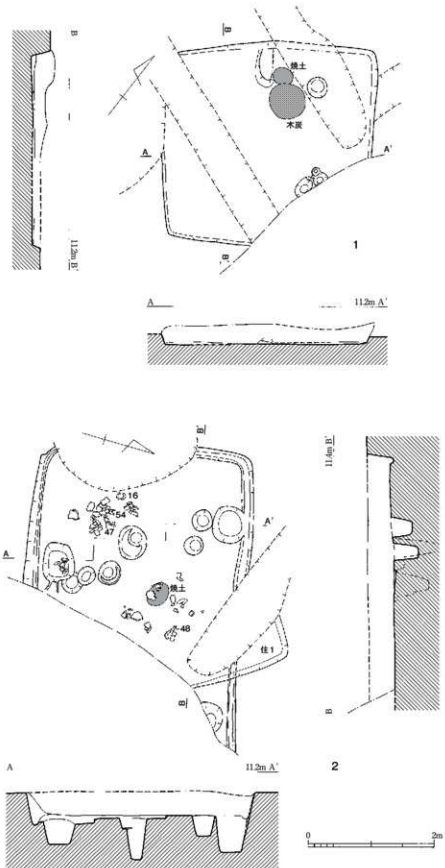
調査区北東に位置し、１号竪穴住居跡に切られる。東側は調査区外に延びるため、全体の大きさ

第44図　Ⅴ－２区遺構配置図（１／300）

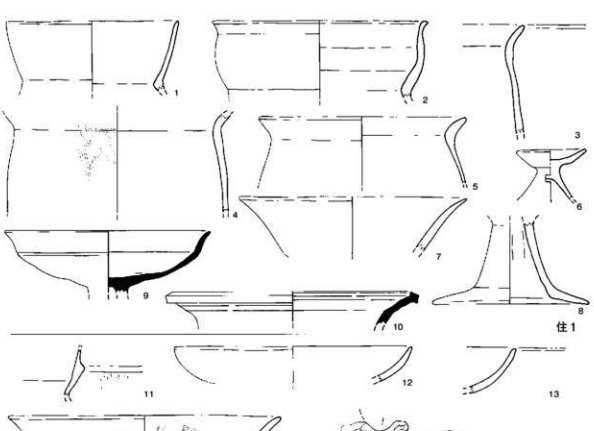
は不明だが、南北350cm、東西は少なくとも480cm以上と東西に長く、大型の部類に入る。埋土は暗褐色粘質土だが、東寄りの床面近くは炭混じりの暗灰色粘質土の軟らかい土が存在し、この部分に多くの土器が入る。床面は東側に向かって下がっており、壁際には壁溝が巡る。また南寄りには方形状の屋内土坑が存在する。主柱穴は判然としないが、中央西寄りの深いピットと、東側調査区外に存在が予想されるピットで対になり、２本柱の構造になると思われる。

出土土器（図版27、第47～49図）

１～３は直口壺の口縁部である。１は内湾して立ち上がり、内外面にハケ調整を行う。屈曲部内面にユビオサエが見られる。２は端部が緩やかに外反し、磨滅しているが内外面にハケ調整が確認



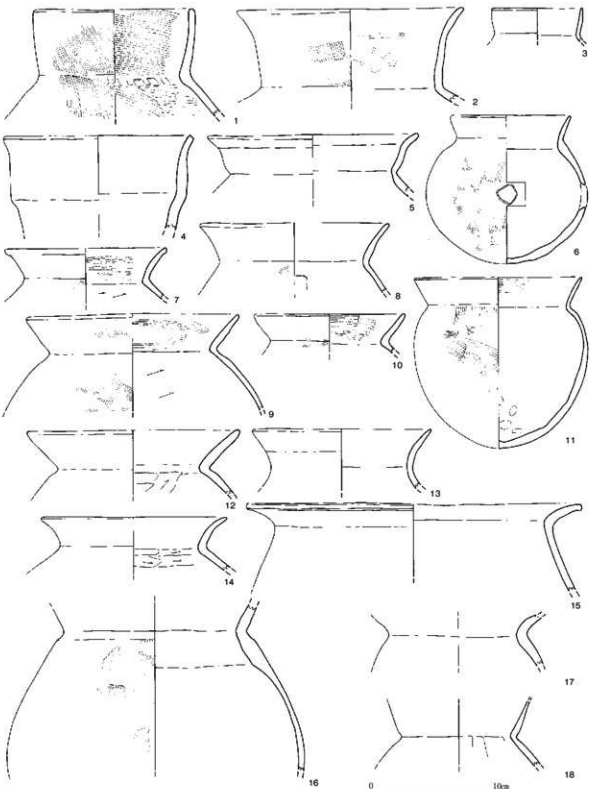
第45図　Ⅴ・２区１・２号竪穴住居跡実測図（１／60）



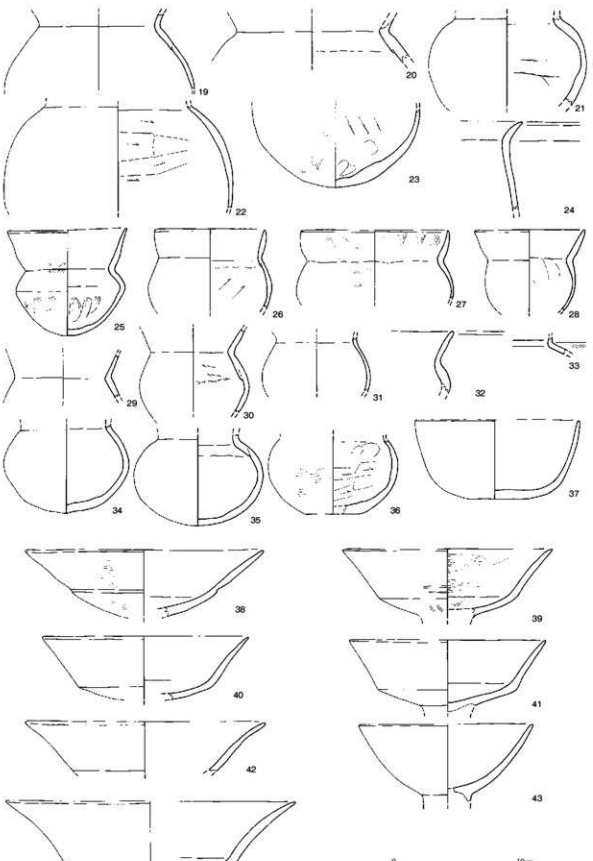
第46図　Ⅴ・2区1・2号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

できる。4は二重口縁壺の口縁部になろうか。屈曲の度合いは緩く、端部はわずかに外反する。磨滅が著しく調整は不明である。

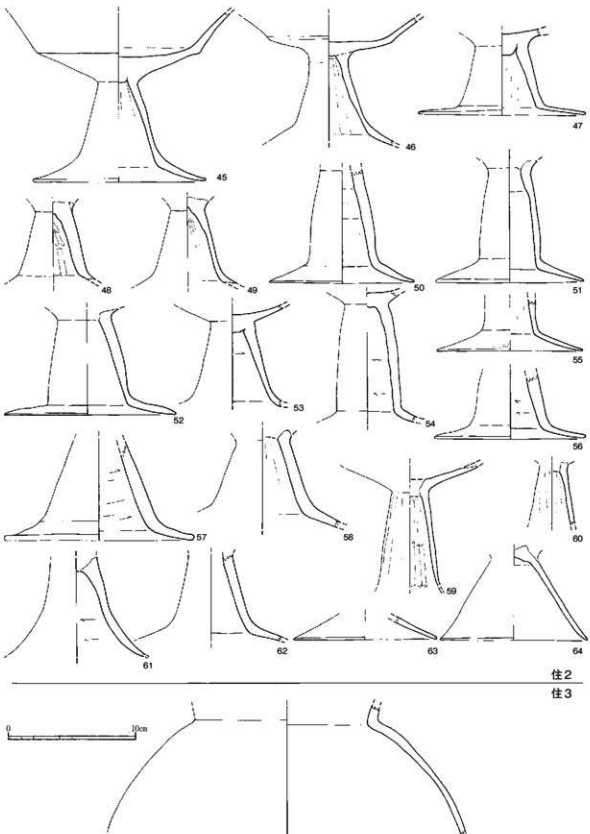
5～20は甕である。5はやや内湾気味に立ち上がるが、端部は外反する。6は口縁部は短く直線的で、底部は丸底を呈する。磨滅しているが外面にハケ調整が見られ、胴部中程で焼成後の打ち欠きが確認できる。7は屈曲部が明瞭で口縁部外面はナデ、内面は横方向のハケ調整を行う。胴部は外面はハケ調整、内面はケズリを施す。8は屈曲部が丸みを帯びる。磨滅しているが、胴部外面はハケ調整が残り、胴部内面は強いオサエを施す。9は口縁部内外面にハケ調整、胴部外面にハケ調整、内面はケズリを施す。10は磨滅しているが、口縁部内面に横方向のハケ調整、屈曲部外面に縦方向のハケ調整が残る。11は胴部外面下半は磨滅しており調整は不明だが、上半外面はハケ調整を行う。胴部内面はナデで底部付近に強いオサエを施す。12は胴部内面にケズリを施し、その他はナデ調整である。13は緩やかに外反するもので、磨滅が著しく調整は不明。14は外反する口縁部で端部を尖り気味に収める。磨滅しているが、胴部内面は軽いケズリを施す。15の口縁端部は若干肥厚する。磨滅が著しく調整は不明。16～20は口縁部が欠損する。16は磨滅が著しいが胴部外面にハケ調整を確認できる。17は屈曲部が丸みを帯びる。磨滅しているが胴部内面はナデである。18は口縁部がやや内湾気味に立ち上がるが、端部が欠損している。磨滅しているが胴部内面はケズリを確認



第47図　Ⅴ－２区２号竪穴住居跡出土土器実測図①（１／３）



第48図　Ⅴ・２区２号竪穴住居跡出土土器実測図②（１／３）



第49図　Ⅴ－２区２号竪穴住居跡出土土器実測図③、３号竪穴住居跡出土土器実測図（１／３）

できる。19・20は磨滅のため調整は不明。20は内面に粘土接合痕が残る。21・22は丸みを帯びる甕の胴部で、磨滅が著しいが21は内面に強いナデ、22は内面にケズリを施す。23は底部で外面にハケ調整がわずかに残り、内面は強いナデ、底部にオサエを施す。24は甕になろうか。全体に磨滅しており調整は不明である。

25～32は小型丸底壺もしくは小型丸底鉢である。25は口縁部が長く延び、底部は丸底である。磨滅しているが、外面にハケ調整、胴部内面下半にオサエを施す。26は磨滅しているが、胴部内面にケズリを施す。内面屈曲部下に粘土接合痕が見られる。27は口縁部が内湾気味に立ち上がり、屈曲部内面に接合痕が見られる。磨滅しているが、外面に縦方向、口縁部内面に横方向のハケ調整を施す。28は全体に磨滅が著しいが、内面にオサエもしくはケズリを確認できる。29・31は磨滅が著しい。30は胴部内面に粘土接合痕が確認でき、ケズリを施す。口縁部及び胴部外面はナデ調整である。32は口縁部は直線的に外傾し、胴部は丸みを帯び器壁も厚い。調整は不明。33は小型精製器種だが器形は不明。胴部外面はハケ調整、内面はナデ調整。34～36は小型丸底壺もしくは小型丸底鉢の胴部で、全体に磨滅が著しい。35は内面に粘土接合痕が確認できる。36は外面がハケ後ミガキ調整、内面はケズリを施す。37は底部から緩やかに立ち上がる鉢で調整は磨滅のため不明。

38～44は高杯杯部である。38は口縁部と杯部の境に段を持つが、内面はなだらかである。外面は磨滅しているが一部ハケ調整が確認できる。39～41は杯部との境で稜を持って屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がる。磨滅が著しいが、39は口縁部内面に横方向のハケ調整、外面はミガキを施す。41は脚部との境に接合痕の擬口縁が確認できる。42は口縁部と杯部の接合部に擬口縁が確認できる。43は屈曲せず内湾気味に立ち上がるもので、脚部との境に接合痕の擬口縁が確認できる。44は39～41と同様の器形だが、口縁部は若干外反する。調整は磨滅のため不明。45・46は口縁部を欠損するが、口縁部と杯部の境で稜を持って屈曲する高杯である。脚裾部は外に屈曲して開き、屈曲部内面は軽い稜を有するが外面はなだらかである。脚部内面上部には絞り痕が見られる。

47～63は高杯脚部である。47は裾部が強く屈曲し外に開く。杯部の充填粘土が確認できる。48は裾部が稜を持って屈曲し、脚部内面に工具痕が残る。49は脚部上部に絞り痕が残る。50～52・54・56は裾部が稜を持って屈曲し直線的に開く。51は脚部が円柱状に延び、本来は杯部の充填粘土があったと思われる。52は杯部との接合部に擬口縁が確認できる。53は裾部の屈曲はやや弱く、杯部との接合部に粘土の充填が確認できる。54は脚部が円柱状に延び、裾部は稜を持って屈曲する。55は円柱状の脚部に裾部が稜を持って屈曲し大きく開く。磨滅しているが外面にハケ調整が確認できる。56は脚部内面以外はミガキを施す。57は裾部の屈曲がやや弱く、外面はミガキを施す。58は屈曲部内面は弱い稜を有するが、外面は緩やかに外反する。脚部内面に工具痕が残り、杯部との接合部に擬口縁が見られる。59・60は杯部の充填粘土が剥がれ落ちている。脚部内面は工具の圧痕が残る。外面は縦方向のナデによりわずかに稜が見られる。61は脚裾端部を欠損する。裾部は緩やかに外反する。62・63も高杯脚部だが磨滅が著しい。64は器台脚部と思われる。脚部は直線的に広がり、端部のみ若干外反する。杯部との境に接合痕の擬口縁が見られる。

若干古墳時代後期の土器が混入するが、出土土器から古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

３号竪穴住居跡（図版19、第50図）

調査区北東隅に位置し、１号溝及び２号竪穴住居跡を切る。北側及び東側は調査区外に延び、南壁の一部を確認したにすぎない。床面が浅く、立ち上がりの壁も数cmを確認するにとどまり、南壁は西側に行くにつれ残りが悪く、つづきが確認できない。埋土は明灰褐色粘質土である。

床面は赤褐色の地山に類似した土を３～５cm程の厚さで敷き詰めており堅く締まっている。おそらく貼床を施していたものと思われる。調査区東壁際に本住居跡に伴う可能性のある深い柱穴があるが、配置等は全体のプランが確認できないため不明である。

出土土器（第49図）

65は口縁部を欠損するが壺と思われる。胴部は球状に張り、口縁部は屈曲して立ち上がる。調整は磨滅のため不明。

切り合い関係から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

４号竪穴住居跡（図版19、第50図）

調査区中央東寄りに位置する。１号溝と切り合い関係にあるが、切り合い部分は後世の攪乱が存在するため確認できない。北西-南東は340～400cm、北東-南西は420cm程の方形プランである。埋土は淡褐色粘質土で、床面近くは地山に似た明褐色粘質土に少量灰褐色粘質土が混じった締まった土が存在する。土層断面の観察から、この上面より壁溝が堀りこまれていることが判明したため、貼床と判断できた。

壁際には壁溝がめぐる。中央やや南寄りには炉跡が確認され、ややくぼんだ焼土面の上に２～３cm程炭が溜まっていた。住居の南東隅付近には壁面に沿って屋内土抗が存在する。また柱穴は中央北寄りに位置し、土層の観察から径20cm程の柱痕と地山に類似した埋め戻し土が確認できた。ただ対になる柱穴は床面を精査しても確認することができず、２本柱の構造になることは間違いないと思われるが、判然としない。

出土土器（図版27、第52図）

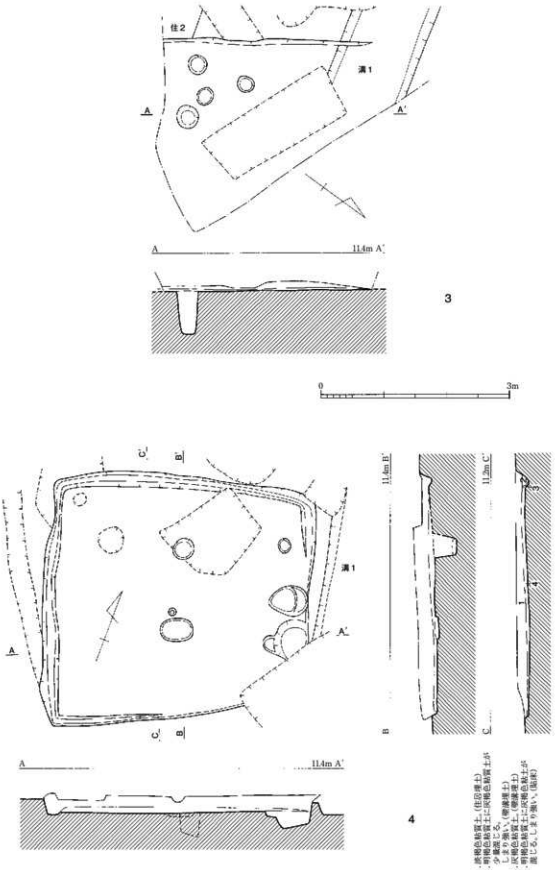
１は高杯で杯部と脚部の境の充填粘土がはずれている。調整は磨滅のため不明。２は細頸の直口壺で、口縁部は直線的に外に開く。底部は小さなくぼみ底で、胴部外面は横方向、口縁部外面は縦方向のミガキを施す。口縁部内面は端部近くが横方向、以下は縦方向のミガキを施す。胴部内面はハケ調整が見られる。

出土土器から弥生時代後期から古墳時代前期頃の竪穴住居跡と考えられる。

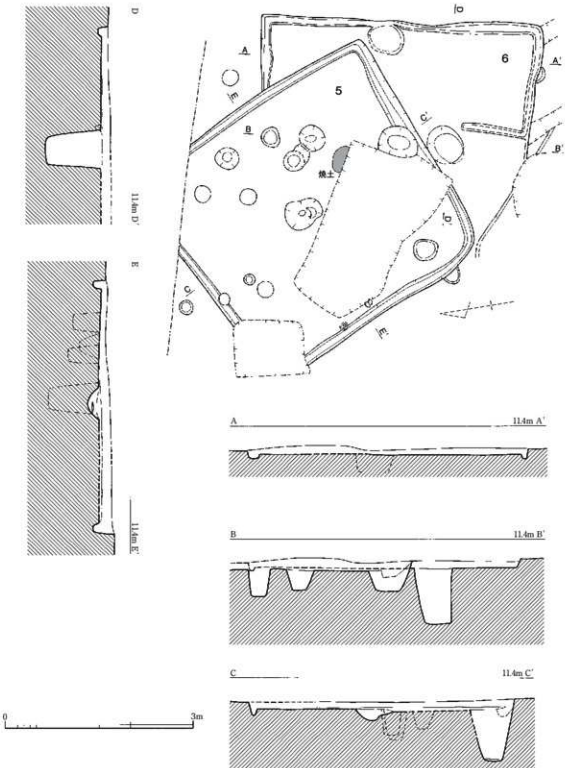
５号竪穴住居跡（図版19、第51図）

調査区北側に位置し、６号竪穴住居跡を切る。北側は調査区外に延びるが、北東-南西は400cm程、北西-南東は420cm程の方形プランである。埋土は暗褐色粘質土である。

壁溝がめぐり、南壁際には屋内土抗が存在する。中央南寄りの位置に焼土が存在し、炉跡と思われる。柱穴と思われるピットは中央東寄りに存在するが、住居のプランに対して南側に少し寄っている点は気になる。その対になると思われる柱穴は攪乱によって確認することができない。おそらく北東-南西に軸を持つ二本柱の構造になると思われる。また中央には深さ約15cm程の浅い擂り鉢状のくぼみが存在する。



第50図　Ⅴ－２区３・４号竪穴住居跡実測図（１／60）



第51図　Ⅴ・2区5・6号竪穴住居跡実測図（1／60）

出土土器（図版27、第52図）

5は甕で口縁部が垂直に立ち上がる。磨滅が著しいが一部ハケ調整を確認できる。6・7は高杯で椀状の杯部を持つ。5は脚部が直線的に外に開き、穿孔を4箇所に施す。磨滅しているが、脚部外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が確認できる。7は口縁部と脚部下半を欠損する。脚部に穿孔が見られ、外面はミガキを施す。8は小型器台で杯部は浅く直線的に開き、脚裾部はやや内湾気味に収める。脚部はおそらく4箇所に穿孔を施し、磨滅しているが杯部内面に板状工具の圧痕が残る。二次被熱を受けて赤変している。9は高杯もしくは小型器台の脚部であろう。脚部に穿孔を施すが、調整は不明である。10は高杯もしくは小型器台の脚裾部であろう。11は器台の裾部で磨滅しているが、内面にハケ調整が確認できる。12は小型丸底鉢で、屈曲部は明瞭な稜を持ち、口縁部は内湾気味に収める。磨滅しているが一部にミガキが見られ、全体を平滑に仕上げている。13～15は椀であろう。13は磨滅しているが丁寧に仕上げられ、14・15はミガキを施す。16は脚付鉢と思われる。外面はオサエが見られ、内面は底部付近がくぼむ。脚部はやや上げ底になる。

3・4は6号竪穴住居跡との切り合い部分からの出土で、どちらに帰属するかは判別できなかった。接合はしないが同一個体で甕の口縁部と底部と思われる。口縁部は緩やかに屈曲し、やや内湾気味に立ち上がる。調整はハケ調整が見られるが、胴部下半はタタキも見られる。

出土土器から古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

6号竪穴住居跡（図版19、第51図）

調査区北側に位置し、北西側の大半を5号竪穴住居跡によって切られ、南西側は7号竪穴住居跡によって切られている。南-北440cm程の方形プランである。

壁溝がめぐり、東壁際には60cm程の楕円形プランの屋内土抗が存在する。壁溝は壁沿に巡ると想定されるが、南壁では中央付近で住居中央に向かう溝が接続する。柱穴は5号竪穴住居跡との切り合い部分と5号竪穴住居跡床面にて確認できた2本が組み合うと思われ、特に南側の柱穴は太く深さもあり、埋土は埋め戻し土が確認できた。

出土土器（第52図）

17・18は甕の底部で丸みを帯びる。磨滅が著しく調整は不明である。

出土土器から弥生時代後期終末から古墳時代前期頃の竪穴住居跡と考えられる。

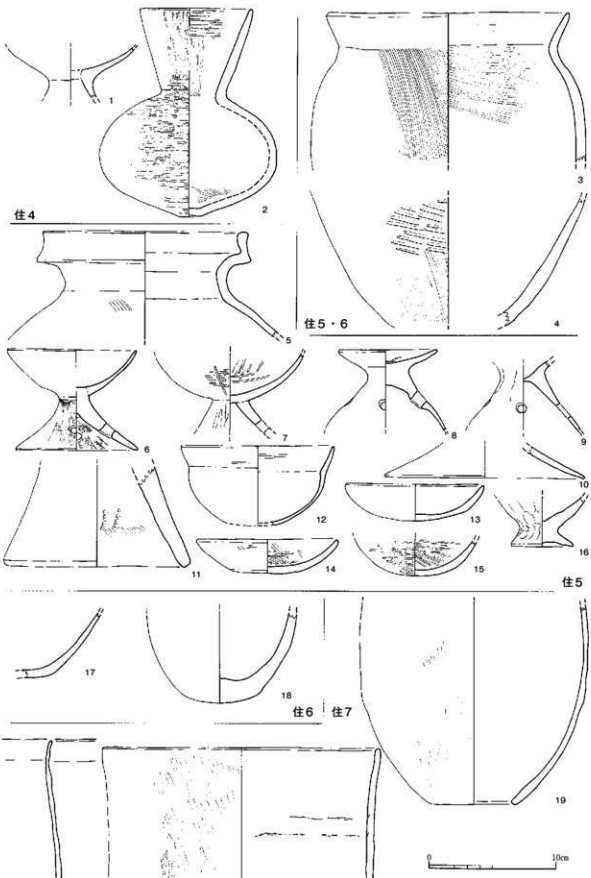
7号竪穴住居跡（図版20、第53・54図）

調査区北寄りに位置し、6号竪穴住居跡を切り、8号竪穴住居跡に切られる。北東-南西は350cm程の方形プランである。埋土は灰褐色粘質土である。

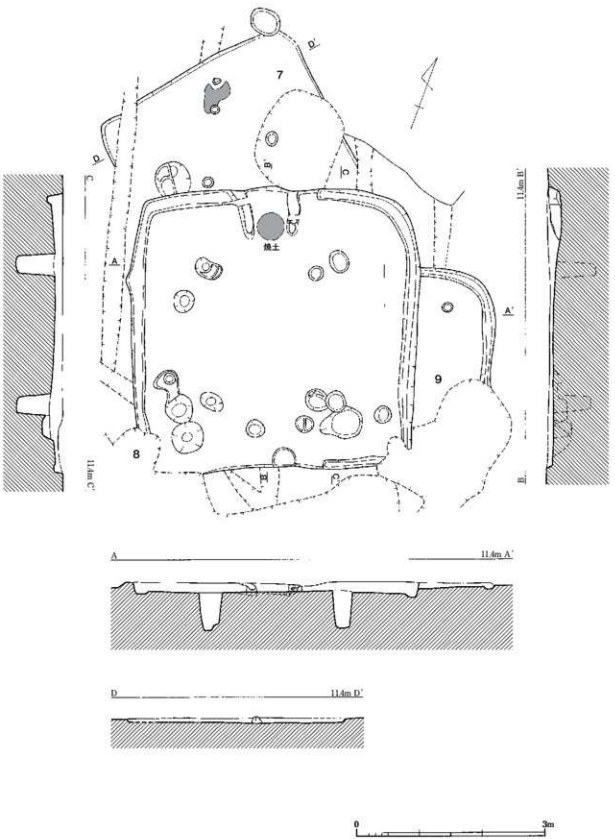
北西壁中央にカマドが存在するが、全体に残りが悪く袖部はほとんど残っていなかった。焚口奥には支柱かと思われる立石が存在するが、一部焼土を切っており、構築当初のものではない。カマドには円形の掘方が認められ、埋土は地山に近似したものであった。

出土土器（第52図）

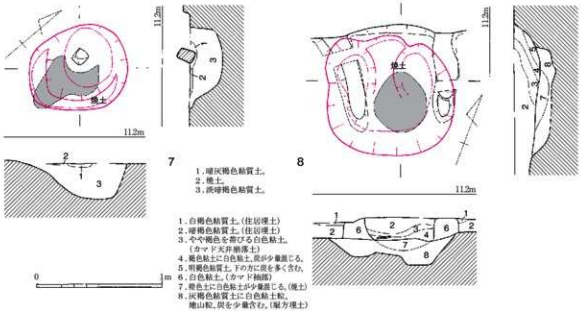
19は甑の底部である。磨滅が著しくハケ調整が一部で確認できるにすぎない。20・21は器形が不明ながら甕の可能性が高いと思われる。20は外面に粗いハケ、内面はナデ調整で、一部粘土の接合痕が確認できる。21は傾きも不明で口縁部が若干外反する。磨滅が著しく調整は不明。



第52図　Ⅴ・2区4～7号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）



第53図　Ⅴ－２区７～９号竪穴住居跡実測図（１／60）



第54図　Ⅴ・2区7・8号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）

出土土器が少なく詳細な時期比定は難しいが、カマドを有する点から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

8号竪穴住居跡（図版20～22、第53・54図）

調査区北寄りに位置し、7号竪穴住居跡、9号竪穴住居跡を切る。450cm程の正方形プランである。埋土は暗褐色粘質土に少量炭が混じる。北壁にカマドがあり、袖部は白色粘土で構築される。

主柱は4本である。床面は高低差があり、南壁際中央部分が高く、北側、東側、西側各壁面に向かって下がる。また部分的にくぼむ部分も存在する。壁際には壁溝が巡る。カマドには掘方が認められ、南側の床面付近は掘りすぎのため正確な形態は不明だが円形を呈し、掘方床面は東西両端に落ちが認められる。

出土土器（図版27、第56図）

1は須恵器杯蓋で、天井部との境に明瞭な段を持ち、口縁端部内側に沈線を施す。天井部は回転ヘラケズリを施す。2は土師器杯で口縁部は椀状に立ち上がり、端部が若干外反する。外面はケズリを施す。

出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

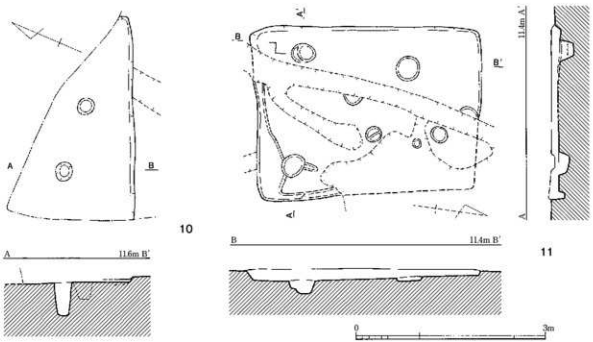
9号竪穴住居跡（図版20、第53図）

調査区北寄りに位置し、8号竪穴住居跡に大部分を壊され北東隅の部分が確認できるにすぎない。床面が浅く、壁はほぼ残存せず、壁溝が巡るのが確認される。埋土は黄灰褐色粘質土である。

図化できる土器は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

10号竪穴住居跡（図版22、第55図）

調査区北西隅に位置する。北側及び西側は調査区外に延び、南壁の一部を確認したにすぎない。南壁は直線的に延びること、及び床面が平坦であることから竪穴住居跡と判断した。埋土は灰褐色粘質土である。床面にピットが存在するが、主柱穴の構成は不明である。



第55図　Ⅴ・２区10・11号竪穴住居跡実測図（１／60）

図化できる土器は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

11号竪穴住居跡（図版22、第55図）

調査区西壁際に位置する。攪乱により北東部を中心に壊されている。南-北360cm程、東-西270cm程の方形プランである。壁溝が巡るが判然とせず、北壁及び西壁では確認できなかった。

主柱穴は当初４本と想定したが判然としない。可能性のあるピットも浅いものであり、位置的には後述する１号掘立柱建物跡の柱掘方と考えるべきである。埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器（図版28、第56図）

３・４は甕である。４は胴部が強く張り出し、短い口縁部が外反しながら開く。磨滅が著しいが外面にハケ調整が確認でき、胴部内面はケズリを施す。３は短い口縁部が直線的に開き、外面はハケ調整、内面は口縁部に横方向のハケ調整、胴部は強いナデを施す。屈曲部付近に粘土の接合痕が見られる。７は須恵器杯蓋で、天井部との境及び口縁端部に明瞭な沈線を施す。天井部は回転ヘラケズリを施す。５は精製の鉢で口縁部は内湾し、端部は尖る。磨滅が著しく調整は不明。６は鉢で口縁部は短く外反する。磨滅が著しく調整は不明である。

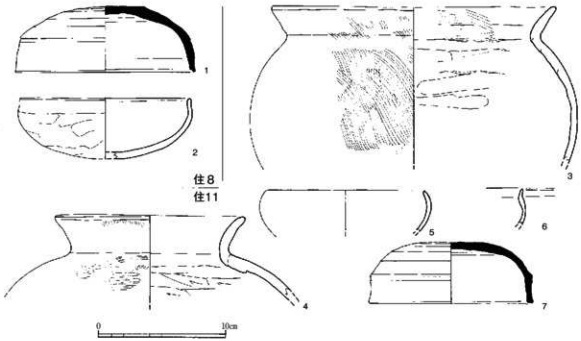
出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

３　柵列・掘立柱建物跡

柵列（図版23、第59図）

調査区北壁際に位置し、５号竪穴住居跡を切る。北側の列は調査区外に延びるが、５間分の総延長900cmの柵が２列に亘って確認できる。軸は東西方向で、柱間寸法は約180cmである。２列間の距離は65cmで平行しており、掘方の径や深さ及び埋土も類似している。２列が組み合って建物を構成していたのかは確証を持てず、一応柵列としておきたい。

掘方からの出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。



第56図　Ⅴ－２区８・11号竪穴住居跡出土土器実測図（１／３）

１号掘立柱建物跡（図版22、第57図）

調査区西壁際に位置する。調査区外に延びるため正確な大きさは不明であるが、恐らく桁行３間梁行２間の南北棟の側柱建物と考えて良いと思われる。柱間寸法はいずれも170cmと揃っている。11号竪穴住居跡と切り合い関係にあるが、検出時に確認することはできておらず、後に11号竪穴住居跡の柱穴の配置を考える際に、掘立柱建物の柱掘方であることに気付いた。柱掘方はいずれも径30～40cm程の円形プランで、埋土は暗褐色土に１cm程の地山ブロック及び炭を少量含み、柱痕はできなかった。いずれも浅いことから相当削られていることが想定できる。

掘方からの出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

２号掘立柱建物跡（図版22、第57図）

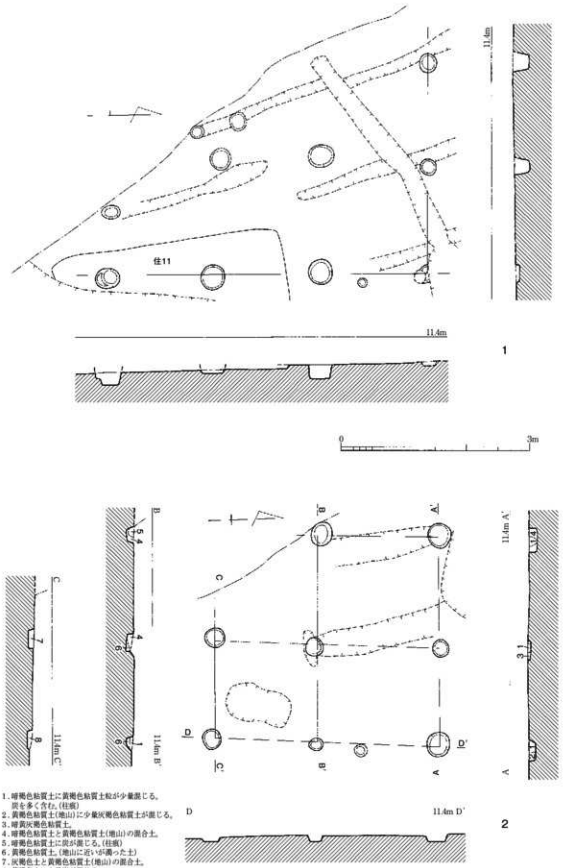
調査区西壁際、１号掘立柱建物跡の北西に位置する。桁行２間梁行２間の総柱建物跡と考えて良いと思われる。柱間寸法は東側の側柱列と中央柱列の間が155cm、中央柱列と西側の側柱列との間が175cm程、また北側の側柱列と中央柱列の間が192cm、中央柱列と南側の側柱列との間が166cmと、柱筋は通るものの列毎に差が見られる。柱掘方はいずれも30～40cm程の円形プランで、埋土は地山の黄褐色粘質土がブロック状に入り、埋め戻し土と思われる。土層断面では柱痕も観察できる。いずれも浅いことから相当削られていると考えられる。

掘方からの出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

4　道路状遺構

１号道路状遺構（図版26、第58図）

調査区南寄りに位置し、２号溝に切られる。北西-南東方向に延び、南東側は調査区外に延びる。北西側も本来はもっと延びていたであろうが、付近はかなり削られているようであり、総延長14m



第57図　Ⅴ・2区1・2号掘立柱建物跡実測図（1／60）

を確認するに留まる。遺構は道路状遺構の北東側を区切る溝と、この溝に直交する形で70～80cm間隔の所謂波板状に連続する浅く短い溝で構成される。波板状の直交する溝の平面形態は両端がややふくらみ、深さも一定せずいびつなものである。南西側はこの溝の延長上にピットが位置するものが多く、一連のものと思われる。南西側を区画する溝は削られているためか確認には至らなかった。波板状の直交する溝の形態から復元するならば、道路状遺構の幅は240～250cm程であったことが想定される。土層の観察から、波板状の直交する溝を切る格好で北西側を区切る溝が掘削されており、波板状の直交する溝は道路状遺構の基礎工の過程で掘削されたものと考えられる。

遺構に直接伴う出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、２号溝に切られているため、中世以前の所産と考えられる。

5　溝

１号溝（図版23～25、第44・59図）

調査区北東部に位置し、L字状に90度に屈曲する。北辺は東側調査区外に延び、西辺は南側調査区外に延びる。それぞれ直線状に延び、断面は逆台形を呈する。幅は120cm程で、埋土は床面近くは地山に類似した明褐色粘質土に少量の暗褐色土が混ざる粘性の強いものである。この土には遺物はほとんど含まれず、溝の肩部分が崩れて堆積したものと思われる。遺物は上層の暗褐色粘質土層から多量に出土し、土器は完形に近いものも多く、溝が埋まりかけてくぼんだ箇所に一気に廃棄した状況がうかがえる。北辺の土層の観察では下層の地山に類似した土が外側に偏って多く堆積している状況がうかがえ、土塁が溝の外側に存在した可能性がある。

出土土器（図版28・29、第60～65図）

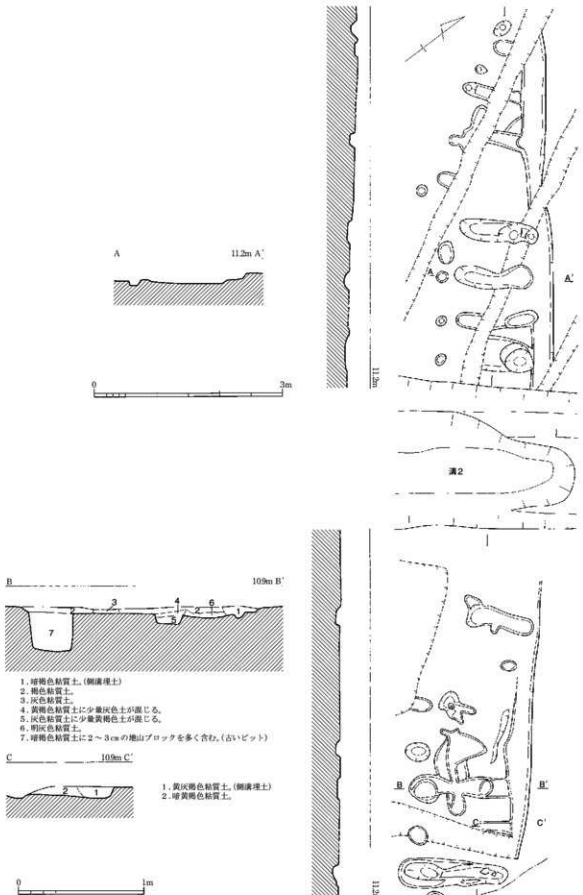
北辺部、西辺部北側ではそれぞれ土器がかなりまとまった状況で出土したことから、それぞれに分けて説明を行う。

北辺部出土土器　１～６は直口壺である。１の底部は小さな平底だが、底面にハケを施すため若干くぼむ。全体的に磨滅しているがハケ調整は残る。底部側面は部分的にミガキを施す。２は磨滅しているが口縁部は外面に縦方向、内面に横方向のハケ調整を行い、最後に横方向のミガキを施す。胴部上半部内面には粘土の接合痕が残る。３は胴部が球状に膨れ丸底を呈する。磨滅が著しいがハケ調整が一部確認できる。４・５は磨滅が著しく調整は不明。６は端部を欠損する。内外面ともに縦方向のミガキを施す。

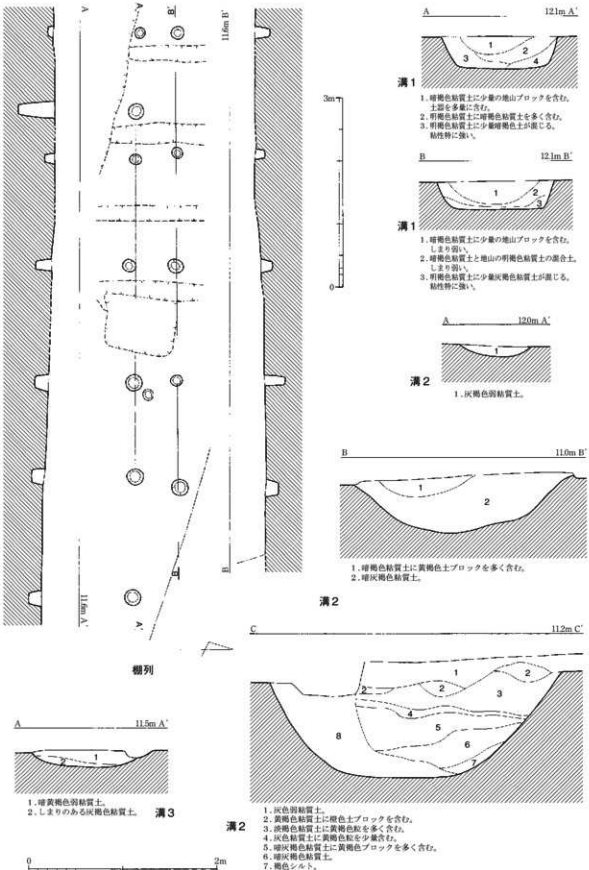
７は二重口縁壺の口縁部で全体に磨滅している。８は二重口縁壺の口縁屈曲部で、外面は鋭く突出する。９は壺の口縁部で外に大きく開く。本来は屈曲部外面に突帯を貼り付けていたと思われるが、剥がれて擬口縁が確認できる。磨滅が著しく調整は不明。

10～12は壺の胴部である。10は丸底で胴部は球状を呈する。磨滅しているが外面にハケ調整、胴部下半内面に工具痕が残る。屈曲部内面には粘土の接合痕及びユビオサエが確認できる。11はやや丸みを帯びた平底で、外面は縦方向の大きい単位のミガキを施す。12の底部は丸みを帯びつつ若干尖り気味で、外面は縦方向のミガキを施す。屈曲部内面付近はユビオサエが顕著にである。

13～20は甕の底部か。13は小さな平底で、外面はハケ調整が顕著に見られる。14は丸底で外面はハケ調整、内面はユビオサエが見られる。15は平底だが、底面中央はくぼむ。磨滅が著しいが外面はハケ調整が確認できる。16は平底で磨滅のため外面調整は不明だが、内面はハケ調整を施す。



第58図　Ⅴ－２区道路状遺構実測図（１／60、土層断面図は１／30）



第59図　Ⅴ・2区棚列跡実測図（1／60）・1～3号溝土層断面図（1／40）

17の底部は尖り気味で、外面はタタキ調整を行う。底部内面にはくぼみが確認できる。18は外面タタキ調整、内面は磨滅のため原体は不明だが、工具によるくぼみ、及び粗いハケ調整を確認できる。19は径の大きな平底で胴部内外面はハケ調整が顕著だが、底面はミガキを施す。20は小型甕の底部で磨滅が著しい。21は甑の底部で、尖り気味の底に径8mm程の孔を焼成前に穿つ。

22～38は甕である。22～29は口縁部が若干外反するもので、23は屈曲部内面に強い稜を持つ。磨滅が著しいが、一部にハケ調整が確認でき、28は外面にタタキ調整を行う。26は頸胴部界にヨコナデの際のスジが沈線のように入る。30は口縁部が内湾しながら立ち上がる。内面はハケ調整を行い、外面も一部にハケ調整が残る。31の口縁端部はやや内湾気味に収めており、胴部外面に列点文を施す。調整は外面にハケ調整、内面は工具によるナデが確認できる。32・33の口縁端部はやや立ち上がる。磨滅が著しく調整は不明だが、32の屈曲部内面にはユビオサエを施す。34は屈曲部内面に明瞭な稜を形成し、口縁部は外反し端部が立ち上がる。庄内甕の特徴を有し、胎土も角閃石と金雲母が特徴的で搬入品の可能性が考えられる。35・36は長胴甕で、36は丸底を呈する。磨滅が著しいが35は一部ハケ調整が確認できる。37も胴部の張り具合から長胴甕と思われ、短い口縁部がやや外反する。38は胴部が大きく張り出すもので、外面と口縁部内面にハケ調整、胴部内面はナデで仕上げる。

39は器高が低く鉢とすべきか。口縁端部はやや内湾気味に収める。磨滅が著しいが内面に軽いケズリの痕跡が確認できる。40は脚台付の鉢になろうか。脚部内外面はミガキを施し、胴部内面の底には工具の圧痕が残る。

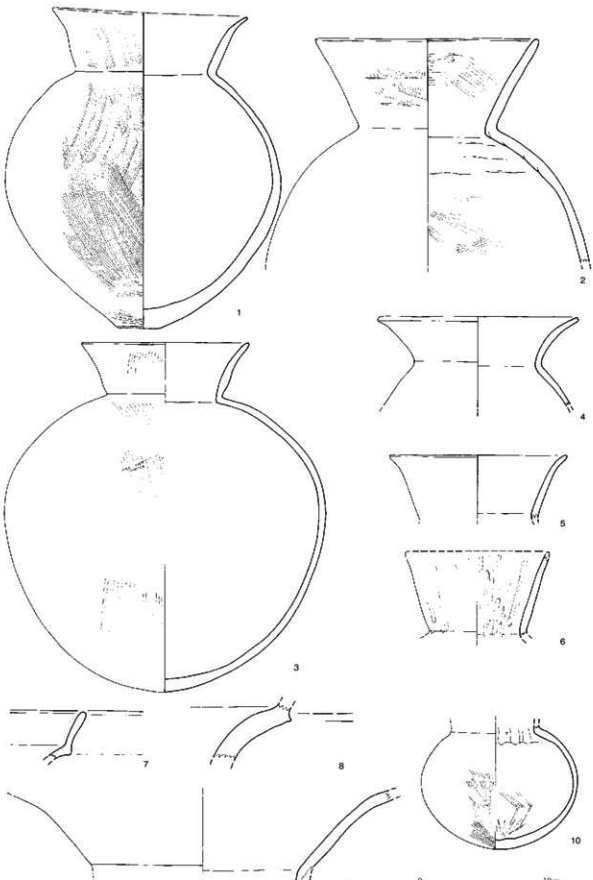
41～44は高杯脚部である。42は中実の脚部に内湾気味の裾部が取り付き、透かし孔を穿つ。43は緩やかに外反する脚部に上下3連の透かし孔を穿つ。内面には絞り痕が確認できる。44は脚部内面頂部がくぼみ、外面は工具痕が残る。

45は小型器台で、端部はわずかに立ち上がる。脚部の上方に透かし孔を穿ち、内外面にハケ調整が確認できる。46は器台で、外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ及び横方向の粗いハケ調整が確認できる。47は手づくね土器でユビオサエを多く施す。48は緩やかに丸みを帯びつつ立ち上がるもので高杯か鉢と思われる。胎土が極めて精良だが磨滅のため調整は不明である。49は器形が不明だが、口縁部が内湾しながら立ち上がり、下端に接合部の擬口縁が確認できることから、二重口縁壺の可能性もあると思われる。口縁部中央に工具によるスジが横走するが、この部分に突帯等が張り付いていた可能性も捨てきれない。このスジの上下には竹管文の刺突を多数施す。

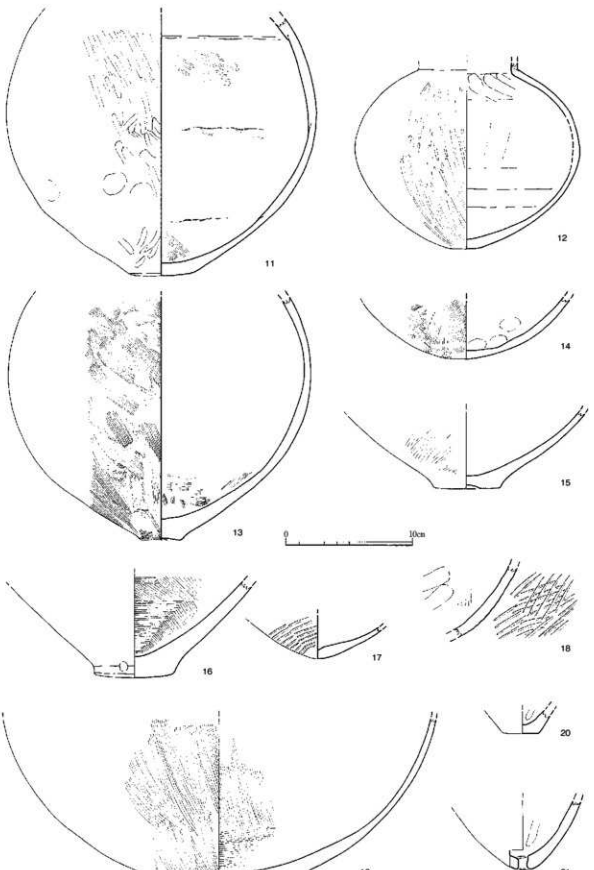
西辺部北側出土土器 1～5は二重口縁壺である。1は口縁屈曲部外面が突出する。磨滅が著しいが外面に一部ハケ調整が、内面にユビオサエが確認できる。2は口縁端部付近にかけて器壁が厚い。3は器壁が厚く、屈曲部外面は稜を持つが内面は丸みを帯びる。4も器壁が厚く、屈曲部には接合痕が確認できる。調整はミガキである。5は口縁端部を欠損し、屈曲部は外面に突出する。

6～11は甕である。6は口縁部は直線的に開き、底部は丸底を呈する。磨滅が著しいがハケ調整を確認できる。7は接合はできないものの頸胴部と底部は同一個体と思われる。丸底を呈し、外面はハケ調整を行う。8は口縁部がやや外反しながら開く。9は口縁端部内側に肥厚を持つ。11は丸底で、外面ハケ調整を行う。

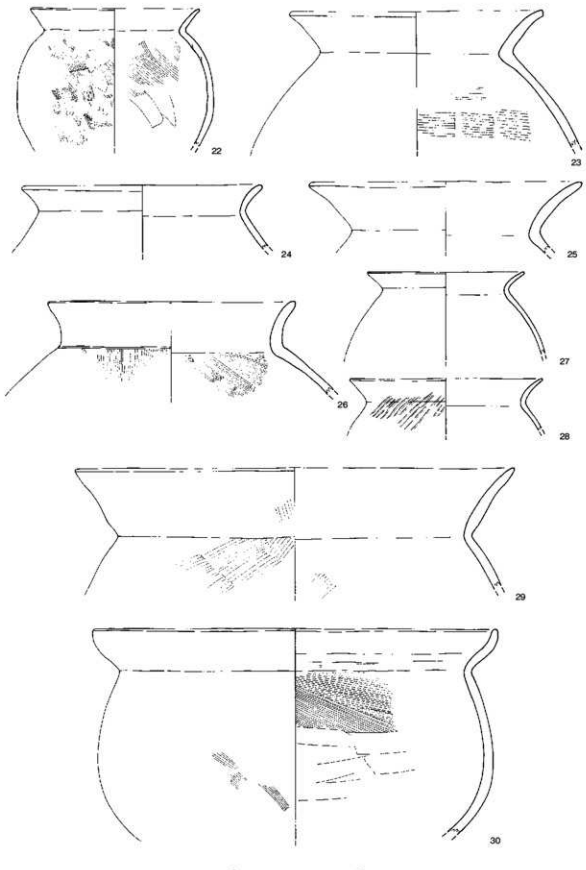
12・13は高杯である。12は脚部との接合部に擬口縁が確認できる。13の杯部は段等が無く、口縁端部のみわずかに外反する。脚部頂部の杯部内面には5mm程の小さなくぼみが見られる。磨滅



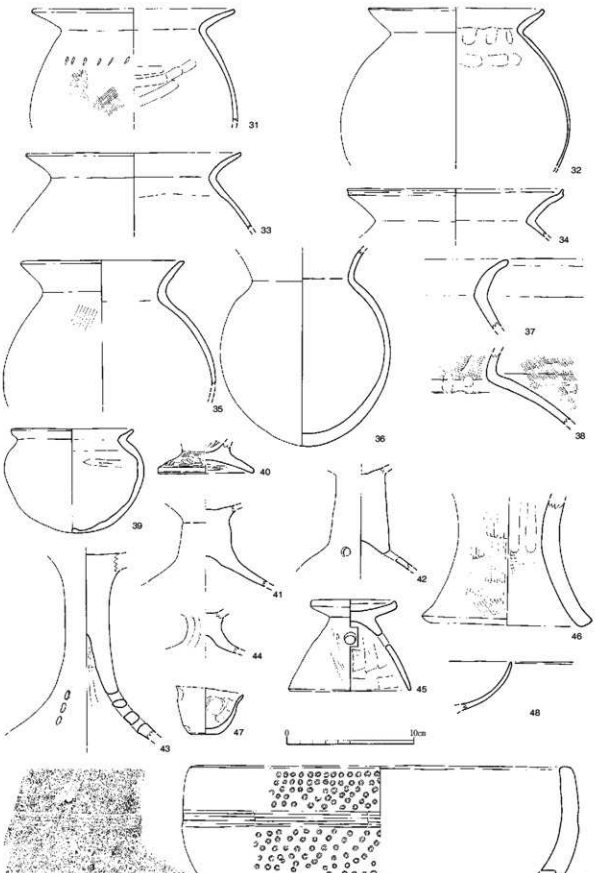
第60図　Ⅴ－２区１号溝北辺出土土器実測図①（１／３）



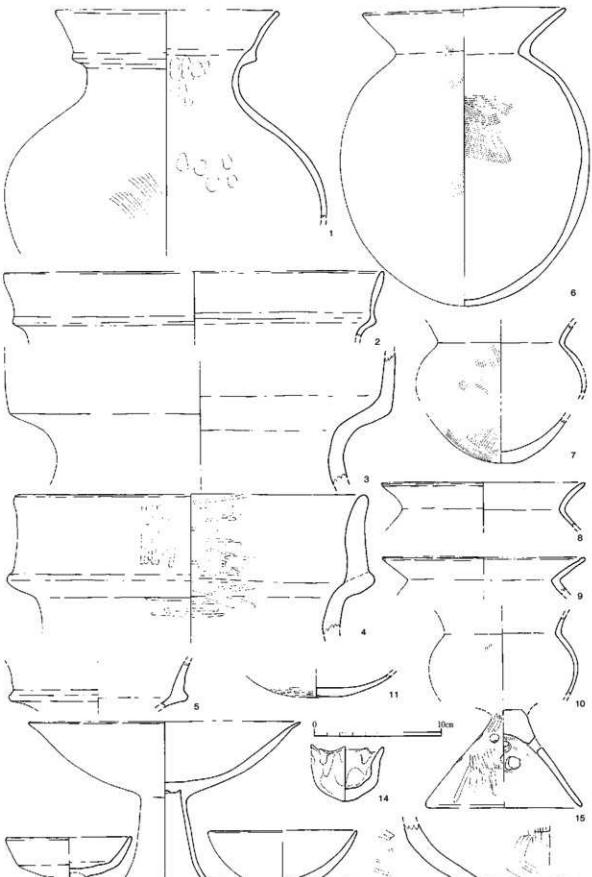
第61図　Ⅴ－２区１号溝北辺出土土器実測図②（１／３）



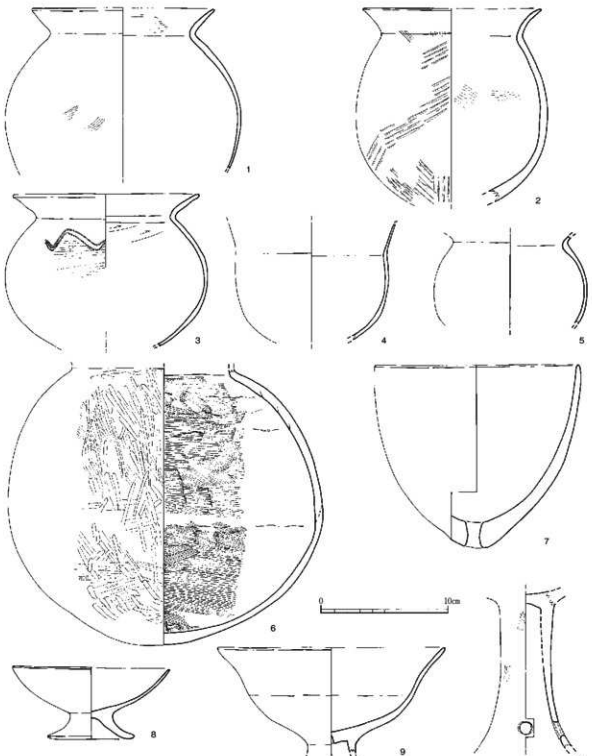
第62図　Ⅴ－２区１号溝北辺出土土器実測図③（１／３）



第63図　Ⅴ－２区１号溝北辺出土土器実測図④（１／３）



第64図　Ⅴ・２区１号溝西辺出土土器実測図（１／３）



第65図　Ⅴ－２区１号溝出土土器実測図（１／３）

が著しく調整は不明。14は手づくね土器で口縁部はいびつでユビオサエが顕著である。

15は器台脚部で、上方に４箇所透かし孔を穿つが、それぞれすぐ下に穿孔を埋めた痕跡が見られる。穿孔をやり直したと考えられ興味深い。磨滅しているが外面は縦方向のミガキ、内面はハケ調整を行う。杯部との接合部に擬口縁が確認できる。16は椀で磨滅のため調整は不明。17は器台の裾部で内外面にハケ調整が確認できる。

その他１号溝出土土器　以下は１号溝のその他箇所で、さほどまとまりを持たず出土したものである。１～５は甕である。２の外面はタタキ調整を行うが、頸部屈曲部はハケ調整の痕跡が残り、本来はその後にハケ調整を行っていたと思われる。内面は基本的にナデだが一部ハケ調整を確認できる。３は胴部上半部に板状工具による波状文を施す。４は器壁が非常に薄く、磨滅が著しい。５も磨滅が著しく調整は不明である。６は壺の胴部から底部で、外面はタタキを行った後にハケ調整を行い、最後はミガキで仕上げる。内面は横方向のハケ調整で、一部粘土接合痕が確認できる。７は甑で径１cm程の孔を焼成前に穿つ。外面は磨滅しており調整は不明だが、内面はナデ調整を行う。８は脚付鉢で、浅い椀状の体部にハ字状にやや外反しながら開く脚部が取り付く。全面ナデ調整により仕上げる。９は高杯で口縁部はわずかに外反する。10は高杯脚部で長い脚柱部に大きく外反しながら開く裾部がつづくと思われ、裾部にかけての部分に透かし孔を穿つ。磨滅が著しいが一部ハケ調整の痕跡を確認できる。

出土土器から古墳時代前期の溝と考えられる。北辺では壺は直口壺が多数を占めるのに対し、西辺では壺は二重口縁壺が多数を占める傾向がうかがえ興味深い。

２号溝（図版25、第44・59図）

調査区東側に位置し、１号溝を切る。北東-南西方向に直線的に延び、北東側、南西側は調査区外に延びる。南西にいくにつれ幅が広く、深さも増し、４号竪穴住居跡付近より南西側は底面がかなりの傾斜をもっている。北東側の浅い箇所は断面台形状を呈し、埋土は灰褐色弱粘質土である。調査区東壁際付近では２号溝よりも古い落ち込みが存在したと思われ、掘削中はその埋土との峻別がうまくいかず全体を掘削する格好となってしまった。また南西側の深い箇所の上層は黄褐色ブロックを多く含み埋め戻し土と思われるが、下層は暗灰褐色粘質土や褐色シルトの自然堆積の状況を呈する。

図化できる遺物に恵まれないが、陶器片が出土しており、中世以降の溝と思われる。

３号溝（図版26、第44・59図）

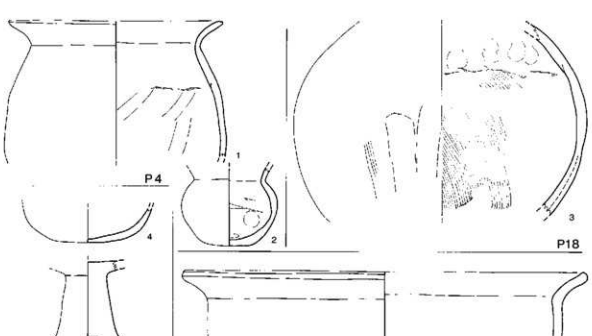
調査区北西に位置し、北東-南西方向に直線的に延び、調査区外につづく。幅は110cm程で断面はU字状を呈し、埋土は上層は暗黄褐弱粘質土、下層はしまりのある灰褐色粘質土である。

図化できる遺物が少ないが、須恵器片が出土しており、V-１区より続く古代の溝であろう。

６　その他出土遺物

ピット・遺構面出土土器（図版30、第66図）

１・２はP４出土のものである。１は甕で磨滅が著しい。内面に一部ケズリの痕跡が見られる。２は底部にやや面を持った小型丸底壺で、内面は軽いケズリとユビオサエを施す。３はP18出土の



第66図　Ⅴ・2区ピット・遺構面出土土器実測図（1／3）

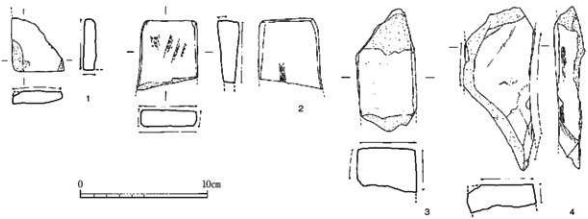
壺の胴部で、外面は縦方向のケズリの後ミガキで仕上げる。内面はハケ調整で、上半部はユビオサエが顕著に見られる。底部に近い箇所の断面で接合痕が長く延びるのが確認できる。4・5はP19出土のものである。4は甕の底部と思われるが、磨滅が著しい。5は高杯脚部で、中実の脚柱部に直線的に開く裾部が取り付き、透かし孔を穿つ。6は遺構面出土の甕で、口縁端部は上方に跳ね上げ気味に仕上げる。磨滅が著しく調整は不明である。

石製品（図版30、第67図）

Ⅴ-2区からは少量ながら石製品も出土している。ここでは一括して報告する。1～4は砥石である。1は1号竪穴住居跡出土で、欠損しているが砥面は最低2面確認できる。わずかだが使用の際の細かいスジが確認できる。2は2号竪穴住居跡出土で、欠損しているが砥面は4面確認でき、上端部も一部砥面が見られる。表裏両面とも使用の際の細かいスジが確認できる。3は2号溝出土で、欠損し磨滅も激しいが砥面は最低3面確認できる。4は2号竪穴住居跡の屋内土坑出土で、欠損部が多いものの砥面は5面確認できる。面によって使用頻度に差があり、図の右側側面は特によく使用しており、大きく湾曲するとともに非常に平滑になっている。全体に形がいびつなのは元々砥石として使用していたが、割れた後も破断面を砥面として使用したためと思われ、図の右下は破断面にスジが何条も確認できることから、面は粗いが砥面と考えらえる。

7　小結

本調査区においては、弥生時代後期終末から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡や溝、古墳時代後期のカマドを有する竪穴住居跡、それと古代の溝や道路状遺構、中世の溝と、大きく分けると4つの時期の遺構・遺物が確認できた。



第67図　Ｖ－２区出土石製品実測図（１／３）

第３表　Ｖ－２区出土石製品・土製品観察表

番号	種類	出土位置	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
1	砥石	１号竪穴住居跡	砂岩	(4.2)	(4.1)	(0.9)	23.1	緻密な石材
2	砥石	２号竪穴住居跡	砂岩	(5.4)	4.8	1.8	65.9	緻密な石材
3	砥石	２号溝	砂岩	(9.7)	4.7	(3.3)	186.4	
4	砥石	２号竪穴住居跡屋内土坑	砂岩	(12.8)	5.7	(2.3)	164.2	磨滅が激しい

竪穴住居跡は調査区北側に偏っており、切り合い関係を有するものが多い。特に５号・６号竪穴住居跡は古墳時代前期頃、７号・８号は古墳時代後期頃と、時期的に近似するもの同士が切り合っている。床面には貼床を施すものが多く、壁溝を巡らす。古墳時代前期のものは２本柱、後期のものは４本柱の構造となるものが多い。後期のカマドには浅い掘方を伴い、地山に近似した土で埋め戻しているものが見られる。

古墳時代前期の遺構としては、方形区画溝の１号溝が特筆される。調査区東側で一部を確認したにすぎないが、整然とL字状に屈曲する状況が見てとれる。溝で区画された内部には、時期の近いものとして２号竪穴住居跡が存在するが、主軸方向は異なることから同時期とは認めにくい。溝からは多量の土器が廃棄されており、時期幅も少ないことから、短期間でその機能を終えたことが推察される。

古代の遺構としては奈良時代の３号溝がV-１区から続く溝として注目される他、詳細な時期は不明ながらも道路状遺構の存在が特筆される。道路状遺構は傾斜の方向に沿って検出されたが、残念ながら残り具合は悪く、下部構造の一部を確認するに留まる。復元幅では240～250cm程と規模は小さいものの波板状の溝や側溝を伴い、V-１区の掘立柱建物群との関係も示唆される。

また時期は不明なものの掘立柱建物跡と柵列はほぼ東西方向に軸を揃えており、関係性をうかがい知ることができる。

遺物では１号溝から出土した第63図34の庄内甕が注目される。胎土に角閃石を含んでおり、搬入品の可能性が高い。

V-3区の遺構と遺物

1　調査の概要

V-3区はV-2区の南西側に現道を挟んで隣接し、面積は約650㎡である。標高はV-2区より若干高く、調査区中央付近で約11.25mあり、東側へ向かってわずかに傾斜する。調査前は住宅があり、標高が高い分大きく削られていると考えられ、極めて浅い竪穴住居跡が存在するのもそのためと思われる。遺構密度は高くないが、これも造成の際に削られた結果と考えられ、本来の遺構密度を示しているわけではない。

遺構は表土直下の黄褐色粘質土の地山面上に確認でき、遺構の識別は容易であった。遺構は弥生時代後期終末から中世にかけ、竪穴住居跡が9棟、掘立柱建物跡が2棟、溝が5条確認された。

2　竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版33、第69図）

調査区西壁際に位置し、1号掘立柱建物跡の柱掘方を切る。480cm程の正方形プランで、北壁にカマドを持つ。カマドは焼土ブロックを多く含んだ崩落土を除去すると、灰色粘質土の袖部が確認できたが、左袖の一部と右袖の大部分についてはうまく検出することができなかった。燃焼部は径35cm程の焼土の広がりが確認できたが、支脚等は確認できなかった。カマドの掘方は径120cm程で浅くくぼみ、地山の黄褐色粘質土を主体に暗褐色粘質土が混ざった土で埋め戻している。

床面では壁際に壁溝を部分的に確認できた。主柱穴は4本だが、北東のものは1号掘立柱建物跡の柱掘方と切りあっており、またその他も複数の切り合い関係が認められるが、検出当初はそれに気づかず掘削してしまった。住居の埋土は暗褐色粘質土である。

出土土器（第70図）

1は須恵器杯身で、底部は回転ヘラケズリを行う。

出土土器から古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

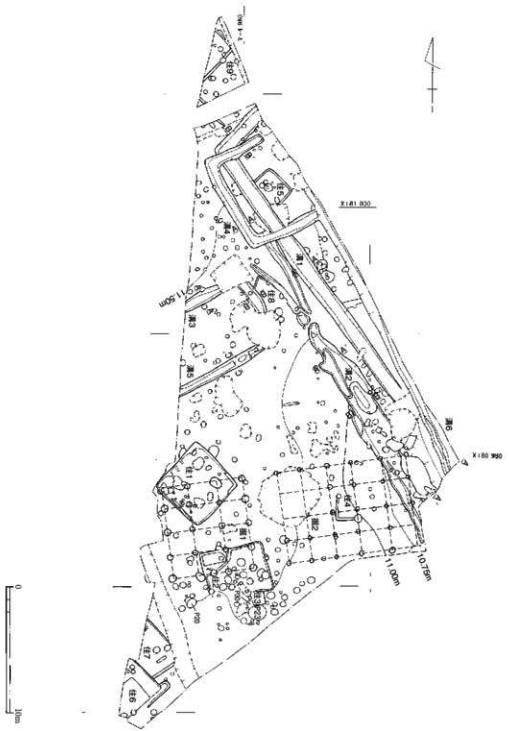
2号竪穴住居跡（図版33、第71図）

調査区南西に位置し、3号竪穴住居跡を切り、1号掘立柱建物跡の柱掘方に切られる。東-西500cm程、南-北390cm程の長方形だが、全体的に浅くしか残っておらず、特に南西部分についてはかなり削られており、うまく検出できなかった。

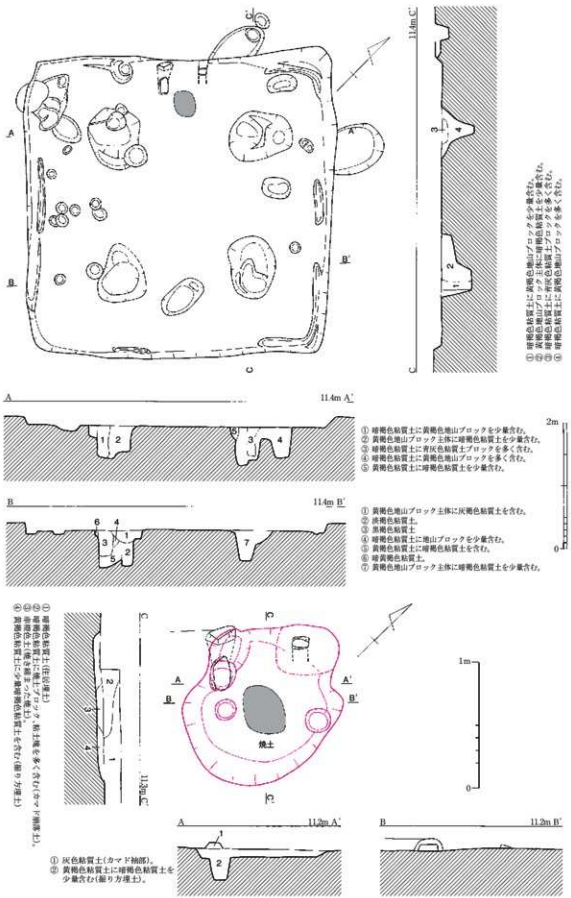
北西部分の床面が周囲より一段高く、この部分を避けるような格好で、壁溝が存在するが、床面の高い北西部の隅部分にも別途壁溝は存在する。床面の高い部分は幅80cm、長さ160cm程の広さを持つが、ベッド状遺構とするには小さく不整形である。床面では中央やや東寄りに炉跡が存在するが、主柱穴は判然としない。

出土土器（第70図）

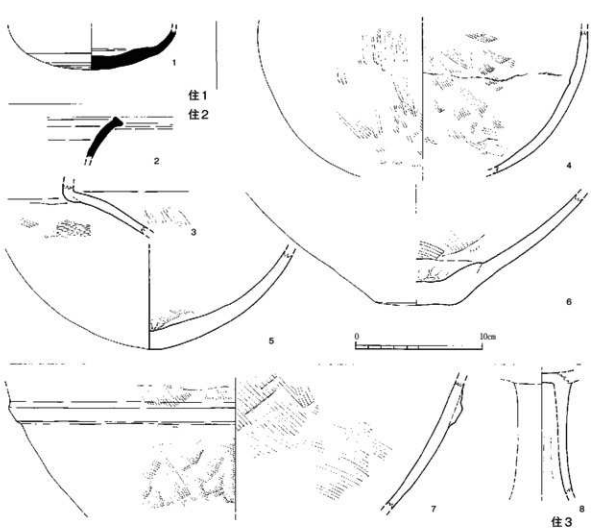
2は須恵器甕の口縁部で、端部は上下に拡張させる。3は壺の胴部上半部で、外面に縦方向のミガキ、内面は横方向のハケ調整を行う。屈曲部内面に粘土接合痕が確認できる。4は壺の胴部下半部で、外面はハケ調整の後大きな単位の縦方向のミガキ、内面はハケ調整を行う。5・6は甕の底部と思われる。5は尖り気味の丸底で、磨滅が著しいが内面にハケ調整、底面中央に工具痕が確認



第68図　Ⅴ・３区遺構配置図（１／300）



第69図　Ⅴ－３区１号竪穴住居跡実測図（１／60、カマドは１／30）



第70図　Ⅴ・３区１～３号竪穴住居跡出土土器実測図（１／３）

できる。６は平底で内面はハケ調整、底面はユビオサエを多数施す。

２は混入と思われ、その他の出土土器から弥生時代後期終末から古墳時代前期頃の竪穴住居跡と考えられる。

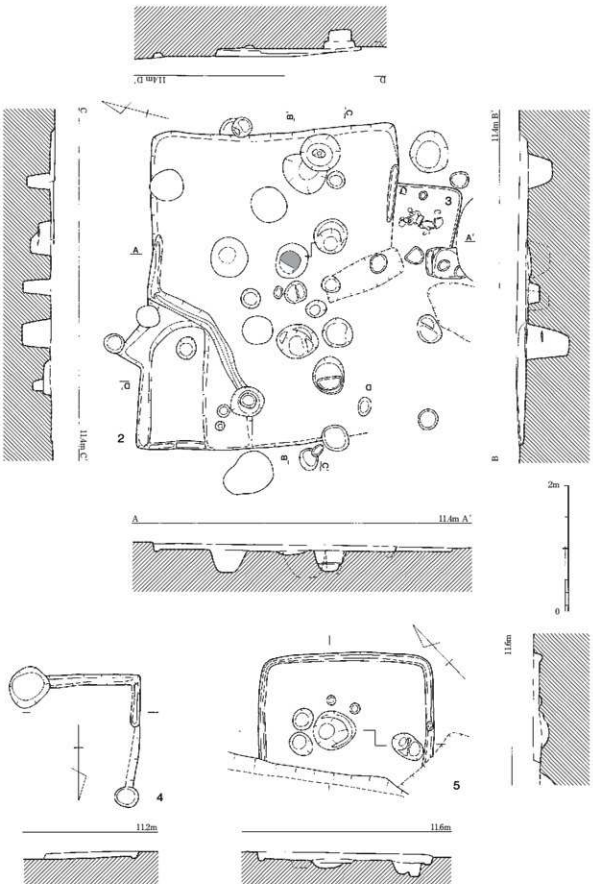
３号竪穴住居跡（図版33、第71図）

調査区南西に位置し、２号竪穴住居跡に切られる。南東隅部分のみを確認するにとどまり、残存する壁の高さもわずかである。床面の高さは２号竪穴住居跡とほぼ同じで、主柱穴は、配置から二段掘りの東西２本のピット（C－C′間）が組み合うと考えられる。

出土土器（第70図）

７は甕の胴部下半部で、断面台形状の突帯を１条巡らす。内外面ともハケ調整を行うが、内面の目は粗いものである。８は高杯脚部で、磨滅が著しく調整は不明である。

出土土器は少ないが、切り合い関係から２号竪穴住居よりも古い弥生時代後期終末から古墳時代前期頃の竪穴住居跡と考えられる。



第71図　Ⅴ－３区２～５号竪穴住居跡実測図（１／60）

４号竪穴住居跡（図版34、第71図）

調査区南寄りに位置する。残りが非常に悪く、南西隅の一部のみを確認するにとどまる。壁溝を持つが南側については掘りすぎてしまった。埋土は暗灰褐色粘質土に少量炭を含む。

直接伴う遺物はなく詳細な時期は不明である。

５号竪穴住居跡（図版34、第71図）

調査区北寄りに位置し、西側は１号溝に切られる。北西-南東は280cmの方形プランで、他の竪穴住居よりも小さい。床面が少し堆積した窪地に土器をまとめて廃棄しており、土器は完形に復元できるものも多い。

床面では中央付近に炉跡が見られるが、主柱穴は判然としない。壁際には壁溝が巡る。南側壁際では20cmほどの掘り込みが見られ屋内土坑の可能性もある。

出土土器（第72・73図）

１～４は直口壺である。１は口縁部が直線的に外傾し、外面はハケ調整の後にミガキのような丁寧なナデを施す。内面もナデ調整で仕上げる。２は磨滅が著しく調整は不明である。胴部内面に粘土の接合痕が確認できる。３は口縁部が欠損しているが、直線的に上方向に立ち上がる。磨滅が著しいため調整は不明。４は口縁部のみだが、復元径より一応壺と判断した。

５は二重口縁壺で、口縁屈曲部は緩いが外面に突出し稜もしっかりしている。磨滅が著しく調整は不明。６は口縁部が垂直に取り付く壺で、屈曲部外面は丸みを帯びながらも稜を持つ。口縁部外面はナデによってくぼむ。磨滅しているが、ミガキの痕跡が確認できる。７・８は口縁部が欠損しているが、胴部が球状を呈し壺と判断できる。７は磨滅しているがわずかにミガキが確認できる。８は底部外面が二次被熱のため赤変している。器面は磨滅しているがハケ調整が確認でき、頸部の屈曲部内面にユビオサエを施す。

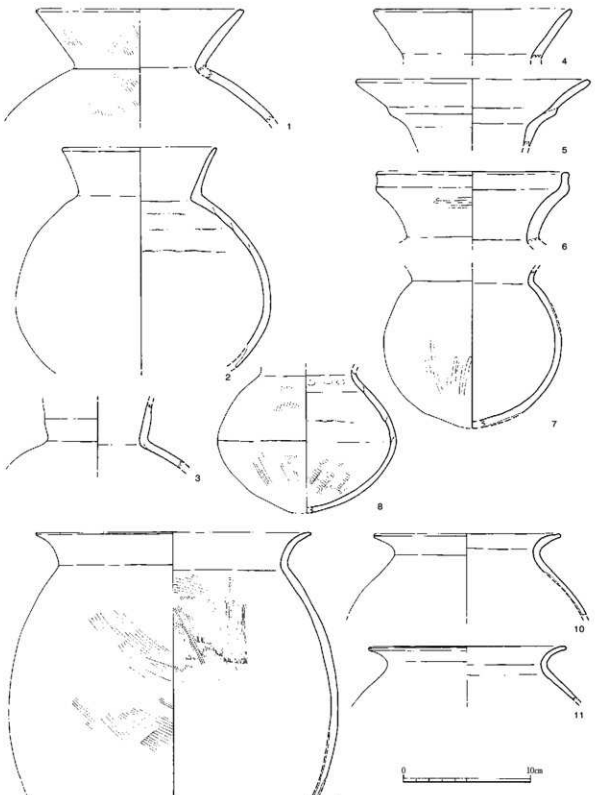
９～12は甕である。いずれも口縁部が全体に外反しながら開く。磨滅しているが、９・12の胴部は内外面ハケ調整を行う。12は接合しないが、胴部下半部も同一個体の可能性が高い。13は尖り気味の甕の底部で、底部内面は工具痕が残る。磨滅しているがハケ調整を行ったと思われる。14は小さな平底を呈する甕底部で、外面はタタキが確認できる。

15は甑である。平底の底部中央に８mm程の孔を穿つ。外面は底部付近に粘土の接合痕が確認できる。磨滅しているが、内面はハケ調整が確認できる。16は高杯で、口縁部は長く全体的に外反しながら開く。磨滅が著しく調整は不明。17は高杯脚部で、杯部との接合部は軸芯に細い孔を穿つ。裾部は直線的に開き、透かし孔を穿つ。磨滅しているが一部ハケ調整を確認できる。18は小型器台である。杯部は浅く脚部は長く延びる。胎土は極めて精良だが、磨滅が著しく調整は不明。19は高杯の杯部と思われ、脚部との接合部の擬口縁が確認できる。20は高杯脚裾部で透かし孔を持つ。

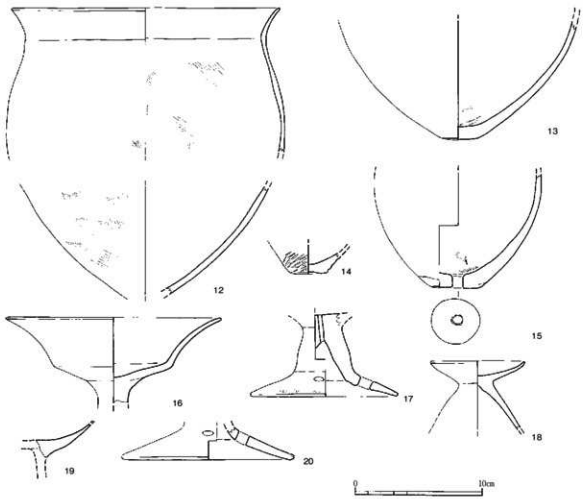
出土土器から古墳時代前期初頭頃の竪穴住居跡と考えられる。

６号竪穴住居跡（図版34・35、第74図）

調査区南西隅に位置し、７号竪穴住居跡を切る。平面形態は方形で、西側の多くは調査区外に延びる。北東側及び北西側にはベッド状遺構を持ち、床面から15cm程の段差を有する。住居の南東側には新しい落ち込みが存在するため南東隅のプランがうまく検出できなかったが、本来南東側に



第72図　Ⅴ－３区５号竪穴住居跡出土土器実測図①（１／３）



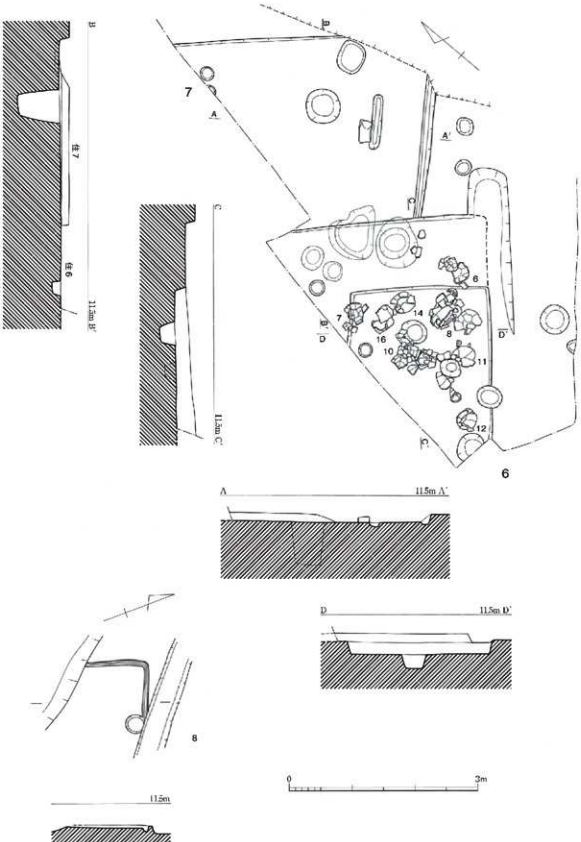
第73図　Ⅴ－３区５号竪穴住居跡出土土器実測図②（１／３）

はベッド状遺構は存在しなかったと思われる。少し堆積した段階で多量の土器を廃棄しており、完形に復元できるものも多い。主柱穴は２本と想定され、ベッド状遺構に囲まれた中央付近にあるピットの一つが該当すると思われる。

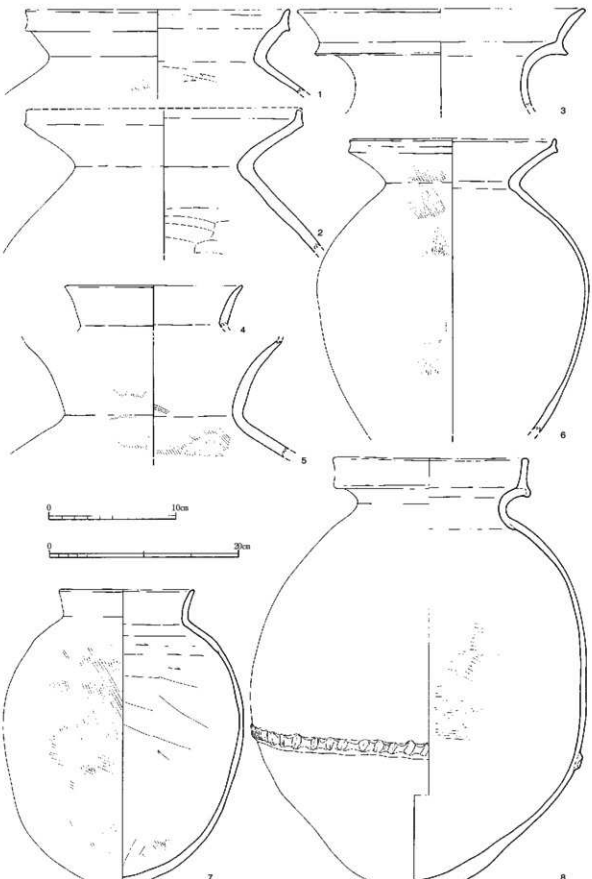
出土土器（図版41、第75～77図）

１・２・６は外傾する頸部に口縁部が垂直に立ち上がる壺である。１は口縁部が立ち上がる箇所の外側が鋭く突出し、口縁部は全体にナデによってくぼむ。磨滅しているが丹塗を施している可能性が高い。胴部外面はハケ調整、内面はケズリを行っているのが確認できる。２は口縁部外側に薄く粘土をかぶせて仕上げる。磨滅しているが、胴部内面は大きな単位のヨコナデにより凹凸が生じている。６も口縁部外面は強いナデによってくぼむ。磨滅しているが外面にハケ調整が確認できる。３は二重口縁壺で、屈曲部は外側に大きく突出する。

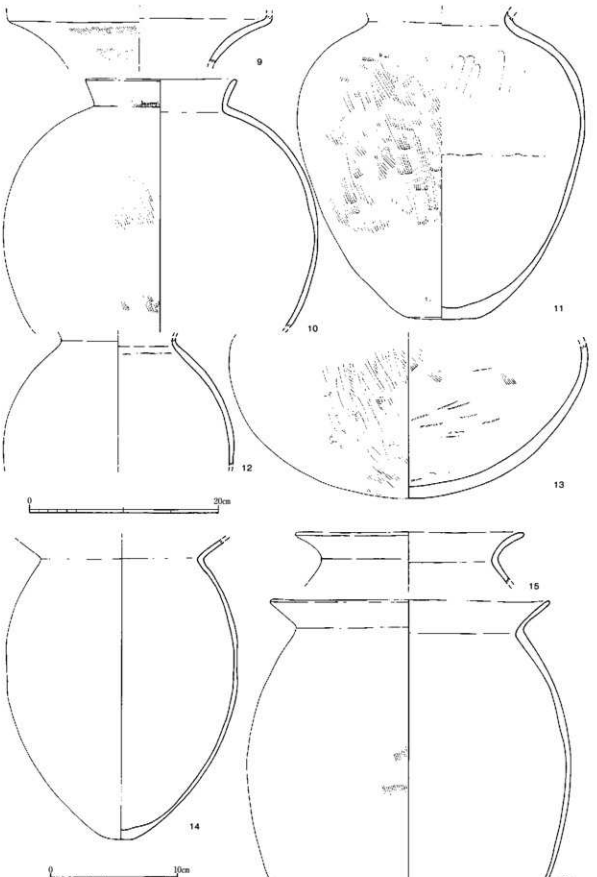
４・５・７は直口壺である。４の口縁部は若干外反し尖り気味に仕上げる。５は口縁部が全体的に若干外反しながら開く。磨滅しているがハケ調整が確認でき、胴部外面は最後にミガキを施す。７は長胴の胴部に短い口縁部が外傾して取り付く。底部は丸く、胴部外面は粗いハケ調整、内面は軽いケズリを施す。８は口縁部が垂直に立ち上がる壺である。底部は丸底で胴部下半に断面台形の突帯を貼り付け刻目を施す。磨滅が著しいが、胴部内面に粗いハケ調整を行う。９は長く外反する



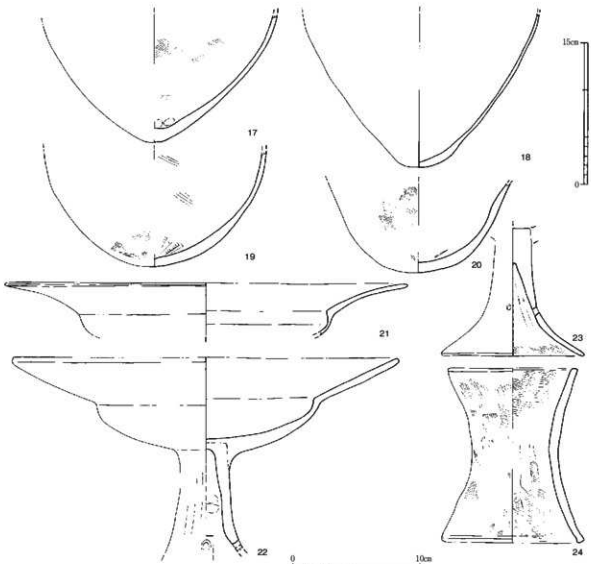
第74図　Ⅴ－３区６～８号竪穴住居跡実測図（１／60）



第75図　Ⅴ－3区6号竪穴住居跡出土土器実測図①（1～5は1／3、6～8は1／4）



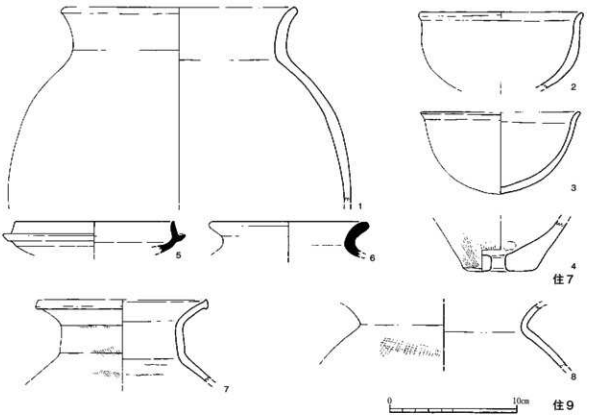
第76図　Ⅴ・3区6号竪穴住居跡出土土器実測図②（9～12・14は1／4、13・15・16は1／3）



第77図　Ⅴ・３区６号竪穴住居跡出土土器実測図③（17・18は１／４、他は１／３）

頸部に垂直に立ち上がる口縁部が取り付くと思われ、一応壺としておきたい。10は７と同様に短い口縁部が外傾して取り付き、外面はハケ調整の後ミガキを施す。11・12は壺の胴部と思われる。11は肩の張った長胴の壺で、平底だが胴部との境界は明瞭ではない。外面はハケ調整、内面はナデが確認できる。12は磨滅が著しく調整は不明。胴部上半部に粘土の接合痕が確認できる。13は壺の底部で、ハケ調整の後に単位の大きなミガキを施す。内面はハケ調整及び板状工具の圧痕が確認できる。

14～16は甕でいずれも磨滅が著しい。14は口縁部が欠損するが、直線的に外傾する。底部は尖り気味となる。15は口縁部が全体的に外反しながら開く。16は直線的に外傾する口縁部を持ち、一部ハケ調整が確認できる。17～19は甕の底部である。17・18は尖り底を呈し、17は磨滅しているが胴部内面にハケ調整、底部にユビオサエが確認できる。19は丸底で内面の中央はややくぼむ。磨滅が著しいが内外面ハケ調整が確認できる。20は残存部分の端がやや外反気味となり、鉢になる可能性がある。磨滅しているが外面にハケ調整、内面底部に板状工具の圧痕が確認できる。



第78図　Ⅴ・3区7・9号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

21・22は高杯である。21は丸みを持った杯部に若干外反しながら延びる口縁部が取り付くもので、屈曲部は内面に強い稜を形成する。磨滅が著しく調整は不明。22も21と同様の器形だが、口縁部は直線的に開く。脚部は開く箇所で欠損するが、この箇所に透かし孔を穿つ。また脚部との接合部に擬口縁が確認できる。磨滅のため調整は不明瞭だが、脚部外面に縦方向のミガキ、内面はオサエが確認できる。23は高杯脚部で杯部との接合部に22と同様の擬口縁を確認できる。透かし孔は3箇所に穿ち、内面は工具によるナデ、裾部はハケ調整を行う。24は器台で、外面は縦方向のハケ調整、内面は口縁部付近は横方向のハケ調整で、筒部内面はナデにより仕上げる。

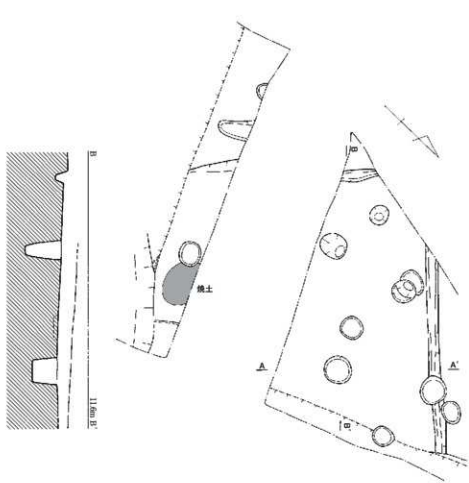
出土土器から弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭頃の竪穴住居跡と考えられる。

7号竪穴住居跡（図版35、第74図）

調査区南西隅に位置し、6号竪穴住居跡に切られる。平面形態は方形で、北西側は調査区外に延びる。南壁では壁溝が確認できる。この壁溝より北側80cmの位置に平行に走る小さな溝が一部確認でき、これに接して平らな石が床面直上に確認できたが、住居の構造上どのようなものになるかは不明である。主柱穴は判然としない。平らな石の北側に深いピットが存在するが、この位置だと4本柱の構造を考えざるをえず、時期的に整合性が取れない。

出土土器（第78図）

1は甕とすべきか。口縁部が短くやや外反しながら立ち上がる。磨滅が著しく調整は不明。2・3は口縁端部がわずかに外反する丸底の鉢で、磨滅が著しい。4は平底の甑で外面はハケ調整を行う。5は須恵器杯身で口縁部は短く立ち上がる。6は須恵器甕で口縁部は短く肥厚する。



第79図　Ⅴ・3区9号竪穴住居跡実測図（1／60）

6号竪穴住居跡との切り合い関係から5・6は混入と考えられ、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の竪穴住居跡と考えられる。

8号竪穴住居跡（図版35、第74図）

調査区中央に位置し、2号溝及び3・5号溝に切られる。残りが悪く、北側の隅部を確認したにすぎない。壁溝を巡らすが、他に住居を構成する柱跡等は判然としない。

遺構に直接伴う遺物はなく詳細な時期は不明である。

9号竪穴住居跡（図版35、第79図）

調査区北隅に位置する。現代のブロック塀の関係で帯状に残った未調査区の両側にまたがる格好で確認できた。平面形態は方形と思われ、東側は調査区外に延び、南側は1号溝によって切られる。北壁沿い及び西壁の一部に壁溝が確認できるが、主柱穴は判然としない。一部床面で径60cm

程の焼土の広がりが確認できたが、炉跡と考えるには位置が南西に寄りすぎている。

出土土器（第78図）

7は広口壺である。頸部は垂直に立ち上がり、直線的に開く口縁部が取り付く。口縁端部は上下に拡張する。磨滅しているが外面はハケ調整が確認できる。8は甕で口縁部を欠損する。胴部外面はハケ調整を行う。

出土土器から弥生時代後期終末から古墳時代前期頃の竪穴住居跡と考えられる。

3　掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版36・37、第80図）

調査区南西に位置し、2号竪穴住居跡を切り、1号竪穴住居跡に切られる。桁行4間梁行3間の総柱建物で、規模は柱間の心々距離で梁行650cm、桁行720cmである。柱間寸法は梁行方向が200cm～250cm、桁行方向が160cm～195cmであり、中央付近の柱間寸法が広い。柱掘方の径は40～50cm程で、P4、P13、P14、P16は掘方底面に赤く変色した径15cm程の柱痕跡が確認でき、また多くの柱掘方の土層断面で柱痕が確認できる。柱掘方は一部、P6、P11で1号竪穴住居跡の柱穴と切り合っており、特にP6は当初切り合いに気づかずに掘削してしまった。柱掘方の多くは柱痕と、人為的な埋め戻し土である地山ブロックを含む黒褐色土で構成されており、P15では柱抜き取り痕と思われる土層が確認できる。

柱掘方からは図化できる遺物は出土していないが、切り合い関係及び2号掘立柱建物跡との関係から、1号竪穴住居跡よりも古い古墳時代後期頃のものと思われる。

2号掘立柱建物跡（図版37・38、第68・81図）

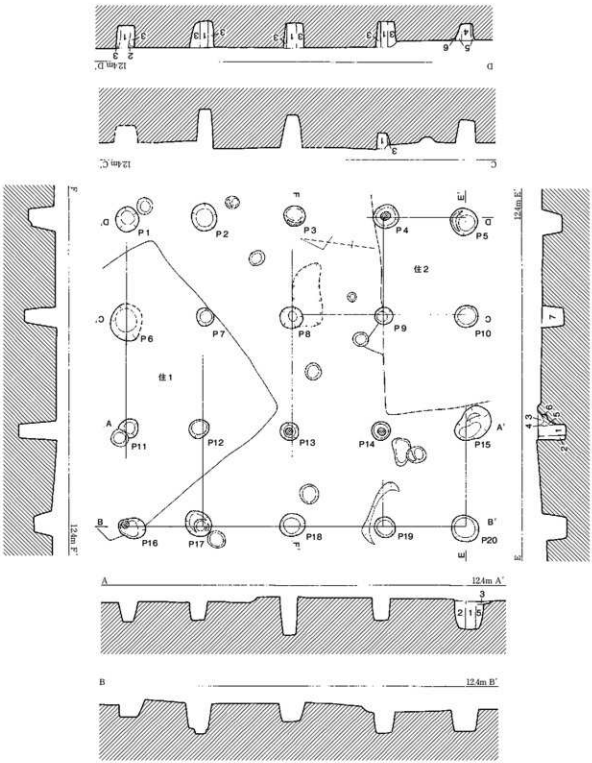
調査区南東に位置し、2号溝に切られる。攪乱及び2号溝によって柱掘方が確認できない箇所があるが、桁行5間梁行4間の総柱建物に復元できる。規模は柱間の心々距離で梁行730cm、桁行1045cmと大型である。柱間寸法は梁行方向が175cm～200cm、桁行方向が190cm～250cmで、中央付近の柱間寸法が広い。1号掘立柱建物跡の各柱と柱筋が通り、柱間寸法もほぼ同じであるため一連の建物と想定できるが、柱掘方の径は30cm程と1号掘立柱建物跡より一回り小さい。また埋土は暗褐色土で、大きな地山ブロックを含むものは少なく、柱痕を確認できるものもP10を除いて見られない。掘方の底面でもP19で赤く変色した径15cm程の柱痕跡が確認できるのみで、構造は1号掘立柱建物跡よりも簡易なものと思われる。

柱掘方からは図化はできないが、須恵器の小破片が出土していること、また1号掘立柱建物跡との関係から、古墳時代後期頃のものと思われる。

4　溝

1号溝（図版38・39、第68・82図）

調査区東寄りに位置し、5号竪穴住居跡を切り、4号溝に切られる。L字状に90度に屈曲し、北辺は東側調査区外に延びる。位置からV-2区の3号溝から続くもので、直線的な方形区画溝になると思われる。断面は逆台形を呈し、幅は140cm程で、埋土は壁面近くは地山粒を多く含んだ土で、上層は黄灰褐色細砂シルトである。

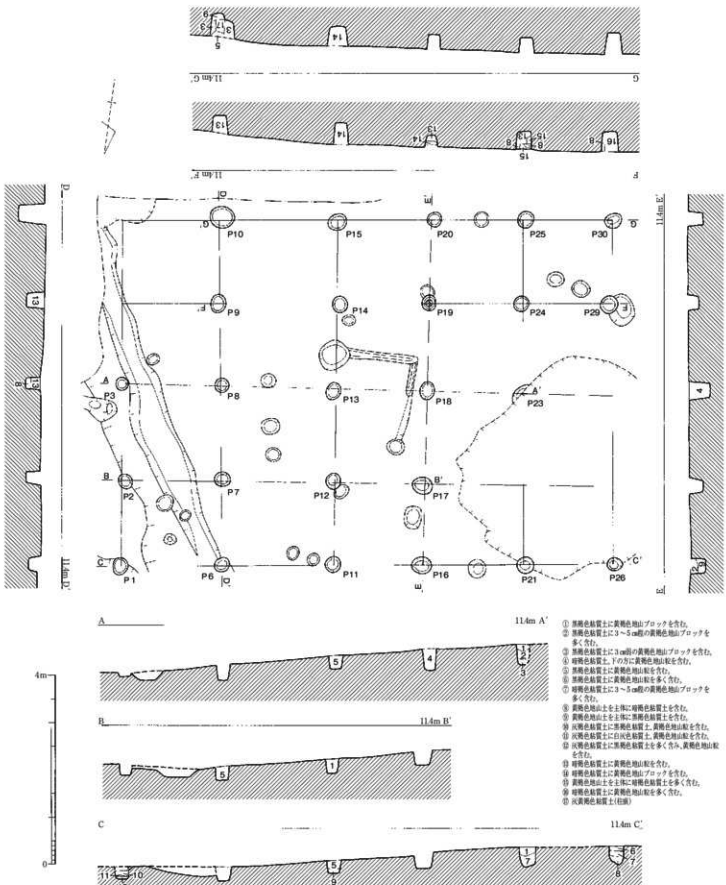


A-A'、E-E' 間土層
① 黒褐色粘質土に1cm程の黄褐色地山ブロックを含む(柱痕内埋土)。
② 暗褐色粘質土に3～5cm程の黄褐色地山ブロックを多く含む(版方埋土)。
③ 灰褐色粘質土に黄褐色粘質土と暗褐色粘質土を含む(柱抜き取り痕)。
④ 暗褐色粘質土に2～3cm程の黄褐色地山部跡を含む(柱抜き取り痕)。
⑤ 黄褐色粘質土に暗褐色粘質土を少量含む(版方埋土)。
⑥ 黄褐色粘質土に暗褐色粘質土を多く含む(版方埋土)。
⑦ 黒褐色粘質土に1～3cm程の黄褐色地山ブロックを含む。

C-C'、D-D' 間土層
① 黒褐色粘質土に1cm前の細かい黄褐色地山粒を少量含む(柱痕内埋土)。
② 暗褐色粘質土に1cm前の細かい黄褐色地山粒を少量含む。
③ 黄褐色地山土を主体に暗褐色粘質土を少量含む(版方埋土)。
④ 黒褐色粘質土に1～2cm程の黄褐色地山ブロックを含む(柱痕内埋土)。
⑤ 暗褐色粘質土に1～2cm程の黄褐色地山ブロックを含む(版方埋土)。
⑥ 灰褐色粘質土に1cm程の細かい黄褐色地山ブロックを少量含む。

0 4m

第80図　Ⅴ－3区1号掘立柱建物跡実測図（1／80）



第81図　Ⅴ－３区２号掘立柱建物跡実測図（１／80）

出土土器（図版42、第83図）

1～5は須恵器である。1は甕で短い口縁部が垂直に取り付く。内面にオサエの同心円文が見られる。外面は緑がかった自然釉が厚くかかり、器面の詳細はよく分からないが、格子タタキを施すようである。2は高杯の脚部～杯部にかけてである。3は甕の口縁部で、やや内湾気味に収める。口頸部界は上側に1条沈線を施し突出させる。4は甕の口縁部。端部は肥厚させ、頂部はナデによってくぼませる。口縁部下に1条の突帯を巡らす。5は壺で口縁部は欠損している。胴部外面は平行タタキ、内面は同心円文が見られるが、いずれも上半部はナデにより消されている。

6は平瓦で凹面に布目が見られ、凸面はナデによって仕上げる。7は手づくね土器である。8は甕で磨滅している。9・10は甑の把手。9は一部ハケ調整が確認できるが、ほとんどはナデにより仕上げる。

出土土器から奈良時代の溝跡と考えられる。

2号溝（図版40、第68・82図）

調査区東寄りに位置し、1号溝とほぼ平行に走る。北側は途切れたり二手に分かれたりしており、延長は判然としない。全体的に浅く底面はいびつで凹凸が激しい。幅は残りの良い部分で200cm程である。

出土土器（第83図）

11は須恵器の底部で外面はタタキ痕をナデ消している。内面はユビオサエが見られ、一部爪の圧痕らしきものも確認できる。

出土土器から奈良時代の溝跡と考えられる。

3・5号溝（図版40、第68・82図）

調査区西寄りに位置し、西側は調査区外に延びる。当初別々の溝と認識して調査を行っていたが、埋土が類似していることから、一連の方形区画溝と判断した。屈曲部は攪乱のため確認できないが、おそらく直角に屈曲すると思われる。断面は浅いU字状を呈するが、一部南辺で深くなる箇所があり、その部分は逆台形を呈する。埋土はシルトを基調に、上層は淡黄褐色土主体のしまりのない土である。

図化できる遺物に恵まれないが、須恵器小片が出土しており、時期は古代に収まると思われる。

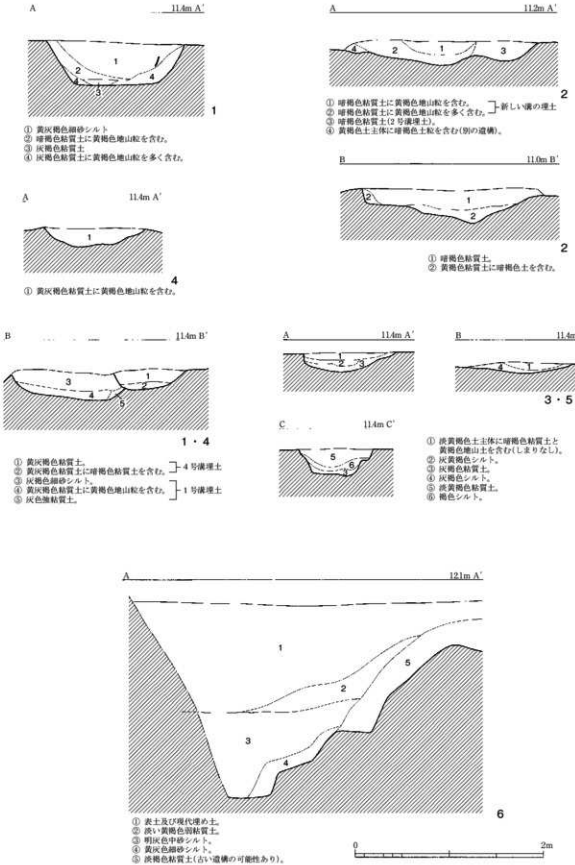
4号溝（図版39、第68・82図）

調査区北寄りに位置し、1号溝を切る。南辺の東側は6号溝に切られるが、北辺の東側は途切れており、全体ではコ字状を呈すると思われる。断面はU字状を呈し、幅は70cm～100cm程である。埋土は3・5号溝とは異なり粘質土が主体である。

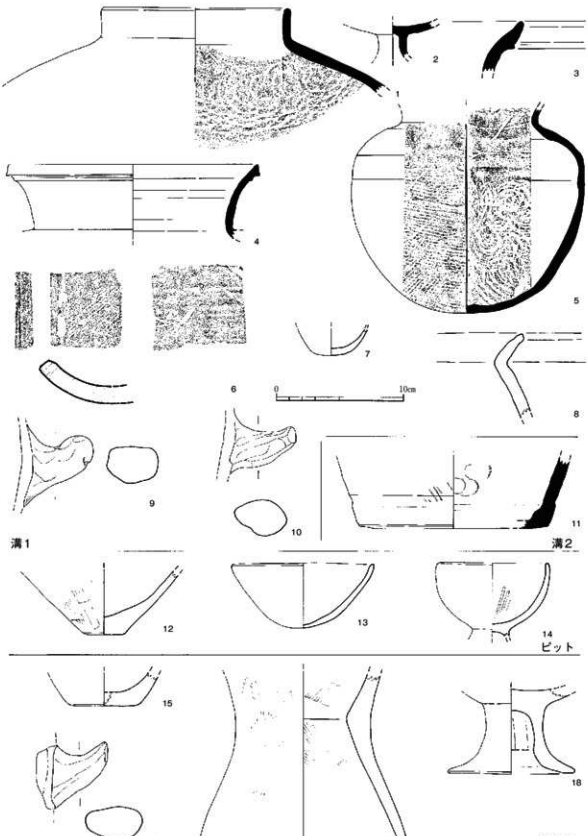
図化できる遺物に恵まれないが、須恵器小片が出土しており、時期は古代に収まると思われる。

6号溝（図版40、第68・82図）

調査区東際に位置する。V-3区の中で最も新しい遺構で、大部分は調査区外の現道下に存在する。調査では西側の立ち上がりを確認したに過ぎないが、幅は300cm程と想定でき、深さも現地表面よ



第82図　Ⅴ－３区１～６号溝土層断面図（１／40）



第83図　Ⅴ－３区１・２号溝、ピット、遺構面出土土器実測図（１／３）

り200cm程もある。埋土は下層はシルトであるが、中～上層は新しい時代の埋土であり、近代以降に埋められたものである。

5　その他出土遺物

ピット・遺構面出土土器（第83図）

12はP20出土の甕底部で、小さな平底を呈し外面はハケ調整を行う。13はP23出土の鉢で丸底を呈する。磨滅のため調整は不明。14はP30出土の高杯で、磨滅しているが内面は縦方向のミガキが確認できる。15～18は遺構面出土土器である。15は甕底部で平底を呈する。16は甑の把手部分で、ソケット状に胴部に差し込む部分が確認できる。17は大型の器台で、筒部中央は内側に強い稜を形成する。内外面ハケ調整を行う。18は高杯脚部で脚裾部は外反しながら開く。磨滅しているが脚部内面はナデによって仕上げる。

石・土製品（図版42、第84図）

V-3区からは少量ながら石製品、土製品も出土している。ここでは一括して報告する。1は5号竪穴住居跡出土の台石である。大きな片岩の破片で、上面のみ使用のため平滑になっている。2は6号竪穴住居跡出土の砥石で、欠損部が多いが最低1面の砥面が確認でき、使用によるスジも確認できる。3は2号溝出土の石製勾玉である。背部は断面がやや丸みを帯びるのみ対し、腹部は角が立つ。腹部は製作時の研磨痕が残る。孔は貫通しておらず少し掘りくぼめる程度である。4は9号竪穴住居跡出土の土玉である。一部欠損しているがほぼ球状を呈する。両側から孔を穿った痕跡が確認できるものの貫通しておらず、わずかにくぼむのみである。

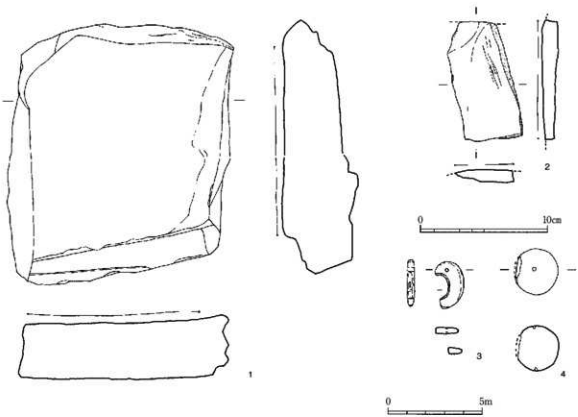
6　小結

本調査区においては、弥生時代後期終末から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡、古墳時代後期のカマドを有する竪穴住居跡や掘立柱建物跡、それと古代の溝や中世以降の溝と、大きく分けると4つの時期の遺構・遺物が確認できた。

全的的に造成による削平を大きく受けていたため、遺構の残り具合が悪く、竪穴住居跡も時期や規模が不明なものが多い。その中で6号竪穴住居跡は調査区外に延びるもののベッド状遺構を持つことが判明した。

古墳時代後期の遺構としては1号・2号掘立柱建物跡が特筆される。1号は4間×3間、2号は5間×4間の大型の総柱建物で、両建物跡は柱筋が通り一連のものと考えられる。柱掘方の径こそ小さいものの、1号掘立柱建物跡では床面に径15cm程の柱痕跡が残るものがいくつも見られ、それなりの荷重がかかった建物であったことが想定される。

古代の遺構としてはV-1区、V-2区から続く奈良時代の1号溝が注目される。本調査区においてL字状に屈曲することが判明し、大きな方形区画溝になる可能性が出てきた。ただ区画の中に同時期の建物は見られず、性格は現段階では不明とせざるをえない。また、詳細な時期は不明なものの、おそらく古代に収まるものとして3・5号溝、4号溝は平面がコ字状、もしくは方形に巡り注目される。いずれも内側に同時期の遺構はなく性格は不明であるが、本調査区は相当に削られていたことが想定できるため、何かしらの施設を囲繞する溝であった可能性は残る。



第84図　Ⅴ－３区出土石・土製品実測図（１・２は１／３、３・４は１／２）

第４表　Ⅴ－３区出土石・土製品観察表

番号	種類	出土位置	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
1	台石	５号竪穴住居跡	片岩	20.6	17.5	5.0	3233.8	
2	砥石	６号竪穴住居跡	砂岩	(9.5)	(6.0)	(1.1)	89.7	
3	石製勾玉	２号溝	片岩	2.5	1.5	0.4	2.1	
4	土玉	９号竪穴住居跡		径2.5			12.4	

VI　おわりに

V-1～3区では弥生時代終末から古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世、と大きく4つの時期の遺構・遺物が検出された。以下、時期ごとに成果を概観する。

弥生時代終末から古墳時代前期に関しては、V-1b区7・14号竪穴住居跡は、一辺5m以上の規模であり、残存する深さは古墳時代後期の竪穴住居跡と比べて深く、ベッド状遺構や屋内小溝・土坑などの屋内施設が良好に残存していた。14号では在地の土器とともに、瀬戸内系の影響を受けた土器も出土しており、他地域との交流がうかがえる。V-2区1号溝は方形区画をなす溝であり、区画に伴う遺構は確認されなかったが、溝から出土した土器から、時期幅は短く、短期間に廃絶したと考えられる。

古墳時代後期に関しては、V区のほぼ全域で竪穴住居跡が検出されるなど、各時期を通じて遺構数は最も多く、カマドを設置する住居跡が見受けられる。また、V-3区では総柱の大型掘立柱建物跡2棟が検出され、ともに柱筋が通り、中央間が広いという特徴があり、強い関係性がうかがえる。出土遺物がないため、建物の性格や集落との関係は不明だが、貴重な遺構である。

古代の遺構に関しては、V-1区で7世紀後半の官衙的な掘立柱建物跡群・大型土坑、V-2区では道路状遺構、V-1～3区にかけてL字状に屈曲する奈良時代の大規模な区画溝が検出された。掘立柱建物群と区画溝の関係について、V-1区1号掘立柱建物の正面は南西方向と考えられるが、V-1～3区にかけて検出された奈良時代の区画溝は南東方向を区画しており、掘立柱建物群とは組み合わず、時期的にも掘立柱建物群は区画溝に先行するため、同時併存は考え難い。なお、V-3区では他にも区画溝が検出されており、当該台地上に複数の区画が存在していたと想定される。一方、道路状遺構は調査区外に延びるが、延長上のⅡ-1区では削平されて、痕跡すらとどめていない。Ⅱ-1区では別方向の道路状遺構が検出されており、当該台地上には複数の道路が配置されていたと考えられる。この他、瓦が少量出土したため、瓦葺建物の存在が想定されるものの、検出された建物に葺かれていたものかどうかは不明である。

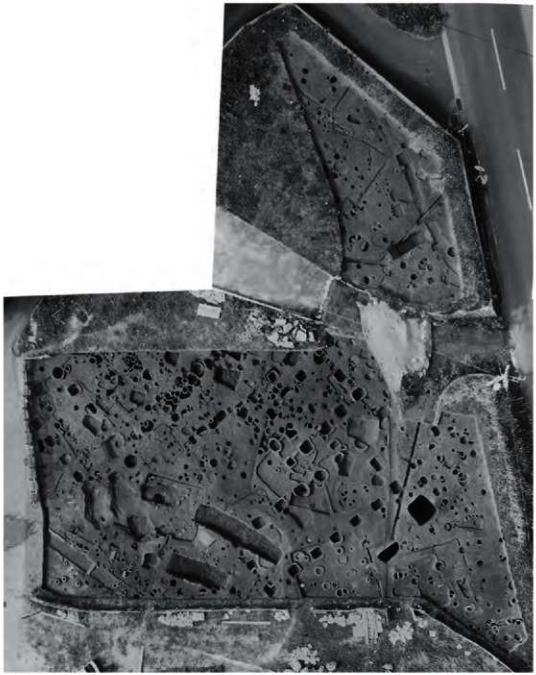
中世に関しては、V-1～3区において遺構密度は稀薄であるが、他の調査区では区画溝や土坑墓、井戸などが検出された。復元には至らなかったが、ピット群が建物になる可能性はある。

以上、成果を総括すると、弥生時代終末から古墳時代前期にかけて竪穴住居群が展開し始め、方形区画なども見られる。古墳時代後期は竪穴住居数のピークであり、大型掘立柱建物などの特徴的な遺構も存在した。7世紀後半から奈良時代にかけては、竪穴住居など一般集落を示す遺構は見られず、官衙的な大型掘立柱建物群や大規模な区画溝、道路状遺構などが出現する。他の調査区においても、京都郡大領を示すと考えられる墨書土器や「天平六年（西暦734年）」の木簡が出土するなど、古代の重要遺物が確認された。これらの遺構・遺物の性格については詳らかでないが、該期の遺構は広範囲にわたって分布するため、遺跡全体の遺構配置を明らかにする必要がある。

今回の調査成果で、特筆すべきは古代の官衙関連遺構である。当遺跡周辺には古代の重要港草野津が存在したと考えられており、草野津との関連も視野に入れて検討されるべきである。

従って、延永ヤヨミ園遺跡は古代豊前国の歴史を考える上で重要な遺跡であると言えよう。

図　版



1　V-1a・b区
全景（右が北）

2　V-1a区1号
竪穴住居跡
（南から）

図版２

1　V-１b区１・２・３号竪穴住居跡（南から）

2　V-１b区１号竪穴住居跡カマド

3　V-１b区４号竪穴住居跡（南から）

1　V-1b区4号竪穴住居跡カマド

2　V-1b区5・11号竪穴住居跡（東から）

3　V-1b区6号竪穴住居跡（南西から）

図版４

1　V-１b区６号竪穴住居跡カマド

2　V-１b区７・28号竪穴住居跡（東から）

3　V-１b区８・９・10号竪穴住居跡（南から）

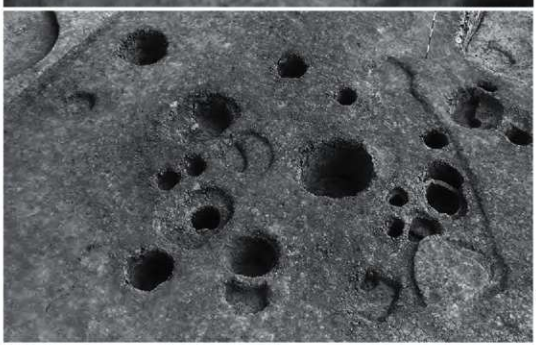
1　V-1 b区12号
竪穴住居跡
（南西から）

2　V-1 b区13号
竪穴住居跡
（東から）

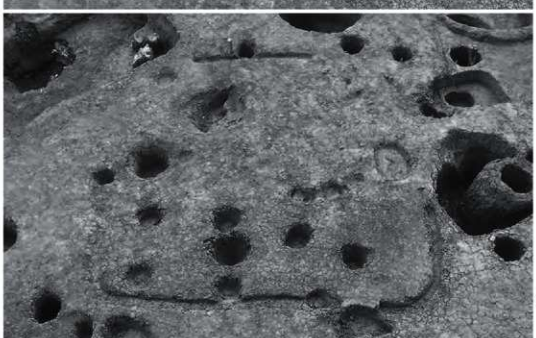
3　V-1 b区14号
竪穴住居跡
（西から）

図版6

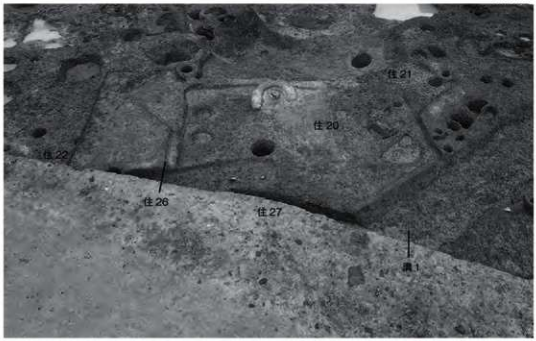
1　V-1b区15号竪穴住居跡カマド（東から）



2　V-1b区16号竪穴住居跡（西から）



3　V-1b区17号竪穴住居跡（北から）



1　V-1b区20・21・22・26・27号竪穴住居跡（南から）

2　V-1b区20号竪穴住居跡カマド

3　V-1b区23・24・25号竪穴住居跡（南東から）

図版８

1　V-１b区23号竪穴住居跡カマド

2　V-１b区１号掘立柱建物跡完掘（南西から）

3　V-１b区１号掘立柱建物跡柱穴断面

1　V-1b区2号掘立柱建物跡完掘（東から）

2　V-1b区2号掘立柱建物跡柱穴断面

3　V-1b区18・19号竪穴住居跡、3号掘立柱建物跡完掘（南東から）

図版10

1　V-1b区3号掘立柱建物跡柱穴断面

2　V-1b区1号土坑断面

3　V-1b区1号土坑遺物出土状況

1　V-1b区1号
土坑完掘

2　V-1b区2号
土坑断面

3　V-1b区2号
土坑完掘

図版12

第8図1

第8図2

第11図2

第15図19

第18図1

第18図19

第19図5

第19図4

第19図2

V-1b区1・4・7・14（1）号竪穴住居跡出土土器

第20図9

第18図15

第18図14

第18図9

第19図1

第33図1

第33図14

第33図16

第33図17

第35図1

第35図2

第35図7

第35図14

V-1 b区14号竪穴住居跡（2）、1・2（1）号土坑出土土器

図版14

第35図15

第38図12

第38図24

第35図18

第39図6

第35図19

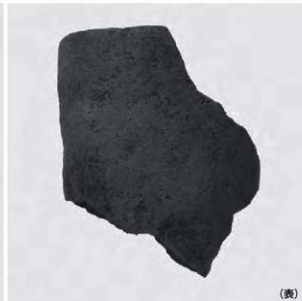
第39図10

第27図20

第39図22

V-1b区2（2）号土坑、ピット、遺構外出土土器

第40図1（裏）


（表）

第40図2（裏）

（表）

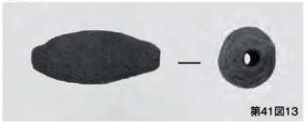
第40図5　第40図3　第40図4　（裏）

（表）

第41図6　第41図8　第41図9　第41図7　第41図10　第41図11　第41図12（裏）

（表）

図版16


第41図13

第42図1（表）

（裏）

第42図2

第42図7　第42図8（表）

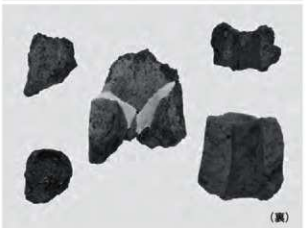
（裏）

第42図3　第42図4　第42図5　第42図6

第43図1　第43図2　第43図3

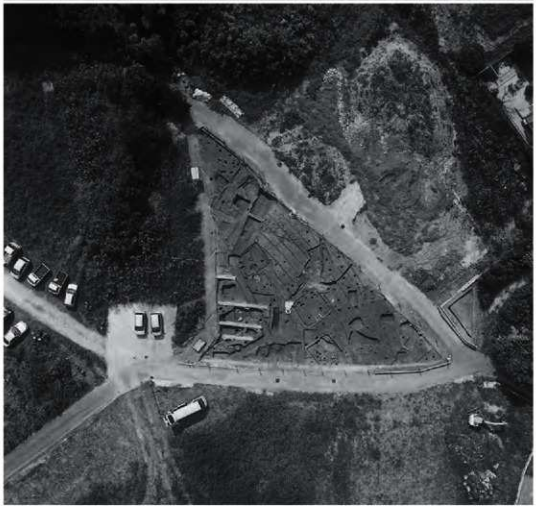
第43図4　第43図5

第43図6　第43図7　第43図8　第43図9　第43図10（表）


（裏）

V-1区出土土製品・石製品・鉄製品・鉄滓・鞴羽口

1　V-2区全景
（南から）



2　V-2区全景
（北から）

図版18

1　V-2区1号竪穴住居跡
（南東から）

2　V-2区2号竪穴住居跡
土器出土状況（南東から）

3　V-2区2号竪穴住居跡
（南東から）

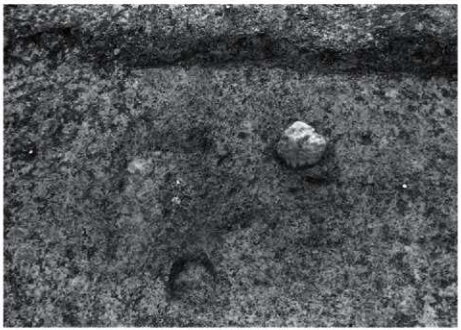
1　V-2区3号竪穴住居跡
（北東から）

2　V-2区4号竪穴住居跡
（北から）

3　V-2区5・6号竪穴住居跡
（西から）

図版20

1　V-2区7～9号竪穴住居跡
（南から）



2　V-2区7号竪穴住居跡カマド
（南東から）

3　V-2区7号竪穴住居跡カマド
掘方（南東から）

1　V-2区8号竪穴住居跡
カマド（南から）

2　V-2区8号竪穴住居跡
カマド掘方土層
（南東から）

3　V-2区8号竪穴住居跡
カマド掘方
（南から）

図版22

1　V-２区10号竪穴住居跡
（北から）

2　V-２区11号竪穴住居跡
（東から）

3　V-２区１・２号掘立柱建物跡
（南東から）

1　V-2区2号掘立柱建物跡（北から）

2　V-2区柵列跡（南西から）

3　V-2区1号溝（南東から）

図版24

1　V-2区1号溝コーナー部分
（南東から）

2　V-2区1号溝北辺土器出土状況
（南西から）

3　V-2区1号溝北辺土器出土状況
（東から）

1　V-2区1号溝西辺土層
（南から）

2　V-2区2号溝土層
（東から）

3　V-2区2号溝土層
（東から）

図版26

1　V-2区3号溝土層（北から）

2　V-2区3号溝（南東から）

3　V-2区道路状遺構（南東から）

第47図4

第52図5

第47図6

第52図6

第47図11

第52図12

第48図25

第52図13

第52図2

第56図2

V-2区2・4・5・8号竪穴住居跡出土土器

図版28

第56図7

第60図10

第60図1

第61図12

第63図34

第60図2

第63図35

第60図3

第63図36

V-2区11号竪穴住居跡、1号溝出土土器

第63図43

第63図45

第63図47

第64図1

第64図4

第64図6

第64図14

第64図15

第64図15内面

V-2区1号溝出土土器

図版30

第65図1

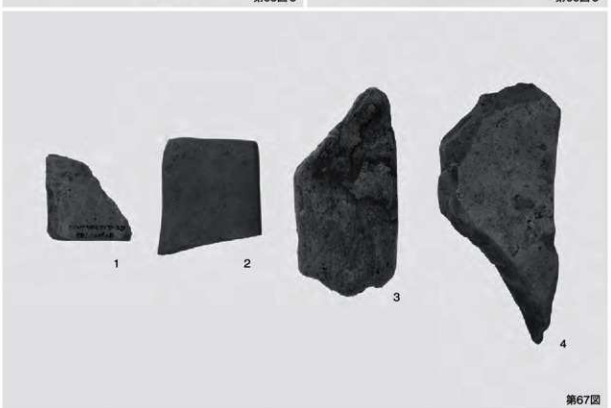
第65図7

第65図2

第66図2

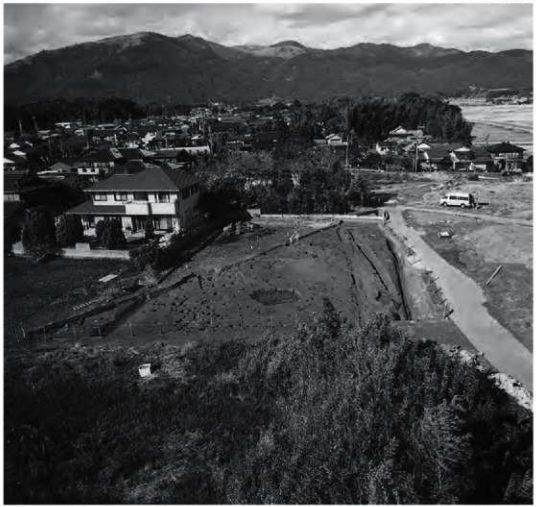
第65図3

第66図5



第67図

V-2区1号溝出土土器、V-2区出土石器



1　V-3区全景
（南東から）

2　V-3区全景
（北東から）

図版32

1　V-3区南側
（北東から）

2　V-3区南側
（北東から）

1　V-3区1号竪穴住居跡
（南から）

2　V-3区1号竪穴住居跡
カマド掘方（南から）

3　V-3区2・3号
竪穴住居跡（西から）

図版34

1　V-3区4号竪穴住居跡
（北から）

2　V-3区5号竪穴住居跡
（南西から）

3　V-3区6号竪穴住居跡
土器出土状況（南西から）

1　V-3区6・7号
竪穴住居跡（南西から）

2　V-3区8号竪穴住居跡
（南から）

3　V-3区9号竪穴住居跡
（東から）

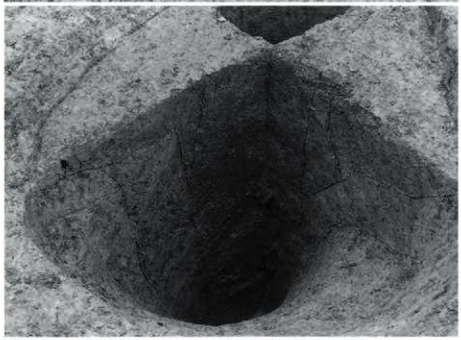
図版36

1　V-3区1号掘立柱建物跡
（北から）

2　V-3区1号掘立柱建物跡
P3土層（東から）

3　V-3区1号掘立柱建物跡
P3（東から）

1　V-3区1号掘立柱建物跡
P14（北から）

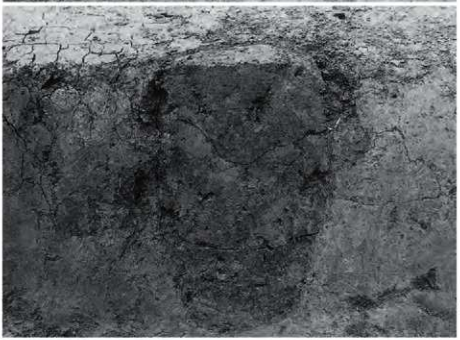


2　V-3区1号掘立柱建物跡
P15土層（南東から）

3　V-3区2号掘立柱建物跡
（北西から）

図版38

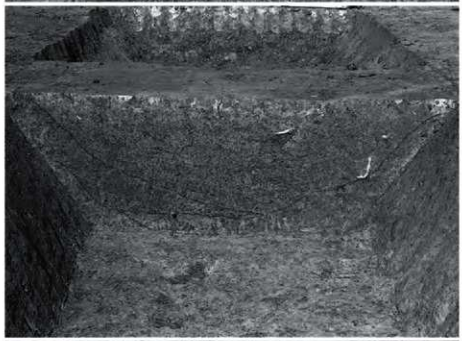
1　V-3区2号掘立柱建物跡
P19（東から）



2　V-3区2号掘立柱建物跡
P23土層（北西から）

3　V-3区1号溝（南西から）

1　V-3区1号溝コーナー部分
（南東から）



2　V-3区1号溝土層（南から）

3　V-3区1・4号溝土層
（南西から）

図版40

1　V-3区2号溝土層（南東から）

2　V-3区3号溝土層（南西から）

3　V-3区6号溝土層（北西から）

第75図1

第75図8

第75図6

第75図14

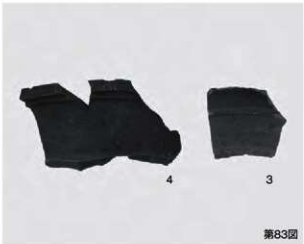
第75図7

第77図22

V-3区6号竪穴住居跡出土土器

図版42

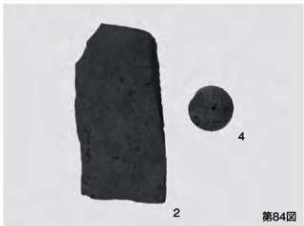
第83図1 外面　第83図1 内面



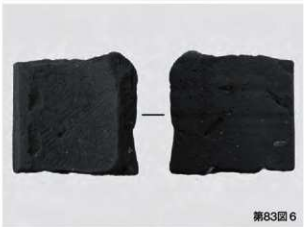
第83図

第84図1

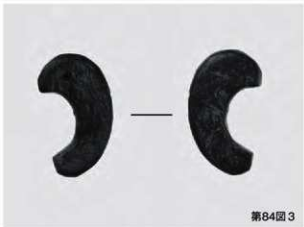
第83図5



第84図



第83図6



第84図3

V-3区1号溝出土土器、V-3区出土石・土製品

報 告 書 抄 録

ふ り が な	のぶながやよみそのいせき　ごのいち・に・さんく
書　　名	延永ヤヨミ園遺跡―Ⅴ区－１・２・３区―
副 書 名	県道直方行橋線道路改良事業関係埋蔵文化財調査報告１
シ リ ー ズ 名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第238集
編 著 者 名	宮地聡一郎・小澤佳憲・大庭 孝夫（編集）・坂本真一・岡田　論（編集・執筆）
編 集 機 関	九州歴史資料館
所　在　地	〒836-0106　福岡県小郡市三沢5208-3 TEL　0942-75-9575 FAX　0942-75-7834 E-mail kyureki@pref.fukuoka.lg.jp
発 刊 年 月 日	平成25(2013)年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
のぶながやよみそのいせき 延永ヤヨミ園遺跡	ふくおかけんふくつぐんあしやまち 福岡県行橋市吉国	402133	14115010	33°43′50″	130°56′47″	2009.6.26～ 2009.12.11、 2010.8.11～ 2011.3.17	約2,450㎡	県道直方行橋線道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
延永ヤヨミ園遺跡	集落 官衙	弥生時代 古墳時代 古代 中世	竪穴住居跡49棟、掘立柱建物跡７棟、土坑３基、溝12条、柵列２列、道路状遺構１箇所	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品、瓦、土製品、鉄製品、鍛冶関連遺物	・Ⅴ－１b区で古代の官衙関連施設と考えられる大型掘立柱建物跡３棟、大型土坑２基が検出された。 ・Ⅴ－２区では古墳時代初頭の区画溝と奈良時代の道路状遺構・溝が検出された。 ・Ⅴ－３区では古墳時代後期の大型掘立柱建物跡２棟が検出された。

要約	今回報告したⅤ－１～３区では、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期、古代（７世紀末～８世紀）、中世の各時期の遺構・遺物が発見された。弥生時代終末～古墳時代初頭と古墳時代後期には、大規模な集落が展開していたことが判明した。また、古墳時代後期の大型掘立柱建物跡や、古代の官衙的な配置をとる大型掘立柱建物跡３棟が検出されるなど、古墳時代後期から奈良時代にかけて重要な施設が存在していたことが確認された。周辺の調査でも古代の遺構や遺物が検出されており、遺跡が立地する丘陵上が当時重要視されていたことがうかがえる。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 24	登録番号 9

福岡県文化財調査報告書　第238集

延永ヤヨミ園遺跡
―V-1・2・3区―

平成25年3月29日

発行　九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208-3

印刷　(株)プリンティング コガ
大川市大字一木736-5